松本市文化財調査報告 №103

松本市大村

FURUYASHIKI

古屋敷遺跡

MAEDA

前田遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

松本市教育委員会

松本市大村

FURUYASHIKI

古屋敷遺跡

MAEDA

前田遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

松本市教育委員会

序

松本市の北東部に位置する大村地籍は、以前から開発に伴う発掘調査が幾度となく行なわれており、その全域に遺跡が分布していることが知られていました。このたび当地にほ場整備事業が及ぶことになり、その範囲内に前田遺跡と古屋敷遺跡が含まれていたことから、文化財の保護を図るため、松本市が女鳥羽川土地改良区より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成3年6月から同年10月の5か月間にわたって行なわれました。作業は梅雨、夏の猛暑、多量の湧水と軟弱な足場に悩まされるなど困難を極めましたが、参加者の皆様の並々ならぬ御尽力により無事終了することができました。その結果、弥生時代から古墳・奈良・平安時代に及ぶ大集落、中・近世の遺構を発見し、また同時期の土器などを多く得て、大きな成果を収めることができました。これらの資料は、今後地域の歴史解明に大変役立つものとなることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

例　　言

1．本書は平成３年度に行われた、松本市大字大村(おおむら)90番地一帯に所在する古屋敷(ふるやしき)遺跡、同じく116番地一帯の前田(まえだ)遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は平成３年度団体営ほ場整備事業大村・かりがね地区に伴う発掘調査であり、松本市が女鳥羽川土地改良区から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。

3．本書の作成は松本市から委託を受けた（財）松本市教育文化振興財団が行った。

4．本報告の内容は時間的な都合から遺構に限られている。遺物の報告は別の機会に行う所存であり、今回はご容赦願いたい。

5．本書の執筆は、第１章：事務局、第２章：太田守夫、第３章２節１：久保田剛、その他については直井雅尚が行った。

6．本書作成の作業分担は次のとおり。

遺構図整理：赤羽包子　　トレース：開嶋八重子

写真撮影（遺構）：高桑俊雄、市川　温、久保田剛

編集：直井雅尚

7．本書では調査結果の提示を重視したため、委託契約書、作業日誌等の事業の経緯を示す書類は掲載できなかったが、作成した測量図類、写真類、遺物とともに松本市立考古博物館が保管している。

8．松本市内には本遺跡と同一名称を持つ遺跡があり、これとの混同を避けるために遺跡名に所在する地籍名を冠して、本遺跡は「大村古屋敷遺跡」「大村前田遺跡」との呼称で一般的に用いている。

目　次

序
例　言
目　次……1
図目次……1
第1章　調査の経過
　第1節　事業の経緯と文書記録……3
　第2節　調査体制……4
第2章　遺跡の立地と地形・地質……7
第3章　調査結果
　第1節　調査の概要……10
　第2節　古屋敷遺跡の調査
　　1．住居址……13
　　2．掘立柱建物址……27
　　3．土坑……27
　　4．その他の遺構……28
　　5．墓　址……29
　第3節　前田遺跡の調査……30
　第4節　出土遺物の概要……31
第4章　調査のまとめ……32

図目次

第1図　遺跡の位置……5
第2図　調査地の範囲……6
第3図　土層柱状図……9
第4図　古屋敷遺跡第2面遺構分布……11
第5図　古屋敷遺跡第1面遺構分布……12
第6図　前田遺跡遺構分布……28
第7図　古屋敷遺跡第1・2号住居址……37
第8図　古屋敷遺跡第3号住居址……38
第9図　古屋敷遺跡第3・4・5号住居址……39
第10図　古屋敷遺跡第6・7号住居址……40
第11図　古屋敷遺跡第8・9号住居址……41
第12図　古屋敷遺跡第10号住居址……42
第13図　古屋敷遺跡第11号住居址……43

第14図　古屋敷遺跡第12・13・15号住居址……44
第15図　古屋敷遺跡第14号住居址……45
第16図　古屋敷遺跡第16号住居址……46
第17図　古屋敷遺跡第16・17号住居址……47
第18図　古屋敷遺跡第18・19・20号住居址……48
第19図　古屋敷遺跡第21号住居址……49
第20図　古屋敷遺跡第22・23号住居址……50
第21図　古屋敷遺跡第24・25・30号住居址……51
第22図　古屋敷遺跡第26・27・29・34号住居址……52
第23図　古屋敷遺跡第28・31号住居址……53
第24図　古屋敷遺跡第32・33号住居址……54
第25図　古屋敷遺跡第35・36・61号住居址……55
第26図　古屋敷遺跡第37・39号住居址……56
第27図　古屋敷遺跡第38・40号住居址……57
第28図　古屋敷遺跡第41号住居址……58
第29図　古屋敷遺跡第42・44・55号住居址……59
第30図　古屋敷遺跡第43・46号住居址……60
第31図　古屋敷遺跡第45・47号住居址……61
第32図　古屋敷遺跡第48号住居址……62
第33図　古屋敷遺跡第48・49・57号住居址……63
第34図　古屋敷遺跡第50・52・53号住居址……64
第35図　古屋敷遺跡第54・56・59・60号住居址……65
第36図　古屋敷遺跡第58号住居址……66
第37図　古屋敷遺跡第62・63・65・66・67号住居址……67
第38図　古屋敷遺跡第64号住居址・第1号建物址……68
第39図　古屋敷遺跡墓址……69
第40図　古屋敷遺跡土坑(1)……70
第41図　古屋敷遺跡土坑(2)……71
第42図　古屋敷遺跡土坑(3)……72
第43図　古屋敷遺跡土坑(4)……73
第44図　古屋敷遺跡土坑(5)……74
第45図　古屋敷遺跡土坑(6)……75
第46図　古屋敷遺跡土坑(7)……76
第47図　古屋敷遺跡土坑(8)……77
第48図　前田遺跡第1号住居址址……78
第49図　前田遺跡第2・3号住居址址……79

第１章　調査の経過

第１節　事業の経緯と文書記録

平成２年９月12日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
10月15日　平成３年度補助事業計画書提出。
平成３年５月７日　前田・古屋敷遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
６月５日　平成３年度団体営ほ場整備事業大村地区前田・古屋敷遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。
９月19日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
10月２日　平成４年度補助事業計画書提出。
10月９日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
10月12日　古屋敷遺跡埋蔵文化財拾得及び同保管証提出。
古屋敷遺跡発掘調査終了届（通知）提出。
10月15日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
11月１日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
11月20日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
11月21日　古屋敷遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
12月27日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
平成４年１月13日　平成３年度団体営ほ場整備事業大村地区前田・古屋敷遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査変更委託契約締結。
１月23日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
１月27日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
２月27日　平成３年度団体営ほ場整備事業大村地区前田・古屋敷遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査変更委託契約締結。
３月12日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。
３月31日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知
５月27日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
７月９日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
７月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
９月７日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
９月11日　平成４年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出。
９月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
９月24日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
12月10日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
平成５年３月12日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

第2節　調査体制

【平成3年度】発掘調査

調査団長　松村好雄（松本市教育長）

調査担当者　高桑俊雄、直井雅尚、市川温、木下守、三村竜一、久保田剛（社会教育課）

調　査　員　太田守夫、西沢寿晃、松尾明恵、宮嶋洋一、三村肇、森義直、横田作重

協　力　者　青木雅志、赤羽章、赤羽さだ子、赤羽紀子、浅輪敬二、天野雅代、飯田三男、飯沼重子、五十嵐周子、石合英子、因幡美津子、上原松子、内澤紀代子、内田造、内田和子、浦田長、大久保たつ子、大澤ちか子、大下恵二、大城よしの、大谷成嘉、大塚製装六、大塚俊司、大月育英子、岡崎祐司、岡田泰孝、岡部登喜子、小川亘、小山桂、開嶋八重子、片山治子、加藤貴光、印牧康太郎、河村陽一、上條菊子、上條妙子、上條ため子、上條尚美、木村隆敏、久根下三枝子、久保田健二、窪田由美、小池愛子、小池直人、小岩井美代子、輿喜義、小島茂富、小林甲子世、小林孝宏、小林寛幸、小松房子、小山幸行、斉藤政雄、坂本孝之、島崎和彦、須藤武、瀬川長廣、袖山勝美、高橋登喜雄、瀧澤隆男、滝沢館一、田口吉重、竹内智悟、武田睦恵、竹平悦子、田多井亘、田村かつよ、玉田幸久、土屋信一、土屋清一、堤加代子、鶴川登、仲沢剛志、中嶋秋子、中島新嗣、中村朝香、中村敦子、中村安雄、中村頴三、西村好、丹羽貴義、長谷川智子、服部誠一、服部寛、林和男、林原和秀、原とみ、原田賢一、原田吉一、平林薫、藤井源吾、藤井久子、藤井マツヱ、藤澤ミツ、藤本利子、降幡由香里、洞沢文江、本荘健一、松居浩二、松尾さだ子、松本伸司、松山千代子、丸山惠子、三沢元太郎、三井千明、三代澤武人、三宅康司、村田昇司、村山牧枝、甕國茂、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、矢島利保、山田昌子、横山小夜子、横山恒雄、横山真理、横山保子、吉澤克彦、吉田博一、吉田勝、吉原明子、輿曽井尋由、米山禎興、米山泰正

事　務　局　荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、関沢聡、竹内靖長（主事）、荒井由美、山岸弥生

【平成4年度】報告書作成

担　当　者　総括：直井雅尚

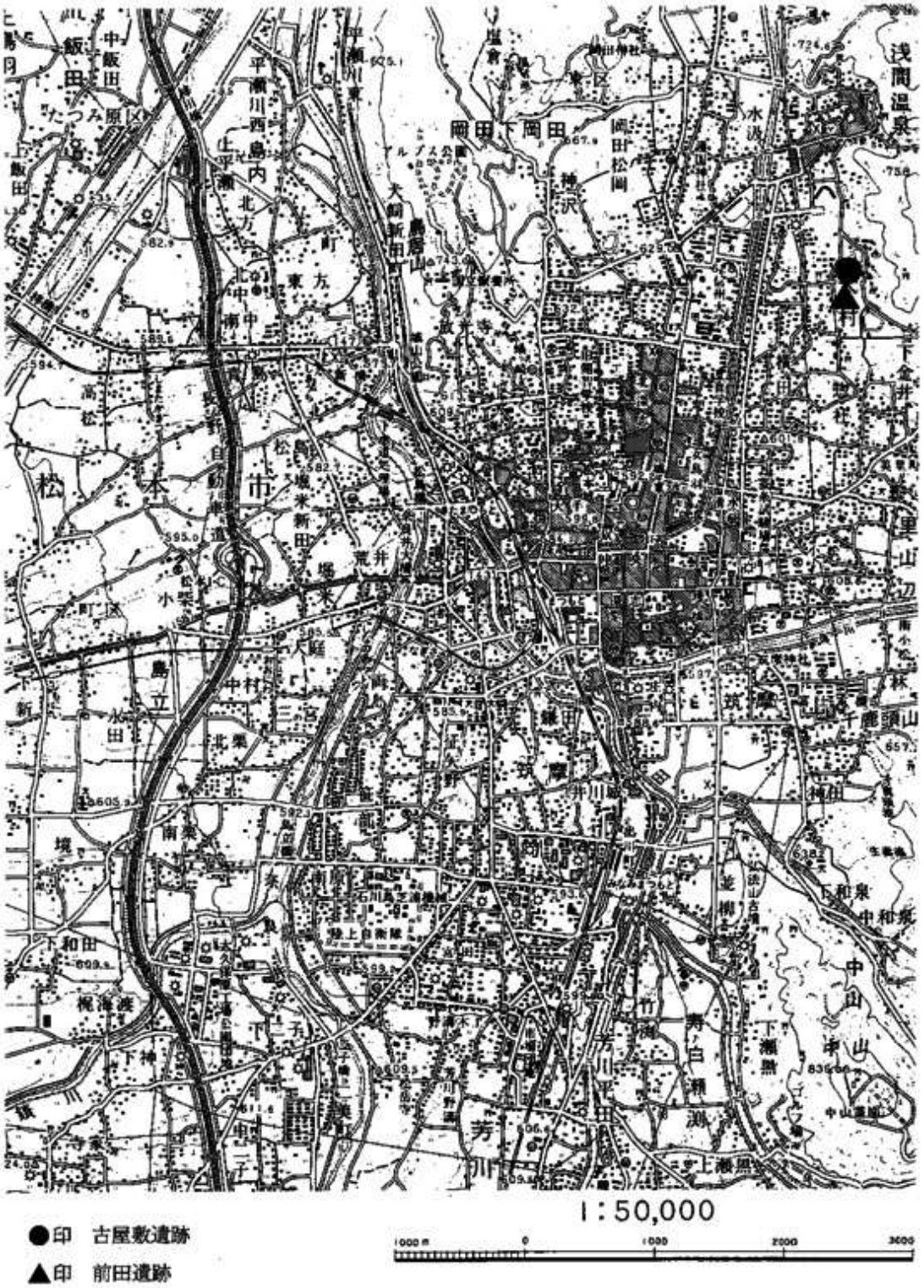
調　査　員　竹原久子、松尾明恵

協　力　者　赤羽包子、石合利加子、内澤紀代子、内田和子、上條尚美、久根下さやか、倉科祥恵、小松正子、高山一恵、滝沢龍一、竹平悦子、土橋幸子、堤加代子、直井由加理、中村朝香、林和子、洞沢文江、松尾さだ子、丸山惠子、水野桂子、三村康子、村松恵美子、村山牧枝、横山真理、横山保子、六川由美子、和田和哉

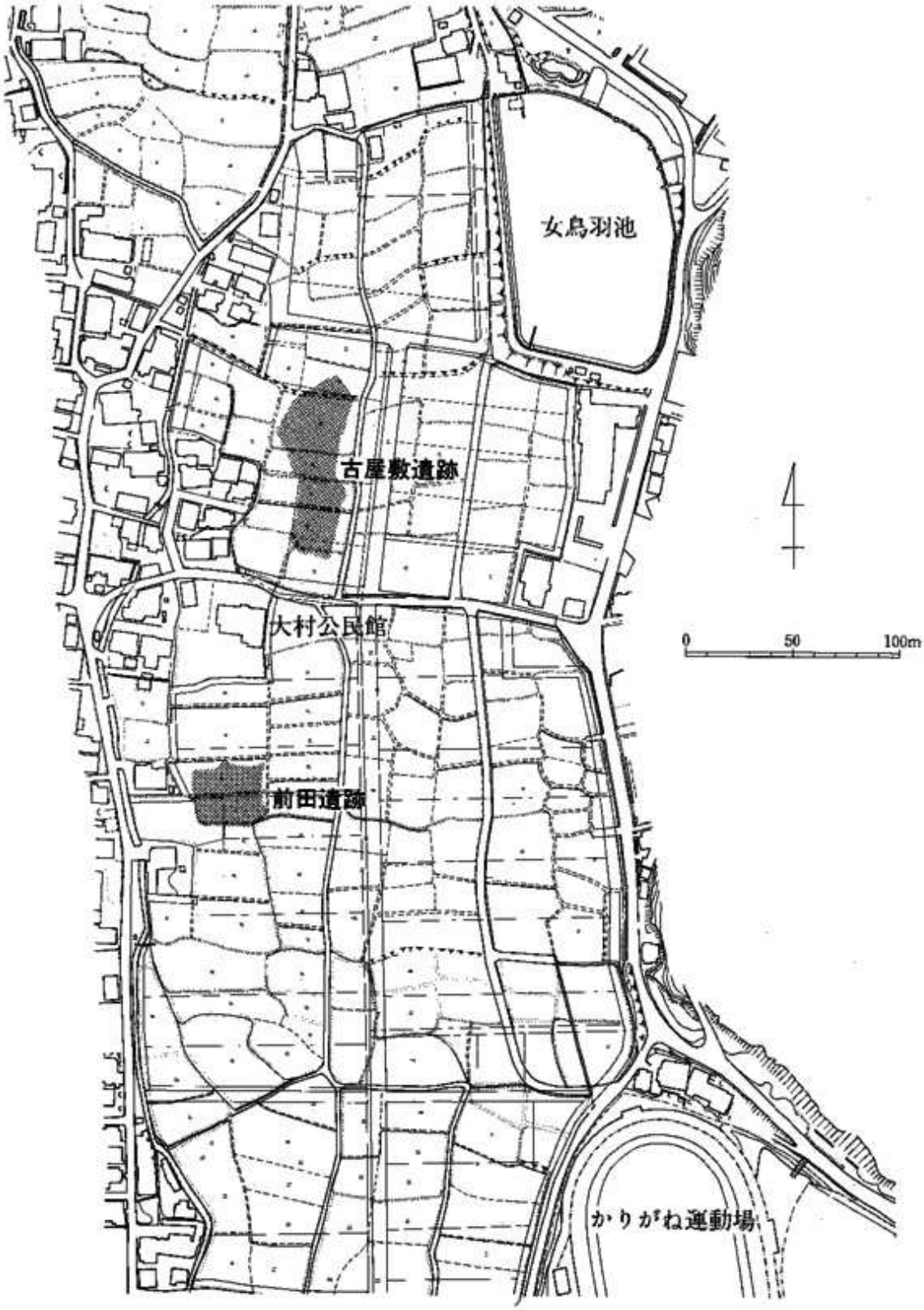
教育委員会事務局　島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

㈶松本市教育文化振興財団事務局：深澤豊（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

松本市立考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢聡（主任）、久保田剛（主事）、荒井由美、藤原美智子



第1図　遺跡の位置



第2図　調査地の範囲

第2章　遺跡の立地と地形・地質

1．位置と地形・地質

本遺跡は松本市大字大村集落の東沿い、標高625m 前後の南へ緩く傾く水田地帯に位置する。本遺跡を含む周辺の、山地・女鳥羽川や薄川の扇状地の地形形成については、すでに松本市文化報告№96「大村塚田遺跡」に述べられているので割愛し、発掘地とその周辺の地形地質について述べる。

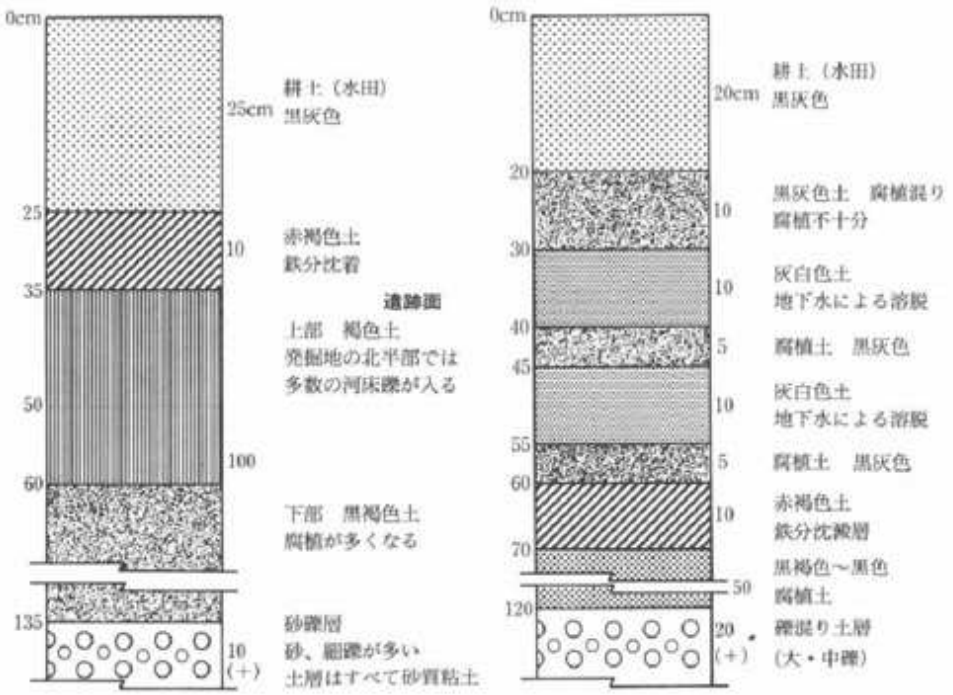
発掘地と周辺の地形は、女鳥羽川扇状地の堆積と、東山の山麓を通る断層帯の低地から成り立っている。現在の地形でみると、およそ用水せぎの大六川を挟んだ西側の大村集落ののる面が前者で、東側の水田地帯が後者にあたる。前者は後者より1～2 m 高い。女鳥羽川はたびたびのはん濫で、玢岩・安山岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・砂岩・礫岩などを含む多量の土砂礫を両岸に堆積させている。大村集落ののる面もその一つで、平均傾斜25/1000、N 4°W の方向の堆積層が形成されている。東側の低地は、浅間温泉から惣社へ続く湿地地帯で、平均傾斜20/1000、幅は大村地籍で230m、およそ N15°W の方向をもち、明らかに大村集落の面とは形成を異にしている。古くから開発されたところで、すでに北から柳田・大村・前田・塚田等の各遺跡の発掘が終了している。本遺跡はこれらの二つの地形面の接触点に近い水田地帯に位置し、発掘地内の堆積には双方の影響がみられる。低地の東は第3紀層の砂岩泥岩層からなる山地で、低地の堆積層へ影響を及ぼしている。またこの低地の地層は腐植に富み、黄褐色・赤褐色・黒褐色の土層が互層し、厚さは1 m を超える。土質は植壌土に（砂質粘土）で、東の山地の砂岩泥岩層の崩壊や沢筋の運搬の影響が大きい。このため耕土は粘質で保水力が強く、地下水位の上昇が加わって、湿田地帯となっている。土層断面では一般に第3図－2にみるように、上層から耕土20～30cm（黒灰色）、酸化鉄の薄い黄色の沈殿層・黄色の斑鉄、厚い褐色～黒褐色土層（腐植を含むほか、灰白色の溶脱層を挟む）、大・中・細礫からなる河床礫層の順序の堆積を示している。また下底の粘土の中には、古代から昭和まで窯業生産に利用されたものもある。この土層への女鳥羽川の流れ込みは、低地の西側各所でみられ、前田遺跡付近では延長100m（方向 N30°W）に及ぶものもある。土層断面では表土や地下30～40cm、150cm などでみられ、礫の大きさ、礫種の構成には違いがある。土層は東へ寄るほど薄く、女鳥羽川の影響を受けることが少なくなるが、場所によって堆積時や堆積の量が異なるため、遺跡の立地には堆積土層の相互の比較が重要となる。

次に地下水位の変動は遺跡の立地に関係をもつと思われる。この湿田地帯は、古くから夏季に水不足となり、特に稲の植え付けに苦労するなど、干ばつの被害が多くの記録に残されている。山麓に沿う真観寺池、大村池（女鳥羽池）、雁金の池（干拓）、横田池（干拓）は、江戸時代中期から干ばつ対策として、順次造成されてきた用水池である。一見不思議に思われるが、この場所が少雨地

域であること、女鳥羽川を始め、多くの小流の源流の山が浅いことを、干ばつの原因としてあげている。たまたまこの調査が行なわれていた平成3年9月中旬過ぎは、秋雨前線の前ぶれの降雨期となり、地下40～50cmのほとんどの住居址跡内に湧水が流れ、これを排水しながら発掘を進める状況であった。この増水期の状況を発掘地周辺であたってみると、西隣の水田跡では地下30cmに、南側や東側の水田跡では地下30～40cmに湧水があった。また南側では腐植土層内の地下30～40cmに、地下水による灰白色の溶脱還元層が観察された(第3図－1)。暗きょ排水施設は、発掘地、周辺とも同様に地下40～50cmに設けられていた。ここで増水期と渇水期の状況を比較するために、同じ地形面上で渇水期に発掘された大村塚田遺跡（平成2年11月～同3年2月、本遺跡の南方550m）の報告書によってみると、このときの湧水は地下70cm前後と示されていて、明らかに上下の移動とその差が読み取れる。さらに注目されるのは、第3層（20～40cm）に地下水による溶脱還元層（灰褐色）と、第5層に溶脱還元層（暗赤褐色）が存在することで、本遺跡周辺の土層（第3図－2）と一致している。このことからも地下水位の上下移動を認めることができる。地下水位の上下移動は単に季節的だけでなく、年代的な増水期、渇水期（減水期）もあり、遺跡の立地に影響を与えていたことが考えられる。今回の住居址跡内の地下水位が、単に季節的なものか、住居址跡の成立時代の地下水位がさらに低かったものか興味ある問題である。

2．発掘地内の堆積（第3図参照）

発掘地は大村集落に沿っているため、女鳥羽川の影響が大きくあらわれている。中央部から北部へかけ、上部の土層への河床礫の混在が多くなる。特に北西部は氾濫の礫層を思わせるほどで、流入の方向はN30°W、女鳥羽川からの堆積を示している。この河床礫は耕土（水田）20～30cm下の住居址跡の層に広く散在し、下底の河床礫層に対し、上部河床礫である。礫の大きさは、大・中・細礫を混じえた円礫・亜円礫（径25cmが最大）である。礫種は玢岩・安山岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・第3紀層の砂岩・礫岩で、女鳥羽川系統のものである。遺跡内に持ち込まれた石は女鳥羽川系統であるが、一般に散在する石より径が大きいので識別できる。南部は耕土下の土層(黄褐色～黒褐色、下部に行くほど腐植が多くなる砂質粘土）が150cmと厚く、この上部に遺構が発見されている。礫の混在が少なく、下底に上部河床礫と時代を異にする、まとまった礫層が存在する。礫の構成は上部河床礫とほとんど同じであるが、安山岩と緑色凝灰岩が含まれていない。また古生層起源の粘板岩・チャート・硬砂岩の細礫の円礫（海石）を含む、多数の細礫と砂（細・粗砂）が目立つ。この下部河床礫層は、前田遺跡周辺や発掘地の東側でもみられ、低地に共通の堆積と考えられる。ただ低地の中央や、前田遺跡周辺、塚田遺跡の堆積層と異なるのは、耕土の下の厚い土層中に、灰白色の溶脱層と赤褐色の沈殿層をもたないことである。この違いは発掘地が、低湿地の中心から離れた女鳥羽川の影響を受けやすい場所に、立地したためと考えられる。


0cm
25cm
耕土（水田）
黒灰色
25
10
赤褐色土
鉄分沈着
35
遺跡面
50
上部　褐色土
発掘地の北半部では
多数の河床礫が入る
100
60
下部　黒褐色土
腐植が多くなる
135
砂礫層
10
(+)
砂、細礫が多い
土層はすべて砂質粘土
1．古屋敷遺跡
0cm
20cm
耕土（水田）
黒灰色
20
10
黒灰色土　腐植混り
腐植不十分
30
10
灰白色土
地下水による溶脱
40
5
腐植土　黒灰色
45
10
灰白色土
地下水による溶脱
55
5
腐植土　黒灰色
60
10
赤褐色土
鉄分沈殿層
70
黒褐色～黒色
50
腐植土
120
20
(+)
礫混り土層
(大・中礫)
2．前田遺跡の東
(低湿地の中心)

第3図　土層柱状図

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

1．古屋敷遺跡

調査地点は松本市大字大村88番地から90番地一帯の水田で、これは大村地区公民館のすぐ北にあたる。調査期間は平成3年6月3日から10月4日までの124日間。調査面積は1630m²だが検出面が2枚あったため実質の調査面積は3260m²に及ぶ。発見された遺構は次のとおり。ただし各遺構の時期は遺物が未整理のため、発掘調査時の所見に基づく推定である。

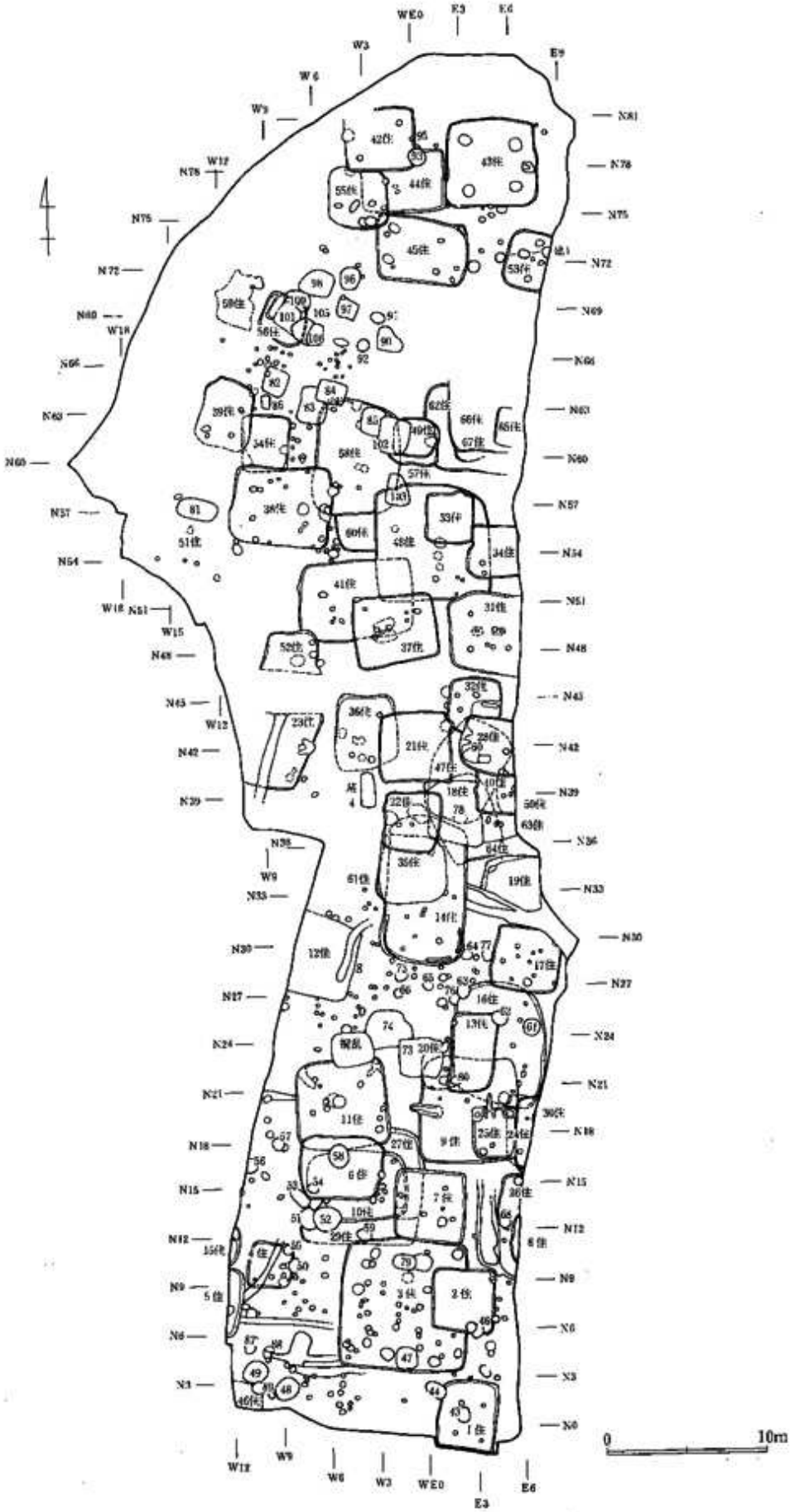
竪穴住居址67軒	弥生時代後期17軒、古墳時代中期7軒、古墳時代後期8軒
	古墳時代末期1軒、奈良時代2軒、平安時代25軒、時期不明7軒
掘立柱建物址1棟	奈良～平安時代
墓　址　4基	平安時代1基、中世3基
土　坑　105基	平安時代～中世
ピット　525基	古墳時代～中世

遺物は各遺構、検出面から多量に出土した。土器には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器があり、総量は整理用コンテナー48箱になる。緑釉陶器も2点出土している。主体は弥生時代後期・古墳時代中～後期の土器と、奈良・平安時代の土器陶器類である。石器・石製品は、石棒・凹石・石皿・打製石斧など縄文時代遺物が多いが、扁平片刃石斧・石包丁・浮子・管玉（弥生時代）、砥石（弥生時代以降）も見られる。古瓦は平瓦の破片が3点、鉄器・鉄製品は刀子・釘・鉸具など15点、金属製品は銅鏃・八稜鏡・刀装具と銭貨37点、土製品では土錘1点が出土している。そのほか第1号・第4号墓址には人骨が遺存した。また弥生時代を中心とした各遺構の覆土から獣歯・獣骨が少量出土した。平安時代後期の第38号住居址からは炭化材に混じって炭化米が得られている。

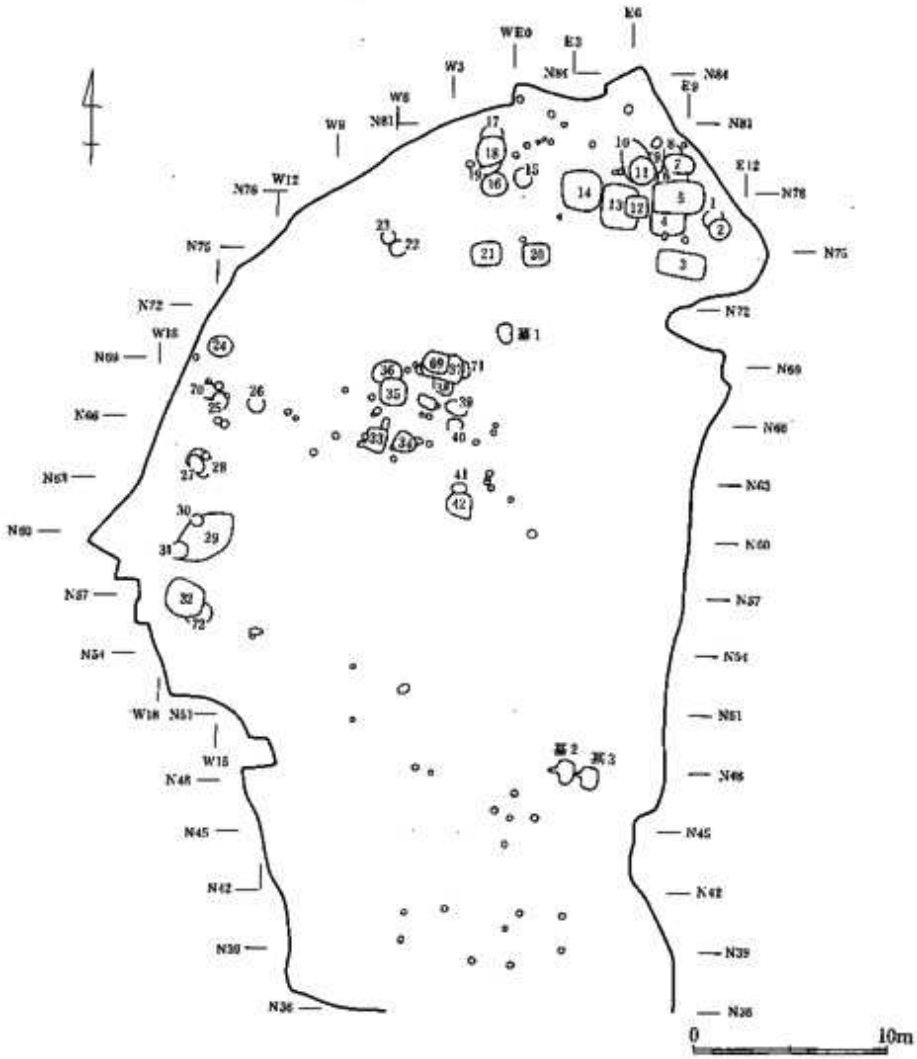
全体的な所見としては、狭い調査面積にもかかわらず多時期にわたる多数の遺構が密集していたことが挙げられる。付近に良好な生産域（水田など）を持つ、居住の適地であったのだろう。また遺物内容が良いことも重要である。特に八稜鏡を出土した第38号住居址や、緑釉陶器の椀を伴った第4号墓址など平安時代の遺構に際立ったものがある。

2．前田遺跡

調査地点は松本市大字大村116番地周辺で、古屋敷遺跡の調査地から約100m南方にあたる。調査



第4図　古屋敷遺跡第2面遺構分布



第5図　古屋敷遺跡第1面遺構分布

期間は古屋敷遺跡と併行しており、平成3年6月3日から10月4日まで124日間。調査面積は280m²である。

発見された遺構は、竪穴住居址3軒のみであった。平安時代が1軒、他の2軒は古墳時代末期～奈良時代に属すると推定される。出土した遺物は住居址に伴うもので、遺構と同時期の土器類に限られる。量は整理用コンテナーに2箱ほどである。

検出された3軒の住居址は1か所で重複して存在し、周囲の調査区には遺構のない部分が広がっていた。本遺跡は古屋敷遺跡と同一の地形面上にありながら、100mを隔てたくらいで遺構の密集度がこれほど異なるのは驚きであった。

第2節　古屋敷遺跡の調査

1．住居址

(1)第1号住居址（第7図）

調査区の南東隅に位置する。第43･44号土坑、5基のピットに切られる。南北4.4m、東西3.7mの方形を呈し、床面積15.5m²を測る。主軸方向はN－2°－Eを指す。壁高は27cmで、やや斜めに掘り込まれている。床面は黄褐色を呈しており、堅く良好な状態であった。4個検出されたピットは、位置から見て主柱穴に相当する。また43土に切られる焼土が炉であったと考える。

獣歯の出土がある。本址の時期は弥生時代後期である。

(2)第2号住居址（第7図）

調査区の南東部に位置し、第3住居址を切り、第46号土坑とP_{69}のほか7基のピットに切られる。遺構の東半部は当初より把握していたが、西半部は3住の掘り込み時に判然とした。規模・平面形は南北4.1m、東西3.7mの方形を呈し、主軸方向はN－90°－Eを示す。床面積は14.4m²、壁はほぼ直に掘り込まれており、壁高は27cmを測る。床面は黄褐色土で、堅く良好な状態であった。3住の床面より5cmほど下がったところに作られている。また中央付近の南北に7～10cmくらいの段があり、東半部が低くなっている。この部分は土層断面で考えると、埋め戻した可能性がある。覆土は灰色系で上層には鉄分の沈殿がある。施設はカマドが東壁北寄りに設けられていた。壁を掘り込んだカマドで袖石が片側に残っていた。掘り込みは浅い。幅60cm、奥行30cmの規模をもつ。

遺物量は少ない。時期は平安時代後期である。

(3)第3号住居址（第8・9図）

調査区南端に位置する。第2・7号住居址および第47・79号土坑に切られる。基盤土直下で検出されたため、東側では既に床が露出していた。主軸方向はN－5°－Eを指し、平面形は南北8.0m、東西7.7mと大きく、隅丸方形を呈する。プランは西壁部を除き、明瞭に捉えられた。壁は高さ11cmを測る。覆土は焼土小塊と炭化物が混入する褐色土の単層である。床面は黄褐色土で、周辺部以外は堅く良好な状態であった。床面積は61.5m²を測る。床面の中央やや北寄りに不整円形の地床炉が設けられている。炉南側に長楕円の石（炉縁石）を置いてあり、長径68cm、短径60cmの規模をもつ。ピットは合計で43個が検出された。この中でP_1～P_4が主柱穴と予想され、P_5は貯蔵穴になろうか。

遺物は北壁際中央に高杯、甕、鉢、壷などを中心に約30個体が遺存する。他のものは床面近くに散発的に出土した。なお本址は炭化物、焼土の多さから焼失住居と認められる。古墳時代中期の遺構である。

(4)第4号住居址（第9図）

調査区の南西部に位置し、第50・55号土坑、第2・3号溝に切られる。南北2.8m、東西2.7mの方形を呈し、床面積は6.9m²であった。主軸方向はN－90°－Eである。壁は8cmと浅く、やや直の立ち上がりが確認される。床面は淡い黄褐色土で、若干の堅さがあるのみであった。東壁中央に確認した焼土がカマドの痕跡と思われるが、50号土坑に大半を破壊されており、詳細は不明である。ピットは全部で5個検出した。

時期は出土遺物より平安時代後期と推定する。

(5)第5号住居址（第9図）

調査区の南西部に位置するが、西側の大半は区域外のため未確認である。第2・3・4号溝に切られる。現況で南北4.2m、東西1.0mを測る。平面形は方形か長方形を呈するものと推定される。壁は直に掘り込まれており、壁高は30cmを測った。3層に分かれる覆土は茶褐色土粒混入の灰褐色土、灰黄褐色土、茶褐色土塊混入暗褐色土であり、本址を切る2溝・4溝も土層で観察できる。床面は黄褐色土であるが、周囲に当たるためか、あまり堅くない。炉は見られず、おそらく区域外にあるものと思われる。ピットを1個検出した。

弥生時代の住居と推定される。

(6)第6号住居址（第10図）

調査区南側やや西寄りに位置する。第10・11・27・29号住居址を切り、第53・54・58号土坑に切られる。本址は長方形で、南北4.0m、東西5.0m、床面積18.8m²を測る。主軸はN－90°－Eに取る。立ち上がりはなだらかに見え、残存壁高は10cmであった。床面は南半部で確認しにくく、掘りすぎてしまった。カマドは石組みで東壁北隅に設けており、袖石の残骸を確認した。

遺物は比較的少ない。平安時代後期の住居址である。

(7)第7号住居址（第10図）

調査区南側やや東寄りに位置する。第3・10・27・29号住居址を切り、数個のピットに切られている。南北4.6m、東西4.4mの方形を呈し、床面積19.5m²を測る。主軸方向はN－90°－Wである。残存壁高14cm、掘り込みはやや斜めになっていた。西壁中央に設けられたカマドは石芯粘土製である。ピットは5個検出した。このうち方形プランのP_4は60×51×31cmを測り、暗褐色の覆土には炭化物・焼土粒が混入している。遺物はカマド南側に多い。土師器の杯・椀、灰釉陶器の椀が出土している。時期は平安時代後期である。

(8)第8号住居址（第11図）

調査区南側東端に位置する。第26号住居址を切り、東側の大半は調査区域外にかかっているため未確認である。現況で南北3.0m、東西0.5mを測る。平面形は推定できない。掘り込みはなだらか、残存壁高は18cmを測る。床面は黄褐色土でやや堅い。施設は検出されなかった。遺物が少量であったため、時期は判定できない。

(9)第9号住居址（第11図）

調査区南側の東寄りに位置する。第16・20・30号住居址を切り、第13・24・25号住居址および第73号土坑、多数のピットに切られる。主軸はN－82°－Wを向く。南北6.6m、東西5.7m、床面積37.9m²を測り、平面形は方形を呈する。壁はやや斜めで、壁高は14cmを測る。覆土は暗褐色土であるが、ローム塊が混入するもの、加えて炭化物を多量に含むものとに分けられる。東には切り合う24住の覆土（褐灰色土）が見える。床面は黄褐色土で、西南部で特に堅く良好なものであった。西壁中央に煙道をもつカマドがある。長い袖部の残りもよく、地山を掘り込んだ状況が明瞭に捉えられた。幅42cm、奥行110cm、煙道は65cmを測る。ピットは9個検出した。P_1あるいはP_2が主柱穴の一部となろうか。

遺物は土器が主体で、土師器杯・高杯、須恵器が出土している。時期は古墳時代後期である。

(10)第10号住居址（第12図）

調査区南側中央に位置し、第6・7号住居址に上部を壊され、第51～54・58号土坑に切られる。第27・29号住居址とも重複するが、新旧関係ははっきりしない。主軸はN－90°－Eを指す。平面形は各辺がわずかに丸味をもつ隅丸長方形で、南北4.5m、東西6.2m、床面積35.5m²を測る。壁は直にしっかりと掘り込まれており、壁高は34cmを測る。北から東にかけての壁直下で周溝が断続的に確認された。床面は黄褐色を呈し、全体に堅く良好である。ピットは全部で16個検出した。位置・規模からみて、P_1・P_3・P_8・P_6とP_1・P_3・P_9・P_{16}という並びが主柱穴に相当しよう。前者から後者への拡張がなされたと思われる。また炉も3基見つかっており、それぞれP_1・P_3の間（炉$_3$）、P_{16}・P_9の間（炉$_1$）、P_8・P_9の脇（炉$_2$）に位置する。いずれも地床炉である。炉$_3$を初期住居のもの、炉$_2$は副炉、炉$_1$を拡張後に設けたものと解釈した。また西壁際のP_4が180×88cmと大きく、貯蔵穴を思わせる。

遺物は甕・壺が出土している。時期は弥生時代後期である。

(11)第11号住居址（第13図）

調査区南寄りに位置する。第6号住居址に切られ、第27号住居址を切る。後世の撹乱（廃棄穴と見られる）が北壁東半を壊している。隅丸方形のプランを呈し、規模は南北5.4m、東西5.6m、床面積は29.3m²である。主軸はN－100°－Eを示す。壁は良好な部分では直に立ち上がり、壁高は23cmを測った。覆土はローム塊・焼土塊混入の暗褐色土が主である。床面は黄褐色土でほぼ全面にわたって堅く良好である。炉は地床炉で中央西寄りに2基見つかっている。炉縁石をもつ炉$_1$を新しいものと考える。なおピットは6個あるが、配置・規模などからみて、主柱穴に該当するものは認められない。

壁際に3か所ほど焼土面が広がり、北東部床上にわずかに放射状を呈して、炭化材が残る。炉の上層にも焼土層の広がりが観察されており、焼失住居の範囲で捉えた方がよいかもしれない。また土器が炉の西側一帯と東南隅から多く出土している。古墳時代中期に相当する。

⑿**第12号住居址**（第14図）

調査区ほぼ中央部の西端に位置し、西区域外へ続く。上面に後世の新しいピットが見られた。著しく削平されて、壁の立ち上がりもわずか3 cmしか確認できない。南北4.9m、東西は現況で3.8m、床面積25.0m²を測り、平面形は方形になるものと推定される。床面は黄褐色土で、全面が堅く良好である。炉は中央部の焼土であろうが、ピットに切られており、断定できない。

出土遺物は土器が少量である。これらから古墳時代中～後期の住居址であると推定される。

⒀**第13号住居址**（第14図）

調査区中央の南東寄りに位置する。第9・16・20号住居址を切り、第62号土坑、P_{252}に切られている。南北4.9m、東西2.9mを測り、平面形は隅丸長方形であるが北側の方がやや幅広い。床面積は13.5m²、主軸はN－10°－Eを向く。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存壁高は15cmを測る。覆土は単層で少量の炭化物と茶褐色土塊が混入する灰色土である。床面の状態は堅く良好で、黒褐色を呈していた。本址に伴うと見られる施設の検出はない。覆土の状況やカマド等が見られない点から住居址というより竪穴状遺構として扱うべきであろう。わずかに出土した土師器から平安時代と考えたが、さらに下る可能性もある。

⒁**第14号住居址**（第15図）

調査区中央に位置する。第18・22・35号住居址に切られ、第64号住居址を切る。また第61号住居址とも重複しており、本址の方が新と見られる。南北9.0m、東西5.2mの短辺が張り出す隅丸長方形を呈し、主軸方向はN－0°を指す。壁は高さ33cmで、直にしっかりと掘り込まれている。また南壁直下に断続的に周溝が巡る。床面は黄褐色土で堅く良好な状態であった。床面積は42.1m²を測る。主柱穴はP_7・P_2・P_6・P_{18}・P_{16}・P_9の6本が想定されるが、P_9の代わりにP_8も考えられる。地床炉が2基設けられている。南部の西寄りの炉$_1$とP_6・P_{15}間の炉$_2$で、炉$_1$は副炉であろう。

遺物は概して少ないが、西壁際中央から甕、壺の一括品が出土した。本址は弥生時代後期の遺構である。

⒂**第15号住居址**（第14図）

調査区の南西端に位置し、ほとんどは区域外にあるため、未確認である。現況で南北2.4m、東西0.5m、規模・平面形は全く不明である。第3号溝と重複する。厚さ約20cmの耕作土下に暗褐色土層があり、下部にはローム塊混入暗褐色土層が見える。床面は黄褐色土であった。

遺物は少量の土器が出土したのみである。平安時代の住居址と推定されるが、大形の土坑か竪穴状遺構の可能性もある。

⒃**第16号住居址**（第16・17図）

調査区の南西部に位置し、第9・13・24・25・30号住居址に上部を破壊され、第20号住居址とも重複する。平面形は北・東壁が張る歪んだ隅丸長方形で、南北7.7m、東西5.8m、床面積38.0m²を測り、主軸はN－5°－Eに取る。残存壁高は最大で44cm、直にしっかりと掘り込んである様子が確

認できた。床面は黄褐色土を呈し、平坦で堅く良好な状態であった。ピットは26個を検出した。そのうち主柱穴にはP_{21}・P_{17}・P_6・P_{11}とP_{21}・P_{17}・P_5・P_{25}との組合せが相当すると考えられる。おそらく前者から後者への建て替えによる拡張があったものと思われる。炉は地床炉で南北それぞれの柱穴間に1基ずつ計2基があり、建て替えに伴う移設であろう。

遺物は土器が北半部の覆土から少量まとまって出土したのみであるが、銅鏃が1点得られている。弥生時代後期の住居である。

(17)第17号住居址（第17図）

調査区中央の東端に位置する。第16号住居址を切り、北東隅は排水用の溝で壊されている。南北3.8m、東西4.1mの方形で、現況床面積15.8m²を測る。主軸はN－95°－Eに取る。立ち上がりは直に近く、残存壁高は9 cmであった。床面は黄褐色で、特に堅く良好であった。水路で破壊された角に焼土が見え、カマドは東壁北隅に設けてあったと思われる。全容は確認できなかった。ピットは10個検出した。

遺物は羽釜、灰釉陶器椀などの土器が少量出土した。平安時代後期の住居址であろう。

(18)第18号住居址（第18図）

調査区中央やや北東寄りに位置する。第22・40・63号住居址、第78号土坑に切られ、第14・64号住居址を切る。このほか35住（平安後期）、47住（弥生）も場所によっては重複する可能性がある。南北3.9m、東西3.3mの方形を呈し、床面積12.6m²を測る。主軸方向はN－5°－Wである。残存壁高14cm、掘り込みはやや斜めになっていた。78土を掘り下げた際に焼土を確認し、ほぼ中央に地床炉があることがわかった。床面は軟弱で判然とせず、掘り過ぎてしまったため、炉のレベルや土層断面を観察して捉えた。

遺物は少量の土器が出土している。時期は古墳時代中期と推定される。

(19)第19号住居址（第18図）

調査区の中央東端に位置する。東は区域外、または現場内の排水溝を掘った部分に当たっており、調査不可能な部分が多い。現況で南北3.1m、東西3.4mを測り、平面形は推定できないものの隅の様子から方形を予想させる。掘り込みはなだらかで、残存壁高は31cmを測る。床面は黄色土で非常に堅く良好であった。施設は検出されなかったが、南西の隅に焼土が確認されている。

床面中央部に若干の礫の投入と少量の土師器と灰釉陶器の出土が認められた。時代は平安時代後期である。

(20)第20号住居址（第18図）

調査区中央南寄りに位置し、第9・13・16号住居址、第73土坑に切られる。そのため西半分を確認したのみで、主軸も不明である。南北2.9m、東西は現況で2.2mだが、平面形は隅丸長方形と推定される。掘り込みは緩やかであり、壁高は8 cmを測る。黄褐色の床面に堅さはなく、軟弱な状態であった。炉は埋甕炉で甕の胴部下半から底部を正位に埋設してある。ピットは4個検出した。

時期は炉体土器からみて弥生時代後期である。

⑳第21号住居址（第19図）

調査区中央に位置し、第32・36号住居址及び第104号土坑を切る。また調査終了後の整理作業の段階で第18・64号住居址も切っていることが判明した。主軸はN－90°－Eを指す。平面形は方形で、南北4.3m、東西4.5m、床面積18.6m²を測る。壁はやや斜めで、残存壁高は15cmを測る。本址の北壁際を通る暗渠が床面まで達している。褐色土の床面は堅く、北側では礫が露出していた。カマドは東側の北隅に設けられた石組カマドである。

遺物は土器が数点出土している。また本址北半部全面に5～20cmの礫が多量に投入してあり、遺物はその礫のない南西部分から主に出土した。時期は平安時代後期と考える。

㉒第22号住居址（第20図）

調査区中央に位置する。他遺構との切り合い関係は多く、第14・18・35・47・61・64号住居址を切っている。またこのほか第63号住居址とも重複している可能性がある。隅丸方形プランを呈し、南北3.7m、東西3.6m、床面積は12.0m²である。主軸はN－75°－Wを示す。壁は良好な部分では直に立ち上がり、壁高は14cmを測った。覆土は茶褐色土塊が混入する褐灰色土の単層である。床面は平坦で、ピットが2個見つかっているが、主柱穴に該当するものはない。カマドは西壁中央に残る。焼土が相当すると考える。このほか床面に焼土の広がっている部分がある。この焼土上層には径20cmを超える礫がまとまっていた。

遺物はカマド周辺から北西隅一帯にかけて土器が出土している。平安時代中期に相当する。

㉓第23号住居址（第20図）

調査区中央の西端に位置する。他遺構との切り合いはないが、後世の暗渠で北側と西側を破壊され、西区域外へ伸びていたため、全容の確認はできなかった。残っている部分では壁が直に立ち上がり、12cmを測る。現況規模は南北5.6m、東西は6.0m、平面形は方形と推定される。床は土壌が非常に水を含んでいるため、軟弱で判然としなかった。本址に伴う施設は東壁中央に位置すると思われるカマドである。袖には石が残り、石芯粘土カマドであったと推定する。南隅の2か所で焼土が確認された。

遺物はカマドの焚き口前（西側）で土師器の甕が、同じくカマド南側で須恵器壷が出土している。また南隅焼土の上部に径20cm程の礫が数個まとめてあった。平安時代中期と推定される。

㉔第24号住居址・第30号住居址（第21図）

ともに調査区南東端に位置し、東半分は区域外に延びる。24住は9住・16住・25住・30住を切り、30住は24住と25住に切られる。両者の新旧は24住の方が新である。24住は南北4.0m、現況で東西1.8m、現況床面積は18.9m²、同様に30住は4.6×1.2m、22.3m²を測る。いずれも平面形は方形と推定される。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存壁高は7 cm（24住）、18cm（30住）を測る。断面で観察すると24住の床は30住の覆土の中に作られていることが明瞭にわかる。また土層断面で確認

した焼土が24住のカマドに相当し、おそらく北壁の中央に位置しよう。ここで検出したピットはすべて30住のものと思われるが、柱穴とは考えにくい。

24住は平安時代前期に、30住は古墳時代後期に属すると推定する。

㉕第25号住居址（第21図）

調査区中央の南東寄りに位置する。第9・16・30号住居址を切り、第24号住居址に上面を破壊される。平面形は方形で、南北3.2m、東西2.9m、床面積8.8m²を測る。主軸はN－0°を指す。壁は直に立ち上がり、残存壁高は33cmを測る。覆土は暗褐色粘質土を基本とする。床面は黒が強い褐色を呈し、全体に堅い。北壁やや西寄りに設けられたカマドは石芯粘土カマドである。天井が残る完全な状態で確認され、カマド内には土師器の甕が残されていた。規模は幅45cm、奥行50cm、煙道75cmを測り、今回の調査で最も良好な資料である。ピットは全部で4個検出した。P_1内には炭化した柱根が残存しており、P_3・P_4と組み合わさって方形配列の柱穴構造を思わせるが、配列等で若干の疑問が残る。本址は壁面の多くに被熱痕があり、床上には炭化した建築部材や焼土が広く分布していた。いわゆる焼失住居の典型例として扱いたい。

遺物は土師器の杯・甕類が出土している。時代は古墳時代後期である。

㉖第26号住居址（第22図）

調査区南東端に位置し、後世の暗渠が東西に通っている。第8号住居址に切られ、第68号土坑を切る。方形プランを予想するが、東部の大半が区域外になるため不明である。規模は南北3.5m、東西は現況で1.4mを測る。壁は壁高6cmを測るのみであった。床面は黄褐色でやや堅さがある。西壁中央際に焼土の広がりを見たが、これをカマドの残骸と捉えることもできる。ピットは1個を検出している。遺物の出土がほとんどなく、本址の時期は不明である。

㉗第27号住居址・第29号住居址（第22図）

調査区南側の中央部に位置し、複雑な重複関係をもつ。まず27住は6住・7住・11住に上部を破壊され、29住を切っている。一方の29住は、上記のほか3住に上部を壊され、51～54土・58土・59土・79土にも切られている。さらに10住は双方を切る。覆土は削平され、ほとんど残っていないが、部分的に暗褐色土を確認した。残存する最大壁高は22cm（27住）、12cm（29住）である。確認したラインから方形あるいは長方形を呈するものと推定される。現況規模はそれぞれ南北5.8m×東西3.7m、同7.1m×1.6mを測る。27住の床面は判然としないが、29住は黄色土で堅く良好な状態を見せている。南側で29住に伴うと思われる焼土とピットが1基ずつ検出された。焼土は不整円形で、59土に切られている。29住の副炉と捉えてよいのであろうか。

遺物はわずかに弥生土器が得られている。時期はともに遺物と重複関係からみて弥生時代後期と考える。

㉘第28号住居址（第23図）

調査区の中央東端に位置する。第32・40・47・50号住居址を切り、第60号土坑に切られ、東区域

外へ続く。南北3.4m、東西は現況で3.4m を測り、平面形は方形となろう。主軸はN－80°－W を向く。壁は直に深く掘り込まれ、残存壁高は31cm を測る。床面の状態は堅く良好で、黒味の強い褐色を呈す。西壁中央に設けられたカマドは石組カマドで、袖部には芯材の礫が残存している。ピットは4個検出したが、柱穴に相当すると思われるものはない。

遺物は礫と土師器が点在していた。時期は平安時代前期である。

(29)第31号住居址（第23図）

調査区の中央北東寄りに位置する。第48号住居址に上部を破壊され、東部は区域外に続く。南北4.9m、東西は現況で4.5m を測り、平面形は隅丸の方形か、長方形を予想する。主軸はN－80°－W を指す。壁は高さ30cm で、直にしっかりと掘り込まれている。床面は黒みの強い褐色土で、全面的に堅く良好な状態である。ピットは5個検出した。P_1・P_2・P_3・P_4の4本を主柱穴と想定するが、未確認の東部にも柱穴の存在が予想される。炉は地床炉3基、埋甕炉1基の計4基が確認された。P_3とP_4のほぼ中間に設けられた埋甕炉（炉$_4$）は弥生土器の甕類部を逆位に埋設したもので、炉底には土器を敷いている。本址は平面形と炉数から拡張を想定したい。すなわち東部の未調査にあると推定されるピット2個とP_1・P_2が組み合わさって第1次住居、さらにその2個とP_3・P_4が組み合わさり拡張された第2次の柱穴配置を考えたい。前者に伴う炉が炉$_1$・炉$_2$、後者が埋甕炉（炉$_4$）であろう。

遺物は弥生土器の甕、壷片が出土している。本址は弥生時代後期の住居である。

(30)第32号住居址（第24図）

調査区の中央北東寄りに位置する。北西隅と東南部をそれぞれ第21・28号住居址に切られている。南北3.4m、東西3.2m の隅丸方形で、現況床面積10.1m²を測る。壁は直に掘り込まれ、最大残存高は16cm であった。床面は良好で堅い。床面東側に非常に軟質で窪む部分があり、土質が異なることから後世の遺構の可能性もある。炉は南西寄りに位置する地床炉である。径25cm の円形である。本址に伴うピットは2個検出した。

遺物は住居中央部に礫に混じって、土師器が多量に出土した。小型丸底坩・高杯等があり、完形もしくはそれに近いものも多い。時期は遺物から古墳時代中期を当てる。

(31)第33号住居址（第24図）

調査区の北寄りに位置し、第34・48号住居址を切る。検出当初、本址は長方形プランと捉えていたが、断面観察の際にカマドを確認したため、方形に変更した。南北3.1m、東西2.9m、床面積9.0m²を測り、主軸をN－0°に取る。残存壁高は10cm、直にしっかりと掘り込んである。床面は褐色土で堅く良好であるが、出水場所であったせいか軟弱な部分も多い。カマドは石組みで、北壁東寄りに位置する。袖を構築した礫が残存する。ピットは検出できなかった。遺物はカマド東脇に特に多い。平安時代後期の住居である。

(32)第34号住居址（第22図）

調査区北寄りに位置する。第33号住居址に切られ、第48号住居址を切る。本址東側は区域外に伸び、また排水用に掘った溝で壊されている。南北3.2m、東西は現況で3.1m を測り、平面形は方形を予想する。主軸はN－90°－W を指す。立ち上がりはやや斜めで、残存壁高は17cm であった。床面は黒褐色土で、出水地帯のため非常に軟弱である。カマドは西壁北寄りに設けられている。33住に切られるが、焼土・構築礫が残存している状況を確認した。地山を掘り残して袖の基部とし、さらに石組みを行なったと考えられる。

時代を特定できるような遺物はない。カマド形態から平安時代と考えられる。

(33)第35号住居址・第61号住居址（第25図）

調査区中央に位置する。35住は22住に切られ、14住を切る。このほか18住と重複していた可能性がある。この部分の新旧関係は61住→14住→35住→22住となる。南北4.1m、東西4.1m を測るが、南側プランは想定である。隅丸方形を呈すものと推定し、床面積は15.5m²を測る。主軸方向はN－90°－E である。残存壁高18cm、掘り込みはなだらかである。床は黒褐色土でやや堅い。カマドは東壁北隅に設けられている。袖部を構築したと見られる礫の並びが確認され、焚き口に当たる部分には焼土が残っていた。石組カマドで、規模は幅40cm、奥行き120cm を測る。ピットは発見されていない。遺物は灰釉陶器椀があり、この出土位置を含めて最終プランを想定した。時期は平安時代後期と推定される。

61住は14住および35住の掘り下げ中に確認された。断面で見る限り14住の床と同レベルに床を作っていたように見える。時期は弥生時代後期以前であろう。

(34)第36号住居址（第25図）

調査区の中央に位置する。第21号住居址に切られ、上層を後世の暗渠で破壊されている。本址の南側には第４号墓址がある。南北4.6m、東西3.9m、床面積16.2m²を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸をS－０°に取る。掘り込みは明瞭に確認された箇所では直に近く、残存壁高は17cm を測る。床面は暗褐色で堅く良好であるが、所々に礫が露出している。また暗渠の影響からか出水がある。ピットは４個検出したが、柱穴とするには配置に問題がある。中央南寄りのP_2・P_3間に埋甕炉１基がある。径40cm の円形で、甕の頸部のみを埋設しており、土器の両側には支えのための礫を埋め込んでいる。覆土中に５～20cm 大の礫が中央部を中心に分布し、若干の焼土も見られた。時期は弥生時代後期である。

(35)第37号住居址（第26図）

調査区中央北寄りに位置し、第41・48号住居址を切る。南北4.3m、東西は5.2m、平面形は長方形となる。主軸はN－95°－W を向く。掘り込みは緩やかであり、壁高は14cm を測る。覆土は削平され残量が少ないが、暗褐色土の単層である。床面は黒褐色を呈し、堅い。しかし床に広がる焼土のレベルから見て、北部については掘り抜いてしまったと思われる。ピットは７個見つかった。炉は

中央西寄りにあるP_3の周辺の焼土を当てたいが、不明瞭な部分も残る。本址は平面プラン・柱穴・炉や遺物の出土状態からみて非常に不確実な遺構と言わざるを得ない。時期は古墳時代中期である。

㊱第38号住居址（第27図）

調査区のやや北西寄りに位置し、第54・58号住居址を切る。また灰色土の覆土をもつ多くの中世ピットに切られている。主軸方向はN－90°－Eを指す。平面形は隅丸長方形で、南北5.0m、東西6.2m、床面積28.6m²を測る。検出の段階で既に床が露呈している部分があり、残存壁高は最大で7 cmを測るのみである。黒褐色土の床面は堅く、西側では礫が露出していた。カマドは東壁北寄りに設けられている。袖部を構築したと思われる石がわずかに残存しており、石組カマドと考える。ピットは14個検出した。そのうちで位置からP_1・P_4・P_5・P_8・P_9・P_{10}に柱穴の可能性がある。P_3内から骨片が出ている。本址は覆土中に炭化材や焼土塊が混じり、焼土化した部分も一面に広がっていることから、いわゆる焼失住居であろう。北部には数か所で炭化米がまとまっており、中央北西寄りの床直上から八稜鏡が出土した。鏡の周囲には箱のような入れ物の痕跡も残っていた。時期は平安時代後期と考える。

㊲第39号住居址（第26図）

調査区北西寄りに位置し、第54号住居址を切る。後世のピットに切られている。プランは隅丸長方形を呈し、南北4.2m、東西3.2m、床面積は12.9m²である。主軸はN－10°－Eを示す。覆土はほとんど削平されて、壁高は3 cmを測るのみであった。床面は平坦であるが、褐色土でそれほどの堅さはなかった。ピットが3個見つかっているが、主柱穴に該当するものはない。北壁東隅の突出した部分に焼土を確認しているため、この部分にカマドが設けられていたと考えたい。遺物は床面中央部から礫とともに緑釉陶器椀が出土している。平安時代後期に相当する。

㊳第40号住居址（第27図）

調査区の中央東端に位置し、第18・47・50・63・64号住居址を切る。第28号住居址に切られ、東部は区域外に続いているため、確認されたのは全体の¼程度であろうか。残っている部分では壁が直に立ち上がり、25cmを測る。現況規模は南北2.6m、東西は2.4m、平面形は方形と推定される。床は黄色が強い暗褐色土であった。本址に伴う施設は何も見つかっていない。遺物もほとんどなく、時期は重複関係から、古墳中期～平安前期と限定できるのみである。

㊴第41号住居址（第28図）

調査区北寄り中央に位置し、第37・48・52号住居址に上部を破壊される。南北5.0m、東西7.0mの長方形で、床面積は32.4m²を測る。主軸方向はN－90°－Eを指す。壁はほぼ直に掘り込まれており、壁高は32cmを測った。床面は南部で非常に堅い良好な状態だったが、他は出水地帯で、軟弱になっていた。炉は中央と西寄りで2基確認した。ともに地床炉である。ピットは4個検出された。とにかく本址の調査は湧水が激しく、排水を行ないながら進めたが、水を含んだ床は軟泥化し、床面施設は満足に検出できなかった。

遺物は弥生土器の甕と扁平片刃石斧（3.0×2.0cm 大）が出土している。弥生時代後期に属すると推定する。

(40)第42号住居址（第29図）

調査区北端に位置し、北西隅が区域外になる。第44・55号住居址を切り、第93～95号土坑に切られる。平面形は方形で、南北3.9m、東西4.3m、床面積16.2m²を測る。主軸はN－90°－W を指す。壁は直で、残存壁高は16cm を測る。床面は暗褐色を呈し、全体に堅く良好である。所々に礫が露出している。ピット２個を検出した。カマドは西壁中央に位置する石組カマドである。袖石が残っており、残存規模は幅30cm×奥行70cm を測る。脇から甕片が出土している。時期は古墳時代後期と考える。

(41)第43号住居址（第30図）

調査区北東隅に位置する。P_{508}・P_{509}と切り合いがある。方形で、規模は南北5.6m、東西5.5m、床面積は29.5m²を測る。主軸はN－90°－E を示す。壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は22cm を測った。床面は礫が露出しており、黒褐色土の堅い面をもつ。ピットは４個検出され、位置・規模とも主柱穴に該当する。カマドは東壁中央に設けられた石組カマドである。粘土による袖が残っており、良く焼けている。

遺物は20cm 大の礫とともに、覆土中層から床上にかけて散発的に出土した。古墳時代末期に相当する。

(42)第44号住居址・第55号住居址（第29図）

調査区北部に位置し、第42号住居址に切られる。互いの関係は55住が44住を切っている。当初は55住が旧と判断して、掘り進めていたが、床面精査の結果、逆と判明した。44住は南北4.0m、東西5.1m の長方形で、床面積は20.1m²である。主軸はN－90°－W を向く。壁はやや直に立ち上がり、壁高は17cm を測る。暗褐色の覆土には黄褐色土塊が混入している。55住は南北3.7m、東西3.6m の方形を呈す。覆土は暗褐色で灰褐色土のブロックが混入している。床面はどちらも黄褐色で堅く良好な状態で、ほとんど同じ面に作られている。55住の北壁西寄りと東壁北寄りで焼土を確認した。カマドの残骸の可能性がある。44住の方はほぼ中央に焼土があり、炉址かもしれない。４個検出したピットはいずれも55住に伴うものと判断した。

遺物が少なく、正確な時期は不明だか、44住が弥生時代後期から古墳時代中期、55住が古墳時代後期と推定している。

(43)第45号住居址（第31図）

調査区北端の中央に位置する。第55号住居址および３基のピットに切られている。南北4.0m、東西5.6m を測り、平面形は長方形である。床面積は21.3m²、主軸はN－85°－W を向く。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存壁高は28cm を測る。床面は黒褐色で堅く、北側と西側で礫が露出している。なお東側は出水地帯に近いため軟弱である。ピットは８個検出した。P_7は深さ32cm を測るが、

他はいずれも浅い。しかし位置からみてP_1・P_4・P_6・P_7を主柱穴と考えたい。ただしP_5・P_8にもその可能性はあろう。中央北西寄りに楕円形の焼土があり、地床炉と考える。

遺物は多数の礫に混じって土器がわずかに出土しただけである。弥生時代後期の遺構としたい。

(44)第46号住居址（第30図）

調査区第2面の南西隅に位置するが、ほとんどは区域外になっている。第49・89号土坑に切られる。第1検出面では遺構の存在だけ判っていたが、プランがつかめなかった。床面のみの確認であったため、遺物もなく、平面形・時期ともに不明である。

(45)第47号住居址（第31図）

調査区の中央東寄りに位置する。第18・21・28・40号住居址に切られ、第64号住居址を切る。このほか50住・63住とも重複すると思われる。プランは長方形を推定し、南北5.2m、東西4.2mを測る。床面は黒褐色で、切り合う住居によってかなりの部分を破壊されているが、南西部では堅い良好な状態を残していた。ピットは西側で4個検出した。いずれも焼土があり、炉とも考えられる。特にP_1は底まで焼けているが、本址の炉とするには西壁際と位置がよくない。

時期は弥生時代と思われる。

本址の北側に古墳時代の甕が横倒しになって埋まっていた。当初は埋甕炉と判断し、これを含めた範囲にプランを想定していた(南北6.2m)。しかし掘り上げた結果、時期が異なるため、後世のピットに埋まっていたものと考える。プランが歪んでいることと合わせると、北側で捉えたものは本址を切る別の住居址であった可能性が高い。

(46)第48号住居址（第32・33図）

調査区の北寄りに位置する。第33・34号住居址及び第103号土坑に切られ、第31・37・41・58・60号住居址を切る。隅丸方形で、南北7.2m、東西7.0m、床面積47.8m²を測り、主軸をN－90°－Eに取る。残存壁高は最大で19cm、直にしっかりと掘り込んでいる。床面は黄褐色の堅い良好なものであったが、湧水のため泥化し、完全な精査はできなかった。このためピットは南東部で6個検出したのみである。炉は地床炉で、不整楕円形3、方形1の計4基を確認した。

遺物は少量の土器と礫が床上に散在する。古墳時代中期の住居である。

(47)第49号住居址・第57号住居址（第33図）

調査区北寄りに位置し、両者の新旧は57住を49住が切る。第102号土坑に切られ、第58・62号住居址を切る。北部は排水用の溝で壊されている。49住は南北2.4m、東西2.6mの隅丸方形を推定する。現況の床面積は、5.7m²を測る。主軸はN－95°－Eを指す。立ち上がりは直に近く、残存壁高は18cmであった。覆土は鉄分沈殿による茶褐色土塊が混入する暗灰色土の単層であり、人頭大の礫が多数混入している。床面は黒褐色で堅い。東壁中央にカマドの残骸を確認した。石組カマドであったと思われる。土師器の甕が出土している。57住は49住にほとんど破壊されており、わずかに東南側が残存していた。推定される規模は南北2.6m、東西2.9mの方形となる。断面で見ると49住と

ほぼ同レベルに床を作ってあったようだ。深さは11cm を測った。

遺物は比較的少ない。49住は平安時代の住居址と推定されるが、57住は不明である。

(48)第50号住居址（第34図）

調査区中央東端に位置する。第28・40号住居址に切られ、東側の大半は区域外へ続く。南北2.6m、東西は現況で1.2m を測る。推定されるプランは方形あるいは長方形となろう。残存壁高23cm、掘り込みは直に近い。覆土は暗褐色土の単層である。床面は黄褐色土混入の黒褐色土で堅い。ピットが3個検出され、P_1内から土器片が出ている。

遺物は南東部の床近くから土器片が多く出土した。未整理で時代を特定できない。

(49)第51号住居址

調査区西端に位置する焼土をカマドと見て、本址を認定した。既に床面に達しており、ピットが1個あるのみである。そのほかは全く不明だが、古墳時代中期の土器を少量得ている。

(50)第52号住居址（第34図）

調査区中央北西寄りに位置する。第41号住居址を切り、南半部は暗渠に壊されている。平面形は長方形か方形と思われる。残存規模は南北2.7m、東西3.4m、掘り込みは緩やかであり、壁高は5 cm を測る。褐色土の床面は堅く、良好な状態であった。南側に焼土の広がる部分がある。カマドは東壁北寄りに設けられていたらしく、形態は石芯粘土カマドと考えられる。両側に礫が2個残っていた。ピットは楕円形で、カマド脇に1個（48×8，－8 cm）検出した。時期は平安時代後期である。

(51)第53号住居址（第34図）

調査区北部東端に位置し、第1号建物址に切られる。東側の大半は区域外になるため、平面形は不明だが方形か長方形になるものと予想される。南北3.7m、現況で東西2.5m を測る。壁は直にしっかり掘り込まれ、残存壁高は35cm を測る。黒褐色土の床面は堅く、西側では礫が露出していた。建物址の柱穴が床面を掘り抜いている。ピットは4個検出され、その中のP_1・P_4は浅いが、位置から主柱穴と考えたい。

住居内には10cm 前後の礫が散在していたが、遺物は弥生土器の小片が微量出土しただけである。これをもって時期は弥生後期とみたいが、疑義が残る。

(52)第54号住居址（第35図）

調査区北西寄りに位置し、第38・39号住居址に切られる。38住調査後の検出で発見したが、南側の床面は削り込んだため失われており、南と西のラインは想定したものである。長方形と推定し、規模は南北3.4m、東西3.0m である。主軸はN－90°－E を示す。壁は良好な部分では直に近く、壁高は7 cm を測った。床面は平坦で黒褐色を呈し、堅い。カマドは東壁中央南寄りに位置しており、粘土カマドであった。時期は不明である。

(53)第56号住居址・第59号住居址（第35図）

調査区北西端に位置する。56住は東側を第100・101・105・106号土坑に切られ、床まで壊されている。残っている部分では壁がやや斜めに立ち上がり、12cm を測る。現況規模は南北2.7m、東西は2.8m、平面形は方形と推定される。礫が露出する地山面を床と捉えたが、それほど堅くなく、判然としない。本址に伴う施設はなく、カマドなどの痕跡も認められなかった。59住は検出された時には既に床面まで削られており、特に東側の確認はできなかった。位置関係から56住と切り合っていた可能性がある。床は礫が露出し、床面ラインは不整な形となっている。本址に伴うと思われる小ピットが1個あり、また西壁の突出する部分がカマドの痕跡かとも考えられるが焼土はない。この部分から土師器片が出土している。平安時代に比定できよう。

(54)第58号住居址（第36図）

調査区北側中央に位置する。第38・48・49・57号住居址に上部を破壊され、第60号住居址を切る。このほか多数の土坑・ピットに切られる。南北7.3m、東西5.2m の不整な隅丸長方形で、主軸方向はN－10°－E を指す。床面積は33.4m²を測った。壁はほぼ直に近く掘り込まれており、残存壁高は34cm を測る。床面は黄色土で堅く良好であるが、湧水のため軟弱になって、精査は不可能であった。炉は北部中央に埋甕炉、南に地床炉が3基の計4基が設けられている。位置からみて、炉$_1$・炉$_2$が第1次の炉、炉$_4$（埋甕炉）が最後の炉と推定したい。

東部床面からは弥生土器高杯脚部が、南西部床面から獣歯が出土した。本址の時期は弥生時代後期である。

(55)第60号住居址（第35図）

調査区北側中央に位置し、第48・58号住居址に切られる。現況では南北2.0m、東西2.5m を測り、平面形は方形か長方形を予想する。周囲の住居址を検出・確認している最中に捉えた。壁は直で、残存壁高は24cm を測る。覆土はやや灰色がかった黒色土である。床面は覆土とほとんど差がなく、堅さで捉えた。湧水の影響で床面精査は全く行なえなかった。炉は48住の床下で見つかった埋甕炉が相当すると考える。時期は弥生時代後期である。

(56)第62号住居址・第65号住居址・第66号住居址・第67号住居址（第37図）

調査区北東寄りに位置する。湧水を流すための排水溝を掘った部分にトレンチを入れたところ遺物の出土があり、一連の存在が判明した。水の影響で粘質性の強い黒灰色土で、泥状になっている。相互関係は65住・66住・67住・62住の順に古くなっていく。平面形はいずれも方形か長方形を予想する。規模は62住が南北5.3m、東西4.8m 以上、65住が南北2.4m を測り、そのほかは不明である。壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は上述の順に14cm、29cm、15cm、11cm を測る。ただし調査期間の限界まで掘り下げていたが、66住・67住については床面まで達していないと思われる。62住の床面は黒褐色で堅く、65住は黒灰色でやはり堅い。しかし水のため、やや軟弱である。遺物は66住から完形の土師器杯、62住から土師器高杯脚部などが出土し、66住は古墳後期、62住は古墳中期を想定

しているが、他は不明である。

(57)第63号住居址（第37図）

調査区の中央東寄りに位置し、第14・18・22・40・50・64号住居址と重複する可能性が高い。南側の立ち上がりを捉えたのみで、平面形は不明であるため、断言できない。覆土は暗褐色土、床面は堅いという感じはなかった。ピットが3個検出されている。遺物は土師器の杯底部があるが、これのみで時期確定はできない。弥生時代より新しい遺構との指摘に止めたい。

(58)第64号住居址（第38図）

調査区中央の東寄りに位置し、第14・18・22・40・47・63号住居址及び第78号土坑に切られている。南北5.3m、東西3.9m を測り、平面形は隅丸長方形である。やや北が広い。床面積は18.3m²、主軸はN－20°－W を向く。壁は直に掘り込まれており、壁高は最大51cm を測る。覆土は暗褐色土で、黄色土が混入し、また埋没時のものと思われる黒褐色土が見られる。床面は黄色土で堅く、非常に良好な状態を残している。ピットは全部で10個検出した。位置からみて P_1・P_2・P_4・P_5を主柱穴と考えるが、P_4・P_5・P_6・P_9の配列で、西へ幾分拡張した可能性もあろう。P_1・P_2の間に不整円形の地床炉がある。

遺物は少量の弥生土器が出土したにすぎない。時期は弥生時代後期と考える。

2．掘立柱建物址（第38図）

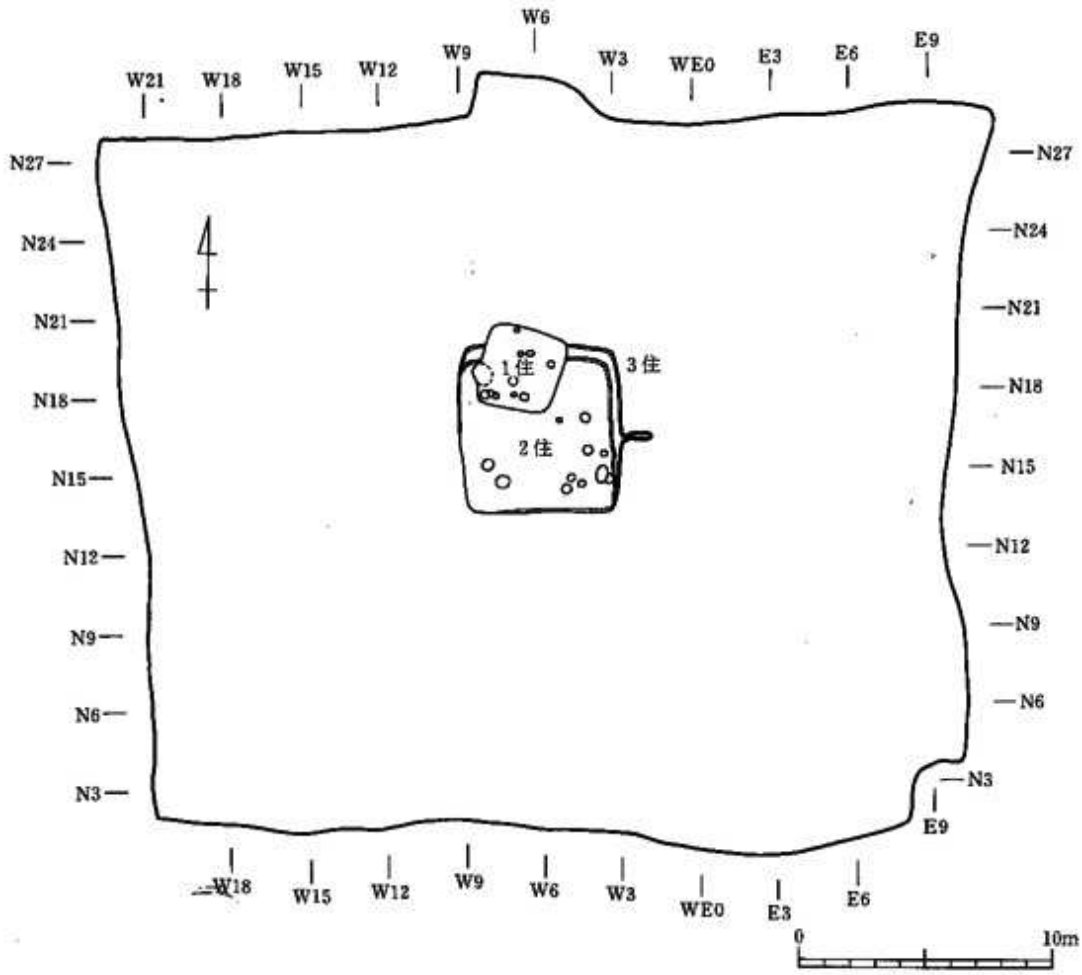
調査区北端に位置する。一列に並ぶ同規模の方形掘り方のピットが3基発見され、これを建物址と認定した。第53号住居址を切るものは P_1 と P_2で、P_1は半分が区域外になる。P_3は53住の西外であった。P_2と P_3では柱痕を捉えた。覆土は黒褐色土系で、深さは20cm を測る。方向は85°ほど東に振っている。時期は不明である。

3．土坑（第40～47図）

古屋敷遺跡の第1検出面と第2検出面の双方で105基が検出されている。ただし第2検出面で捉えられた土坑のほとんどは、第1検出面での拾い落としか、重複のために輪郭がはっきりとつかめなかったもので、基本的に第1面で捉えた土坑と近似する面から掘り込まれたものであろう。

土坑の平面形は大別して、隅丸を含む方形基調と長方形基調に、円形・楕円形基調の3種類がある。規模は、方形・長方形基調のものは一辺（長辺）が最大1.5～2.4m、最小0.5m ほどと格差が大きいのに対して、円・楕円基調は特殊なものを除いて1.8m 径くらいが最大で偏りが比較的小さい。深さは、まれに80cm を超えるものがあるが、ほとんどは40cm 以内である。しかし表土除去や遺構検出でかなり上面を削っており、これらの数字は土坑が持っていた本来の深さには遠く及ばないと推定される。

調査地内の土坑の分布は、三か所ほどにまとまる傾向がある。特に調査地北部の中央と北東に顕著な集中の2グループが見られ、また南部にもやや広い範囲ではあるが、まとまりが見られる。しかも北部中央と北部北東のグループは、平面形が基本的に方形・長方形基調の土坑で構成され、一



第6図　前田遺跡遺構分布

方調査地南部にまとまる土坑は円・楕円基調のもので多くを占められる。

形状や出土遺物から用途を特定できる土坑は少ない。覆土は灰色系を示す例が多く、それらはおそらく中世以降に下るものと推定される。平面形が方形や長方形基調のものは他遺跡の同期の例を参考にすれば、おそらく中世の墓址であろう。一定の範囲に重複しながら集中するあり方も類似している。平面形が円・楕円基調の土坑は、方形・長方形基調に比べて掘り込みが若干傾斜するものが多く、構造の違いを窺わせる。しかし井戸や建物、地下式の貯蔵施設ともみられず、もし前者と同様な墓址であるなら、時期的な差や造営集団の別が平面形・断面形の相違点につながるとも考えられる。特殊な例では、土坑1にはすっぽり埋め込まれた桶が遺存しており、内部に礫が充満していた。土坑15にも礫が充満し、底部に炭化材が残っていた。

4．その他の遺構

ピットと溝がある。ピットは土坑と似た覆土を持ち、分布も土坑集中域にほぼ重なる。特に調査

地南部でその傾向が強い。溝は近世・近代の暗渠がほとんどである。

5．墓址

(1)第1号墓址

調査地北部中央の第1検出面で発見された。土壙墓で、墓坑は90cm×70cmほどの不整な隅丸長方形を呈す。深さは検出面から最大15cmを測るが、表土剝ぎの時、上面をかなり削平している。人骨もかなり削られており、本址の検出面に露出していた。埋葬形態は頭位を北にとる、おそらく左向きの横臥屈葬で、肩部付近から古銭（永楽通宝）が1枚出土している。棺などの遺存は確認できなかった。室町時代以降の墓址であろう。

(2)第2号墓址

調査地中央部北寄りの第1検出面で発見された。すぐ東に隣接して第3号墓址が並列する。長辺110cm、短辺80cmほどの南北に長い不整な隅丸長方形で、深さ30cm、西辺の中央に幅10cm、長さ50cmの溝状の突出部を持つ。いわゆる火葬墓で、壁面は被熱焼土化しており、下層からは炭・炭化物と焼骨小片が出土した。他の遺物はない。時期は中世に属すると推定している。

(3)第3号墓址

第2号墓址と同様、調査地中央部北寄りの第1検出面で発見された。西に隣接して第2号墓址がある。本址も約110cm×80cmの南北に長い不整な隅丸長方形で、西壁から長さ60cmの溝状の突出部が延びる。深さは15cmと若干浅い。2号と同じいわゆる火葬墓で、壁面の所々が焼土化しており、下層からは炭・炭化物と焼骨小片が出土した。そのほかの遺物はない。時期はやはり中世と推定される。

本址と第2号墓址は、単に隣接しているばかりでなく、規模や軸方向、突出部の方向と位置まですべてにわたって一致・類似する。これは極めて近接して、あるいはほとんど同時に意図的に並べて営まれた結果と考えたい。

(4)第4号墓址

調査地中央部の第2検出面で確認された。長さ2.1m、幅0.8mの長方形の南北に長い土坑で、深さは最大10cmを測るが、削平を受けており、当初はもっと深いものであったと考えられる。底面は平坦だが、地山の礫が露出していた。土壙墓で、内部に人骨が遺存していた。埋葬形態は、頭位を北にとる仰臥伸展葬と推定される。北部1/3程のところにある頭蓋骨は左向き（西向き）らしく、腕や脚部の上腕骨や大腿骨など太い骨はほぼふさわしい位置にあった。しかし非常に脆弱になっており、そのままの形で取り上げることは不可能であった。墓坑内の北端部に、灰釉陶器の長頸瓶1点、同椀2点、緑釉陶器の椀1点、土師器の皿1点がまとめて納めてあった。長頸瓶は上土除去時に破損してしまったが、他は完形で残されていた。人骨、土器ともに底面からいくぶん浮いており、その点からは棺や木箱の存在が予想されるが、それを証明する痕跡は得られていない。

第3節　前田遺跡の調査

住居址

(1)第1号住居址（第48図）

調査区中央やや北寄りに位置する。規模・平面形は南北3.1m、東西3.1mの方形を呈し、主軸方向はN－80°－Wを指す。床面積は9.2m²を測る。壁はほぼ直に掘り込まれており、東に浅く、深さは最大40cmを測る。覆土は中層には中心から南東にかけて15～50cm大の礫が見られた。床面は黒灰色粘質土を掘り抜き、砂層上にあると思われるが、軟弱でよくわからなかった。カマドは西壁のやや南寄りに設けられた石芯カマドである。カマドの幅（内法）は85cm、奥行は80cmである。ピットは9個検出した。

カマド袖際から土師器甕片を中心とした遺物が出土している。時期は平安時代である。

(2)第2号住居址（第49図）

1住に切られ、3住を切る。南北5.5m以上、東西およそ6.0mの方形プランが想定され、床面積は現況33.3m²を測る。主軸はN－95°－Wを指す。床面は3住の床より7 cmくらい上に設けられており、部分的に良好であった。カマドは西壁中央にあり、石芯粘土カマドであった。幅95cm、奥行105cmの規模をもつが、後の耕作のため、原形をとどめておらず、盛りあがった焼土と石を確認した。ピットが10個検出された。

南東隅の床面から土師器甕・杯等が出土した。また一部に炭化物も見られた。本址は奈良時代の住居址である。

(3)第3号住居址（第49図）

1住と2住に切られる。特に2住は北・東壁を少し内側にするのみで、そっくり重複している。床面は黒灰色粘質土あるいは自然堆積砂層上にあるが、良好ではない。規模は南北・東西とも6.3m、床面積は37.8m²を測る。平面形は方形を呈すると推定され、主軸はN－90°－Eを向く。壁高は20cm前後で直に近い傾斜で掘り込まれている。カマドは東壁中央にある。長い煙道とその手前に少量の焼土粒を確認したが、袖部すべては2住構築時に破壊されてしまっている。ピットが4つ検出された。

遺物はごく少量である。時期は奈良時代と推定する。

第4節　出土遺物の概要

1．縄文時代

遺構の確認はないが古屋敷遺跡において土器、石器が出土している。土器は検出面や各遺構の覆土中から、中期後半のものの破片が少量出土している。石器は、平安時代の住居址内に投入された礫に混じって石棒・石皿と数点の打製石斧が存在した。遺跡西方の大村集落内で中期末の住居址が発見されており、調査地周辺にも遺構存在の可能性がある。

2．弥生時代

当該期遺構の覆土・床面から土器・石器・石製品・金属製品の出土がある。大半が土器で、器種は壷・甕・鉢・高杯などが見られ、壷と高杯は器面に赤彩が施されるものが多い。善光寺平の弥生後期後半に編年されている箱清水式に類似し、同期の所産と考えられる。石器・石製品は、該期の第41号住居址内から小形の扁平片刃石斧が1点、検出面から管玉が1点、第14号住居址から浮子が出土している。金属製品は、第16号住居址から銅鏃が1点出土している。

3．古墳時代

中期と後期の土器がある。中期の土器は同期の住居址覆土・床面から多数出土したが、特に第3号住居址・第32号住居址から良好な資料が出土した。すべて土師器で、小型丸底坩・高杯・壷・甕などの器種が見られる。後期の土器は土師器と須恵器で、やはり同期の住居址内から出土している。器種は土師器に杯・鉢・高杯・長胴甕・小形甕、須恵器に蓋杯・甕などが見られた。第9号住居址・第25号住居址に良好な出土状況が認められる。

4．奈良・平安時代

土器・陶器、石器、鉄器、金属製品、古瓦がある。住居址覆土・床面や墓址、土坑内および検出面から出土した。奈良時代後半（8C後半）から平安時代後期（11C）までの各時期にわたる。土器・陶器には土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器があり、器種では食器類の杯・椀・皿・段皿・蓋・盤・台付鉢、煮沸形態の甕・小形甕・羽釜・甑、貯蔵具の凸帯付四耳壷・甕・長頸壷・短頸壷・長頸瓶・広口瓶などがみられる。緑釉陶器の出土数は非常に少ないが、第4号墓址に納められていた椀は、完形の優品であった。石器は砥石が数点出土した。鉄器は刀子・釘・鉸具など15点ほどあり、そのほかに鉄滓も何点か得られている。金属製品は第38号住居址の床面から出土した八稜鏡があり、径9.0cm、重さ87.4g、裏面の紋様は良く分からない。古瓦は平瓦破片が3点出土した。内面にタタキ、外面に布目が残る。

5．中世・近世

一部の土坑とピット、検出面から青磁・白磁・土師質土器・近世陶器などの破片と金属製の刀装具1点、古銭37点が出土した。

第4章　調査のまとめ

本発掘調査は遺構・遺物ともに内容が多岐にわたり、遺物については整理が追いつかず提示することも充分な検討を加えることもできていない。しかし、その中でも本遺跡の特徴として特記すべきことをいくつか挙げてまとめとしたい。

第一は弥生時代後期の集落址の検出である。松本市内では、古くは奈良井川流域の宮淵本村遺跡で該期の大規模な集落が確認されているが、近年は女鳥羽川・薄川流域での住居址の発見が相次いでいた。それらは鎌田遺跡（1989）、堀の内遺跡（1990）、大村塚田遺跡（1990）などで、本遺跡もその一環に位置付けられる。本遺跡の東の山地との間の湿田地帯は、そのまま南から南東に延びて広がり、里山辺の藤井、上金井地区の付近にまで及んでいるが、本遺跡を含む上記の各遺跡はいずれもこの湿田地帯の周縁に位置している。各遺跡の弥生集落がここに生産域（水田）を求めて立地したことはほぼ間違いないであろう。本遺跡はそれらの集落の中でも、最も多くの住居址が発見されており、ひとつの拠点的な位置にあったことは想像に難くない。

第二は古墳時代中期・後期の集落の発見についてだが、女鳥羽川・薄川流域ではこの時期の分布は概ね弥生時代後期と重なっている。おそらく同様の生産域に拠っていたためと考えられるが、この点で本遺跡のあり方は典型的であろう。東方の山地の各尾根上には、桜ヶ丘・妙義山・桃仙園（煙滅）などの中期古墳が築かれており、この地区に該期の中核的な集落が営まれていたことは疑いの余地はない。

最後に平安時代の集落についてである。今回の調査で平安時代の住居址の検出は多く、古屋敷・前田の両遺跡の一帯が該期の集落を形成していたことは明白だが、周辺での考古学的な所見を加えると、さらに重要性が増してくる。古屋敷遺跡の北300m付近はかつて多数の古瓦を出土して、寺院址を想定されたところであった。近年の調査で寺院そのものの存在は疑問視され始めているが、この一帯が古瓦をしばしば出土することは事実である。古屋敷遺跡でも3点の古瓦を得ており、古瓦出土領域のどこかに瓦を用いた建物の存在、あるいは瓦生産・流通に関連する遺跡などの想定は必要となろう。その際、古屋敷遺跡での八稜鏡を出土した第38号住居址や、完形の緑釉陶器の椀を伴っていた第4号墓址の存在は注目に値する。同期の伸展葬による土壙墓は各地の最近の調査で、数点の杯・椀・長頸瓶を埋納して、集落内やその付近に単独で設けられることが分かってきたが、埋納品に緑釉陶器を伴っていたのは長野県内では本例が2つめである。埋納品の内容に被葬者の階層が反映するなら、かなりの有力者の墓と言える。本遺跡は非常に有力な集落のおそらく一部分にあたり、その集落の背景には多数の古瓦を出土する何らかのもの、それは寺院、群衙あるいは国衙など大きな権力に連なるものであった可能性は非常に大きい。

古屋敷遺跡

遺構No.	平面形	規模（cm）／（㎡） 南北・東西・深さ	規模（cm）／（㎡） 床面積	主軸方向	炉形態 種別	炉形態 位置	炉形態 備考	時期	重複関係 新	重複関係 旧	備考
1	方形	436 × 372 × 27	15.04	N 2°-E				弥生後期	43・44土、ピット		
2	方形	406 × 368 × 27	14.37	N-90°-E	カマド	東壁北寄	袖石の残骸あり	平安後期	46土、ピット	3住	
3	隅丸方形	804 × 368 × 11	61.44	N-5°-E	地床炉	中央北寄	炉縁石?	古墳中期	2・7住、47・79土		焼失住居
4	方形	280 × 264 × 8	6.90	N-90°-E	カマド?	東壁中央		平安後期	50・55土、2・3溝		
5	方形?	420 ×(96)× 30						弥生	2・3・4溝		西の大半は区域外
6	長方形	400 × 500 × 10	18.75	N-90°-E	石組カマド	東壁北隅	袖石残骸	平安後期	53・54・58土	10・11・27・29住	
7	方形	456 × 440 × 14	19.54	N-90°-W	カマド	西壁中央		平安後期	ピット	3・10・27・29住	
8	不明	(296)×(48)× 18						不明			東部大半は区域外
9	方形	656 × 572 × 14	37.85	N-82°-W	カマド	西壁中央	煙道と袖が残存	古墳後期	13・24・25住、73・80土、ピット	16・20・30住	
10	隅丸長方形	452 × 624 × 34	35.59	N 90°-E	地床炉 1 〃 2 〃 3	東柱穴間 西柱穴間 東柱穴の南脇		弥生後期	6・7住、51～54・58土	27・29住	炉1は初期住居、炉2は副炉、炉3は拡張後のもの
11	隅丸方形	544 × 556 × 23	29.33	N-103°-W	地床炉 1 〃 2	中央やや西寄り	炉1に炉縁石あり	古墳中期	6住、ピット	27住	
12	方形	492 ×(384)× 34						古墳中後	ピット		西は区域外へ続く
13	隅丸長方形	488 × 292 × 15	13.47	N-10°-E				平安?	62土、P2・3	9・16・20住	
14	隅丸長方形	904 × 520 × 33	42.06	N 0°	地床炉 1 〃 2	南東西寄 北柱穴間		弥生後期	18・22・35住	61・64住	
15	不明	(248)×(52)× 37						平安	3溝		
16	隅丸長方形	772 × 580 × 44	37.96	N-5° E	地床炉	柱穴間とその周辺	大小新旧の計5基	弥生後期	9・13・24・25住 61土、P2・3	20住	拡張あり
17	方形	384 × 414 × 9	15.78	N-95°-E	カマド?	北東隅	焼土のみ	平安後期	P220	16住	
18	方形	330 × 328 × 14	12.55	N-5°-W	地床炉	中央		古墳中期	22・40住、78土	14・47・63・64住	
19	方形?	(308)×(340)× 31						平安後期			区域外、排水溝
20	方形?	288 ×(216)× 8			埋甕炉	中央?		弥生後期	9・13・16住、73土、ピット		
21	方形	432 × 452 × 15	18.58	N-90°-E	カマド	東壁北寄	袖の残骸	平安後期	18住、ピット	32・36・47住、104土	
22	隅丸方形	372 × 360 × 14	11.98	N-75°-W	カマド	西壁中央	焼土のみ	平安中期		14・18・35・47・64住	
23	方形?	(568)×(600)× 12		N-100° E	カマド	東壁中央		平安中期			西は区域外へ続く
24	方形?	396 ×(184)× 16			カマド?	北壁中央		平安後期		9・16・25・30住	東大半は区域外へ
25	方形	316 × 292 × 33	8.79	N-0°	カマド	北壁西寄		古墳後期	24住	9・16・30住	焼失住居
26	方形?	348 ×(136)× 6			西壁中央の焼土はカマド残骸か?			不明	8住、68土		
27	方形?	(576)×(372)× 22						弥生後期	6・7・10・11住、ピット	29住	
28	方形?	344 ×(336)× 31		N-89°-W	カマド	西壁中央	芯石残存	平安前期		32・40・47・50住	
29	方形?	716 ×(160)× 12			59上に切られる焼土あり			弥生後期	3・6・7・10・27住、他族		
30	方形?	(460)×(124)× 18						古墳後期	24・25住		
31	方形?	488 ×(452)× 30		N-80°-W	地床炉 1 〃 2 〃 3 埋甕炉	中央? 中央? 東寄り 柱穴間やや東寄り		弥生後期	48住		
32	隅丸方形	340 × 320 × 11	10.12	N-90°-W	地床炉	中央西南寄り		古墳中期	21・28住		
33	方形	312 × 290 × 10	9.03	N-0°	カマド	北壁東寄		平安後期		34・48住	
34	方形?	(320)×(308)× 17		N 90°-W	カマド	西壁北寄		不明	33住	49住	
35	隅丸方形	(412)×(412)× 18		N-90°-E	カマド	東北隅	袖の残骸	平安後期	22住	14・61住	

第1表　古屋敷遺跡住居址一覧表(1)

古屋敷遺跡

遺構No.	平面形	規模 (cm)／(㎡) 南北・東西・深さ	規模 (cm)／(㎡) 床面積	主軸方向	炉形態 種別	炉形態 位置	炉形態 備考	時期	重複関係 新	重複関係 旧	備考
35	隅丸長方形	460 x(388)x 17	16.24	S－0°	埋甕炉	柱穴間		弥生後期	21住		
37	長方形	428 x 516 x 14	20.44	N－95°－W	地床炉	中央西寄		古墳中期	ピット	41住	
38	隅丸長方形	500 x 616 x 10	28.64	N－90°－E	カマド	東壁北寄		平安後期	ピット	54・58住	焼失住居
39	隅丸長方形	424 x 320 x 3	12.90	N 10° E	カマド	北壁東隅	焼土のみ	平安後期	ピット	54住	
40	方形？	(256)x(240)x 25						不明	28住	18・47・50・63・64住	
41	長方形	500 x 704 x 32	32.36	N－90°－E	地床炉 1 〃 2	中央西寄 中央		弥生後期	37・48・52住、ピット		
42	方形	388 x 428 x 16	16.15	N－90°－W	カマド	西壁北寄	芯石あり	古墳後期	92・93・94土	44・55住	西北隅は区域外
43	方形	560 x 552 x 22	29.54	N－90°－E	カマド	東壁中央		古墳末期			主柱穴4個
44	長方形	396 x 512 x 17	20.08	N－90°－W	地床炉？	中央		弥生後～古墳中期	42・55住、93・95土		
45	長方形	400 x 560 x 28	21.27	N 85° W	地床炉	中央西寄		弥生後期	55住、ピット		
46	方形？	(240)x(172)x --						不明	49・89土、ピット		南と西は区域外へ
47	長方形	(520)x(420)x 18	18.67	N－25°－E	地床炉？	西壁際？		弥生後期	18・21・22・28・32・40・50住	63・64住	西は区域外へ続く
48	隅丸方形	720 x 704 x 19	47.80	N－90°－E	地床炉 1 〃 2 〃 3 〃 4	中央北寄 中央 中央 中央西寄		古墳中期	33・34住、103 土ピット	31・37・41・58・60住	
49	隅丸方形？	(240)x(260)x 18	5.74	N－95°－E	カマド	東壁中央		平安	103 土	57・58・62住	
50	方形？	256 x(120)x 23						不明	28・40住		東大半は区域外へ
51	不明	--- x --- x --			カマド？		焼土のみ	古墳中？	ピット		カマドとPのみ
52	長方形？	(272)x(336)x 3		N－90°－E	カマド	東壁北寄	袖石残存	平安後期		41住	南・西に暗渠
53	方形	368 x(248)x 35						弥生後？	1 建		東半部は区域外へ
54	長方形	(344)x(296)x 7		N －90°－E	カマド	東壁南寄	焼土のみ	不明	38・39住、ピット		
55	方形	372 x 360 x 15	12.82	N－0°	カマド？1 カマド？2	北壁西寄 東壁北寄	焼土のみ 焼土のみ	古墳後期	42・45住、ピット	44住	
56	方形？	272 x(284)x 12						平安	101・102・105土、ピット		
57	方形？	(256)x(292)x 11						不明	49住、103 土	58・62住	大半に49住が乗る
58	隅丸長方形	729 x 523 x 34	33.42	N－10°－E	埋甕炉 地床炉 1 〃 2 〃 3	中央北寄 中央 中央 中央南寄		弥生後期	38・48・49・57住 83・84・85・102・103 土、ピット	60住	
59	不明	(340)x(256)x --						平安	ピット		床の一部のみ確認
60	方形？	(204)x(248)x 24			埋甕炉	東寄り？		弥生後期	48・58住、103土 P		
61	方形？	(256)x(44)x 16						弥生後？	22住	14・51住	
62	隅丸方形？	532 x(480)x 10						古墳中期	49・57住	66・67住	検出時に削平
63	方形？	(172)x(228)x 11						不明	49・50住	64住	削平により未確認
64	隅丸長方形	532 x 380 x 51		N－20°－W	地床炉	柱穴間		弥生後期	14・18・22・40・47住		
65	方形？	(240)x(80)x 14						不明		66・67住	
66	方形？	(420)x(320)x 29						古墳後期	65住	62・67住	
67	方形？	(68)x(280)x 15						不明	65・66住	62住	

前田遺跡

1	隅丸方形	308 x 312 x 37	9.19	N－80°－W	カマド	西壁南寄				2・3住	
2	隅丸方形	580 x 580 x 25	33.25	N－90°－W	カマド	西壁中央			1住	3住	
3	隅丸方形	628 x 628 x 17	37.76	N－90°－E	カマド	東壁中央	煙道あり		1・2住		

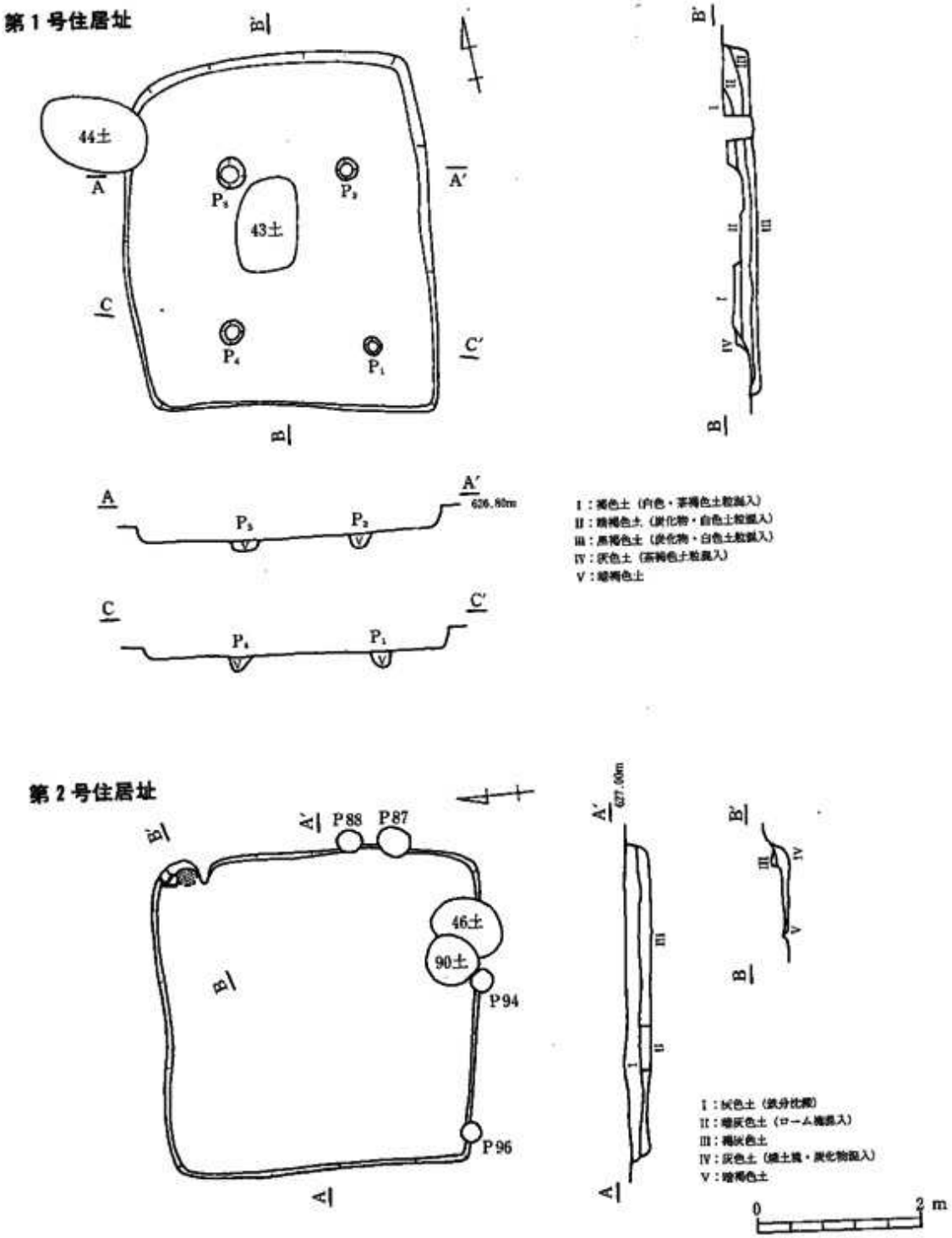
古屋敷・前田遺跡住居址一覧表(2)

遺構No.	図版No.	位置	平面形	規模 (cm)	断面形・深さ (cm)		切合関係 新	切合関係 旧	備考
1	48	(78. 12)	円形	108 × 96	長方形	28		2土	炭化物・礫多量混入
2	48	(78. 12)	円形	100 ×(60)	二段底	(19)	1土		
3	46	(75. 12)	長方形	248 × 124	長方形	25			
4	46	(78. 9)	長方形 ?	180 ×(120)	長方形 ?	15	5土		
5	48	(81. 12)	長方形	256 × 156	皿形	11		4・6土	
6	48	(81. 9)	方形 ?	(132) × (100)	皿形 ?	(8)	5・79土		
7	48	(81. 9)	長方形	160 × 84	隅丸長方形	23		6・8土	
8	48	(81. 9)	方形 ?	88 ×(44)	隅丸長方形 ?	(20)	7土		
9	48	(81. 9)	円形 ?	(100) ×(52)		(15)	10・11土		
10	48	(81. 9)	楕円形 ?	(200) × (140)	皿形	10	11土	9土	
11	48	(81. 6)	円形	136 × 99	皿形	10		9・10土	礫混入
12	48	(78. 9)	方形	108 × 108	皿形	12		13土	
13	48	(78. 6)	隅丸方形	216 × 184	皿形	18	12土		
14	48	(81. 6)	隅丸方形	204 × 192	隅丸長方形	24			
15	48	(81. 3)	円形	92 × 92	二段底	29			炭化物・礫多量混入
16	48	(81. 9)	円形	128 × 120	楕円形	27			
17	48	(84. 6)	円形 ?	112 ×(48)	皿形	7	18土		礫混入
18	48	(81. 0)	不整円形	160 × 148	隅丸長方形	14		17・19土	礫混入
19	48	(81. 0)	楕円形	(96) × 48	台形 ?	17	18土		
20	47	(78. 3)	隅丸方形	132 × 112	台形	21			
21	47	(78. 0)	隅丸長方形	152 × 116	二段底	25			
22	47	(75. 6)	円形	76 × 76		37			
23	47	(78. 6)	円形	68 × 68		12			
24	47	(72. 12)	楕円形	124 × 102	二段底	31			
25	47	(69. 12)	円形	84 × 80	皿形	15	P51	70土	
26	47	(69. 12)	円形	84 × 80	隅丸長方形	17			
27	47	(66. 15)	隅丸長方形	92 × 76	擂鉢形	17	P55	28土	
28	47	(66. 15)	隅丸長方形	148 × 98	皿形 ?	19	27土・P55		
29	47	(63. 12)	不整楕円形	280 × 208	擂鉢形	20	30・31土		
30	47	(63. 15)	円形	68 × 64		10		29土	
31	47	(60. 15)	円形	88 × 88	皿形	14		29土	
32	47	(60. 15)	楕円形	204 × 172	楕円形	10		72土	礫多量混入
33	47	(66. 6)	方形	116 × 100	長方形	42	P38	P37	火葬墓？粘質土上に炭化物層
34	47	(66. 3)	隅丸三角形	120 × 112	隅丸長方形	28		P34	礫混入
35	47	(69. 3)	方形	132 × 128	隅丸長方形	20		34土	
36	47	(72. 6)	隅丸長方形	136 ×(108)	隅丸長方形	22	35土		礫少量混入
37	47	(72. 3)	隅丸長方形	216 × 140	二段底	14	69土	38・71土	
38	47	(69. 3)	隅丸長方形	108 ×(72)	皿形 ?	9	37・69土		
39	47	(69. 0)	長方形	72 × 60		13			
40	47	(69. 0)	不整楕円形	104 × 68		9			
41	47	(63. 0)	楕円形	76 × 48		15		42土	
42	47	(63. 0)	不整円形	128 × 128		22	41土		
43	47	(3. 3)	隅丸長方形	112 × 80	長方形	17		1住	
44	47	(3. 3)	楕円形	136 × 92	長方形	57		1住	
45	47	(6. 6)	隅丸長方形	68 × 52	二段底	33			
46	47	(6. 3)	円形	88 × 56	皿形	11	P90	2住	
47	47	(6. 0)	不整長方形	88 × 72	三段底	49		3住	
48	48	(6. 6)	円形	132 × 120	台形	23	P2028		第1検出面
49	48	(9. 9)	楕円形	156 × 132	台形	54			第1検出面
50	48	(12. 6)	楕円形	92 × 76	皿形	10		4住、3溝	
51	48	(15. 6)	円形 ?	136 ×(44)	台形	51	52土		
52	48	(15. 3)	円形	168 × 160	台形	42		10・29住、51土	
53	48	(15. 6)	隅丸長方形	124 × 72	隅丸長方形	11	P130	6・10住	

第2表　古屋敷遺跡土坑一覧表(1)

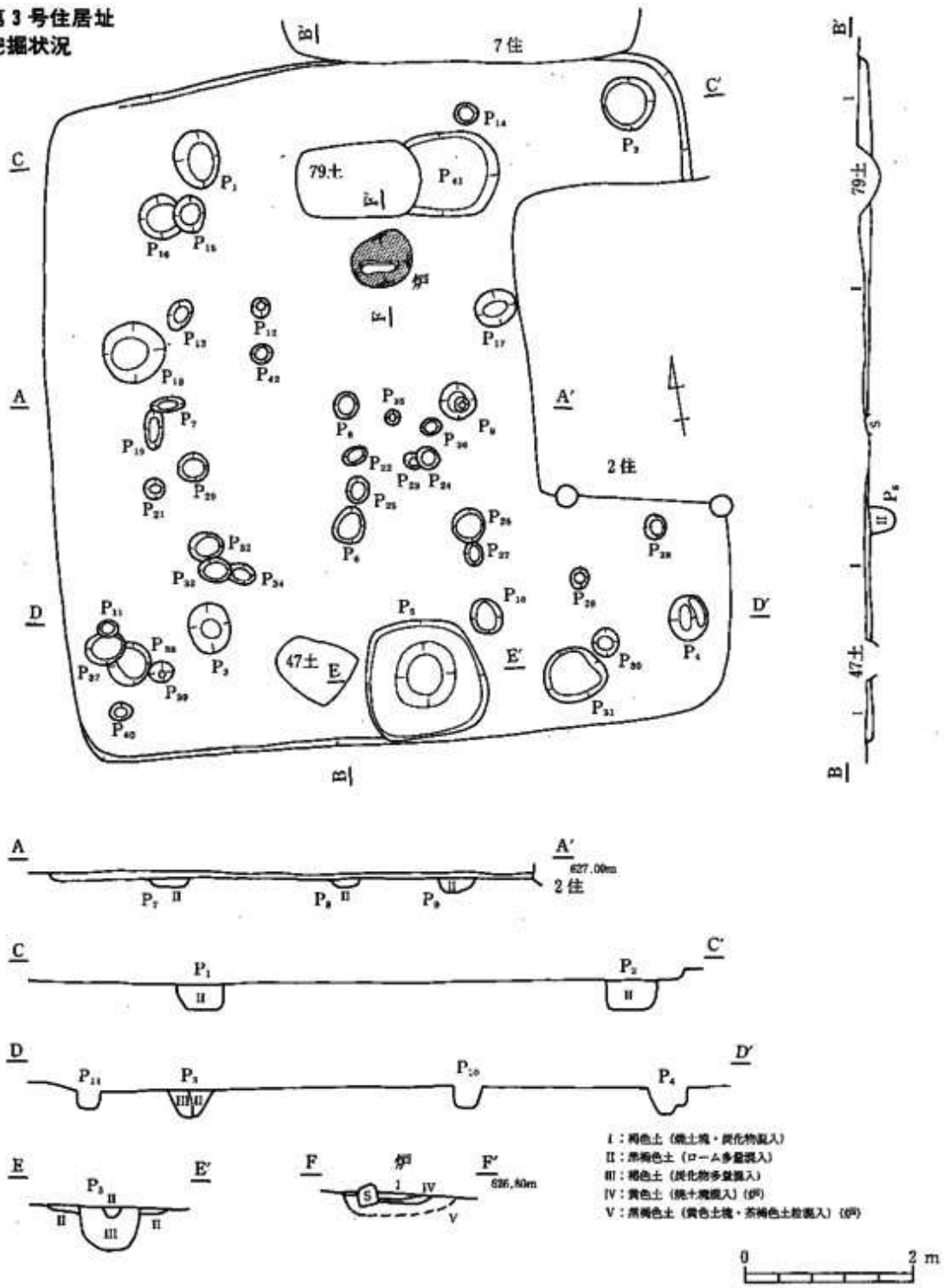
遺構No.	図No.	位置	平面形	規模 (cm)	断面形・深さ (cm)		切合 新	関係 旧	備考
5443		(15, 6)	円形	72 × 72	長方形	22		6・10・61住	
5543		(12, 6)	円形	60 × 56	方形	42		4住	
5643		(18, 9)	円形？	84 ×(60)	皿形	15			西半分は区域外へ続く
5743		(18, 9)	円形	76 × 72	長方形	22		P396	
5843		(18, 3)	楕円形	144 × 124	二段底	47		6・10・11住	
5943		(12, 3)	楕円形	92 × 68	不整長方形	29		3・29住	
6044		(42, 3)	不整楕円？	104 × 88	皿形	17	28住	47住	礫混入
6144		(27, 9)	円形	112 × 108	台形	46		16住	礫混入
6244		(27, 6)	楕円形	100 × 84	台形	40		13・16住	礫混入
6344		(27, 3)	楕円形	92 × 84	円形	30		16住、76土	礫混入
6446		(30, 3)	円形	68 × 60	台形	30			
6546		(30, 3)	楕円形	68 × 56	円形	28	P232		
6646		(27, 6)	円形	52 × 52	二段底	20		26住	
6744		(6, 3)	円形	144 × 142		12		3住	
6844		(15, 6)	円形	68 × 64		11		6住	
6942		(72, 3)	隅丸長方形	124 × 100	皿形	12		37・38・71土	第1検出面
7041		(69, 15)	円形	84 × 84	隅丸長方形	17	25土、P52・53		
71		(72, 0)	楕円形？	84 ×(36)	隅丸長方形？		37・69土		第1検出面
7242		(57, 15)	円形	120 × 104	楕円形	11	32土、P79		第1検出面
7344		(24, 3)	方形	252 × 244	皿形	16	P151・193・230	9・20住、74土	第1検出面
7444		(27, 0)	不定形	292 × 224	皿形	5	73土、P150 ほか		
7545		(30, 0)	不整方形	76 × 72		20			
7644		(27, 0)	楕円形	72 ×(48)		11	16住、63土		
7745		(30, 6)	不整円形	68 × 60		38	P261		
7845		(39, 6)	円形	96 × 96	隅丸長方形	20		18住	
7945		(12, 0)	隅丸長方形	144 × 88	隅丸長方形	16		3住	
8045		(24, 6)	楕円形	72 × 60	二段底	13		9・13・16住	礫混入
8145		(69, 12)	楕円形	248 × 124	皿形	12			礫混入
8245		(66, 6)	方形	152 × 140	皿形	11	P447・462・463	P461	
8345		(66, 3)	長方形？	224 × 168	隅丸長方形	25	84土	58住	
8445		(66, 3)	長方形	180 × 92	皿形	20		58住、83土	
8545		(63, 0)	隅丸長方形	188 ×(124)	台形	35	102 土	58住	
8646		(56, 6)	長方形	80 × 56		22			
8746		(9, 9)	楕円形	72 × 62	台形	38			第1検出面
8846		(9, 9)	楕円形	68 × 48	台形	35			第1検出面 礫混入
8946		(6, 9)	楕円形	92 × 72	長方形	30			第1検出面 礫混入
9046		(69, 0)	不定形	164 × 148	皿形	6			
9146		(69, 0)	楕円形	88 × 60	擂鉢形	20			
9246		(69, 0)	円形	76 × 68	台形	33			
93		(81, 3)	円形	104 × 100				42・44住、95土	未掘 礫混入
94		(75, 0)	円形	88 × 84					未掘
95		(81, 3)	円形？	(32) ×(24)			93土	42・44住	未掘
9646		(72, 3)	隅丸長方形	144 × 124	皿形	11			
9746		(72, 3)	不定形	128 × 104	皿形	13	P496・526		
9846		(72, 3)	不整長方形	196 × 144	皿形	8	100 土		
9946		(69, 6)	不整長方形	100 × 72	皿形	10	P448・449・500		
10047		(72, 6)	方形？	148 ×(120)	皿形	33	101 土	56住、98土	
10147		(72, 6)	不整長方形	172 × 140	皿形	17		56住、100・106土	
10247		(63, 0)	隅丸長方形	212 × 188	皿形	13	P457	49・57・58住、85土	
10347		(60, 0)	長方形？	192 × 148		14		48・58・60住	
10446		(45, 3)	円形	64 × 60	二段底	23		21・47 住	礫混入
10547		(69, 3)	長方形	120 × 108	皿形	10		56住、101・106土	
10647		(69, 6)	不定形？	150 × 100	皿形	11	101・105 土	56住	

古屋敷遺跡土坑一覧表(2)



第7図　古屋敷遺跡第1・2号住居址

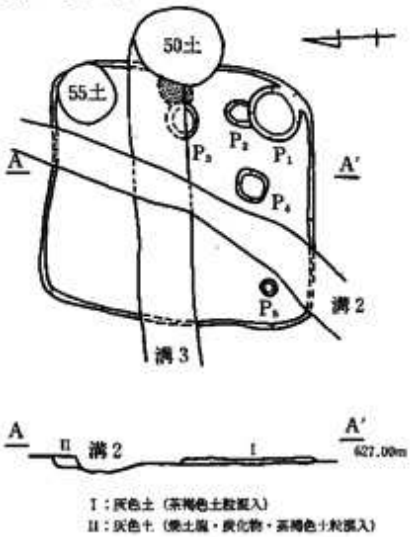
第3号住居址
完掘状況



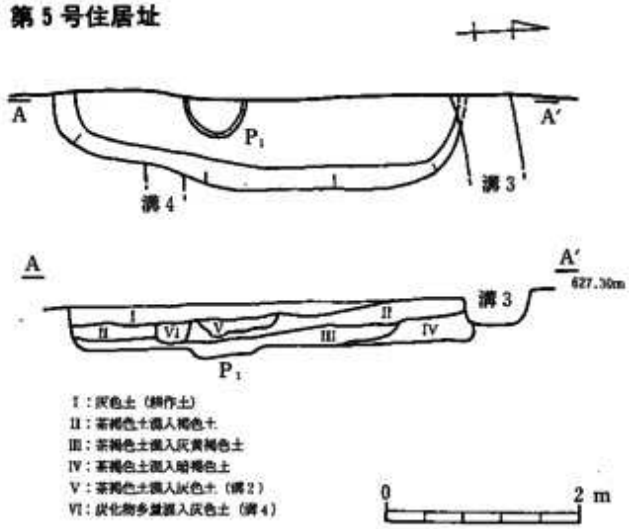
第8図　古屋敷遺跡第3号住居址

第3号住居址
出土状況

第4号住居址

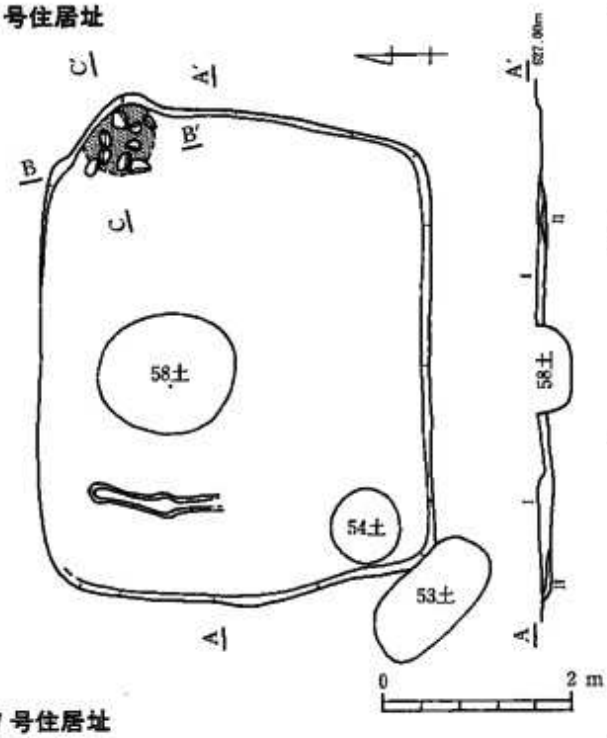


第5号住居址

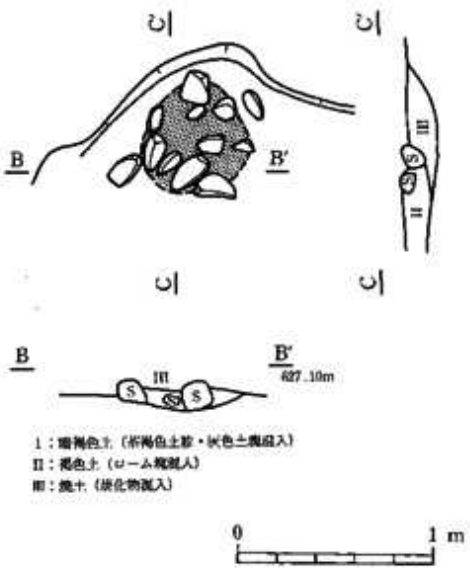


第9図　古屋敷遺跡第3・4・5号住居址

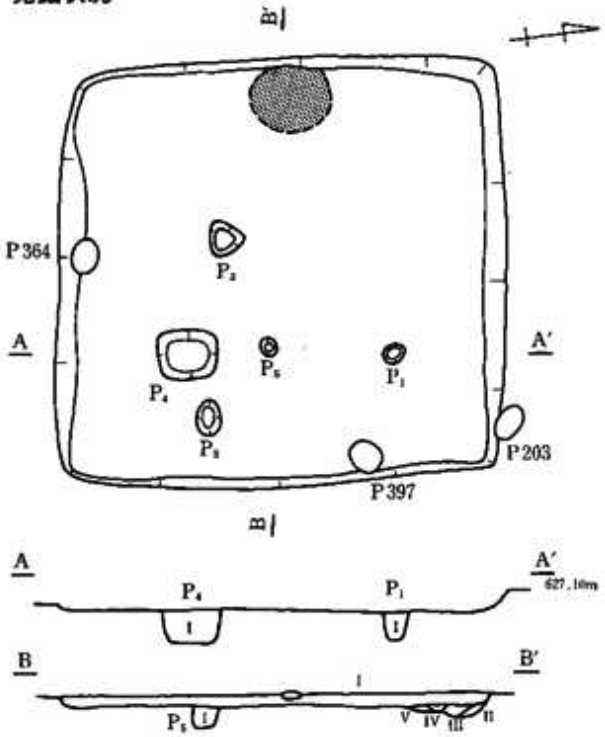
第6号住居址



カマド

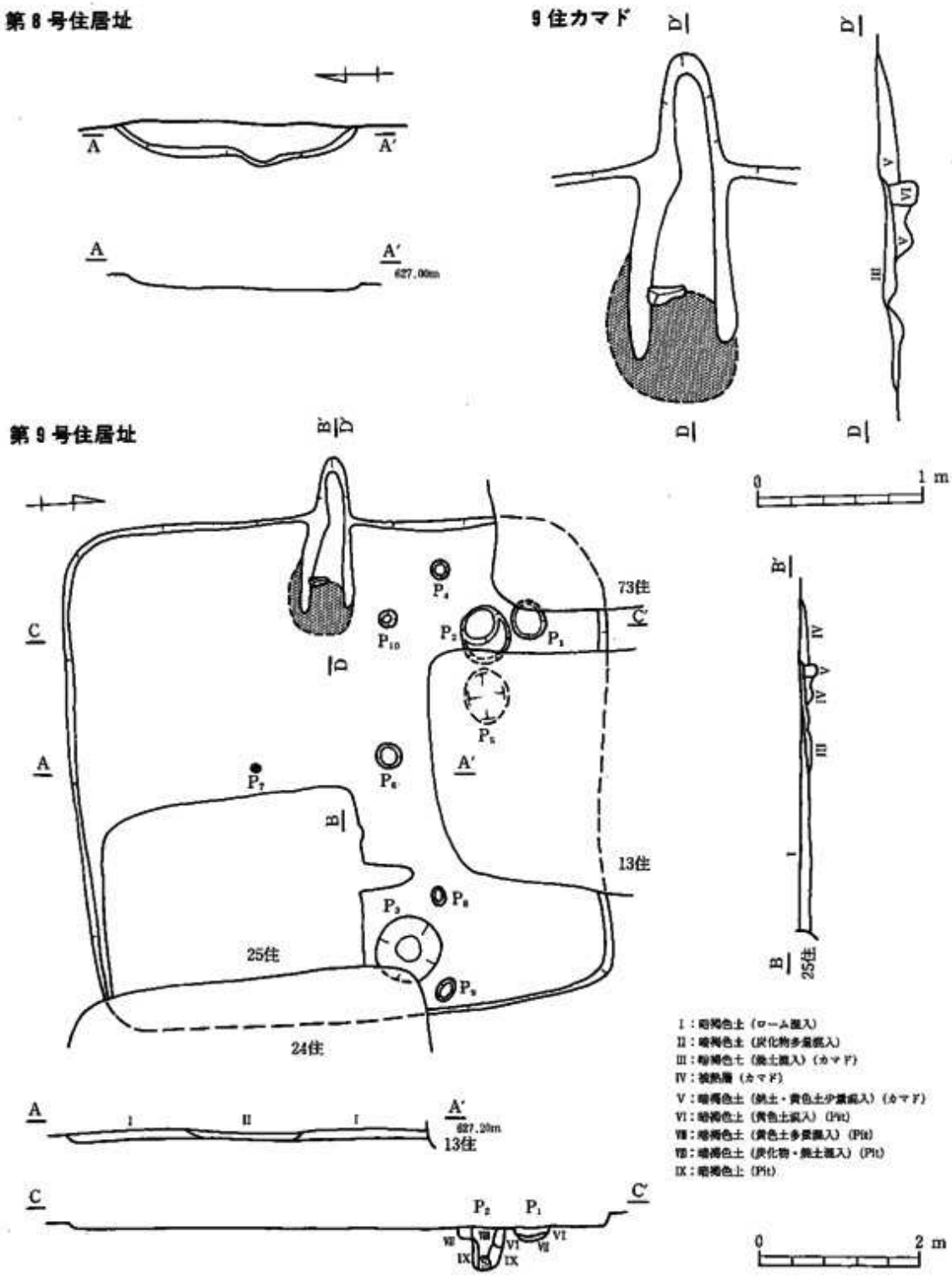


第7号住居址
完掘状況



出土状況

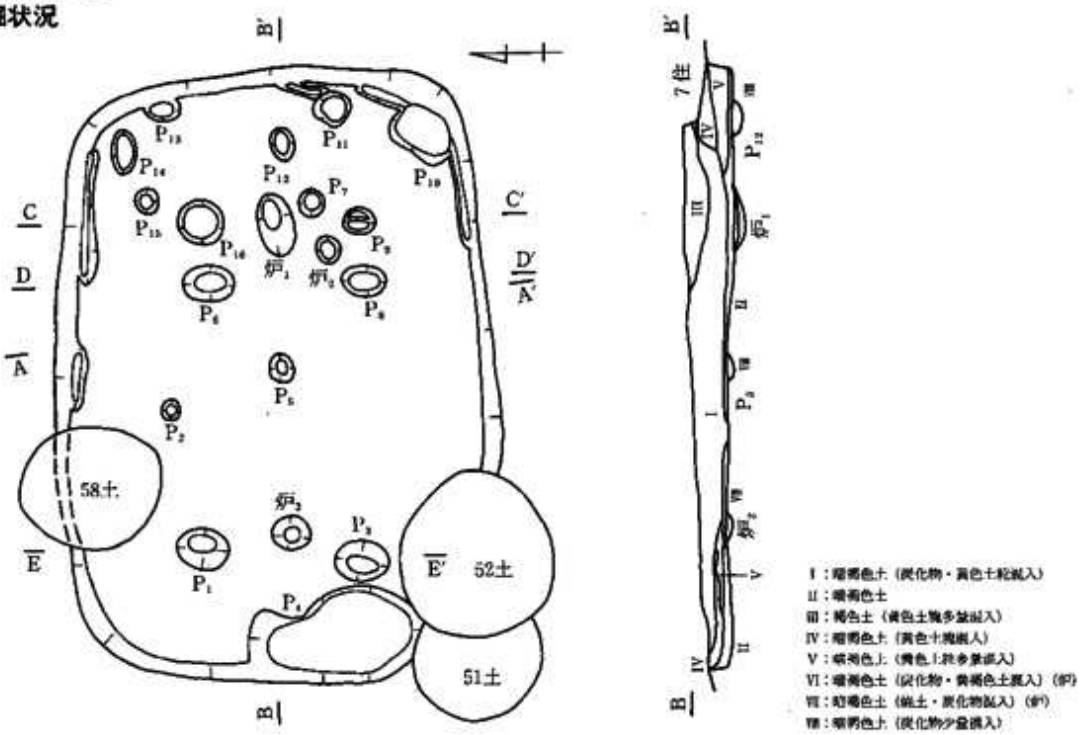
第10図　古屋敷遺跡第6・7号住居址



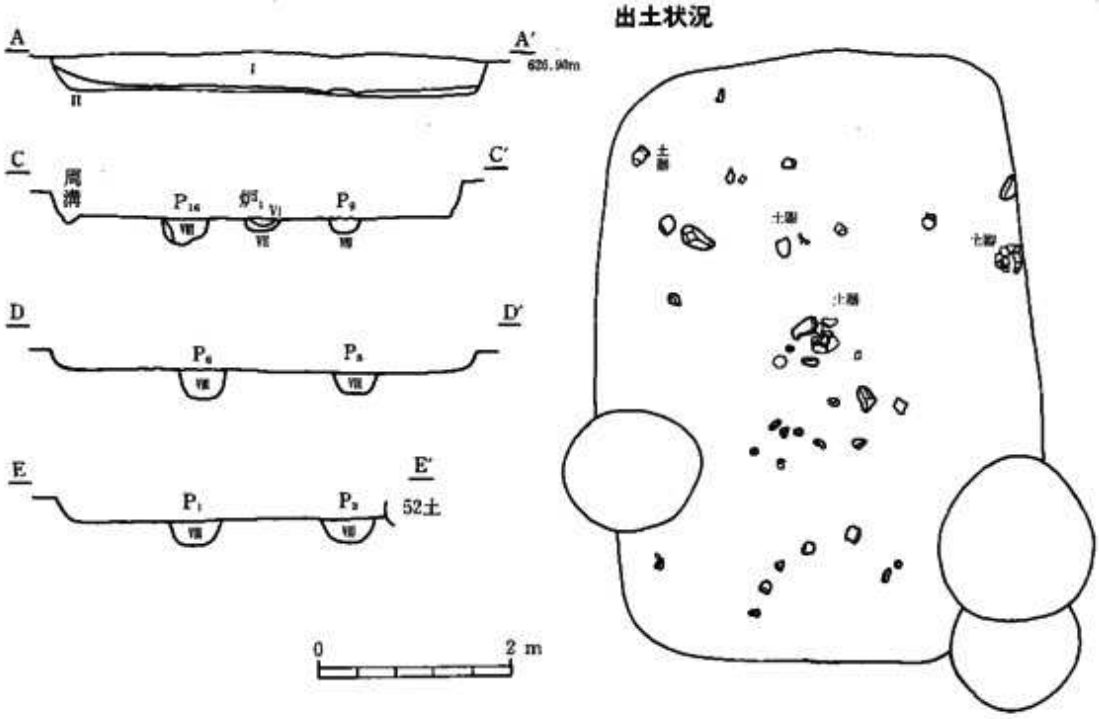
第11図　古屋敷遺跡第8・9号住居址

第10号住居址

完掘状況



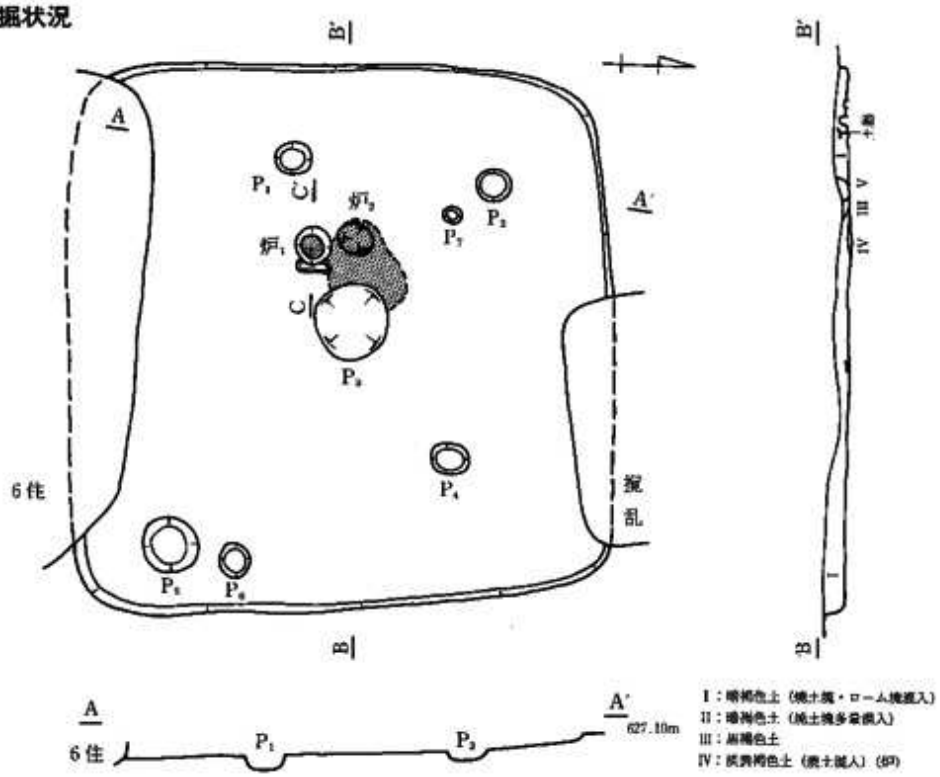
出土状況



第12図　古屋敷遺跡第10号住居址

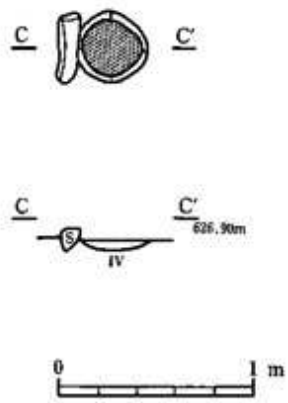
第11号住居址

完掘状況

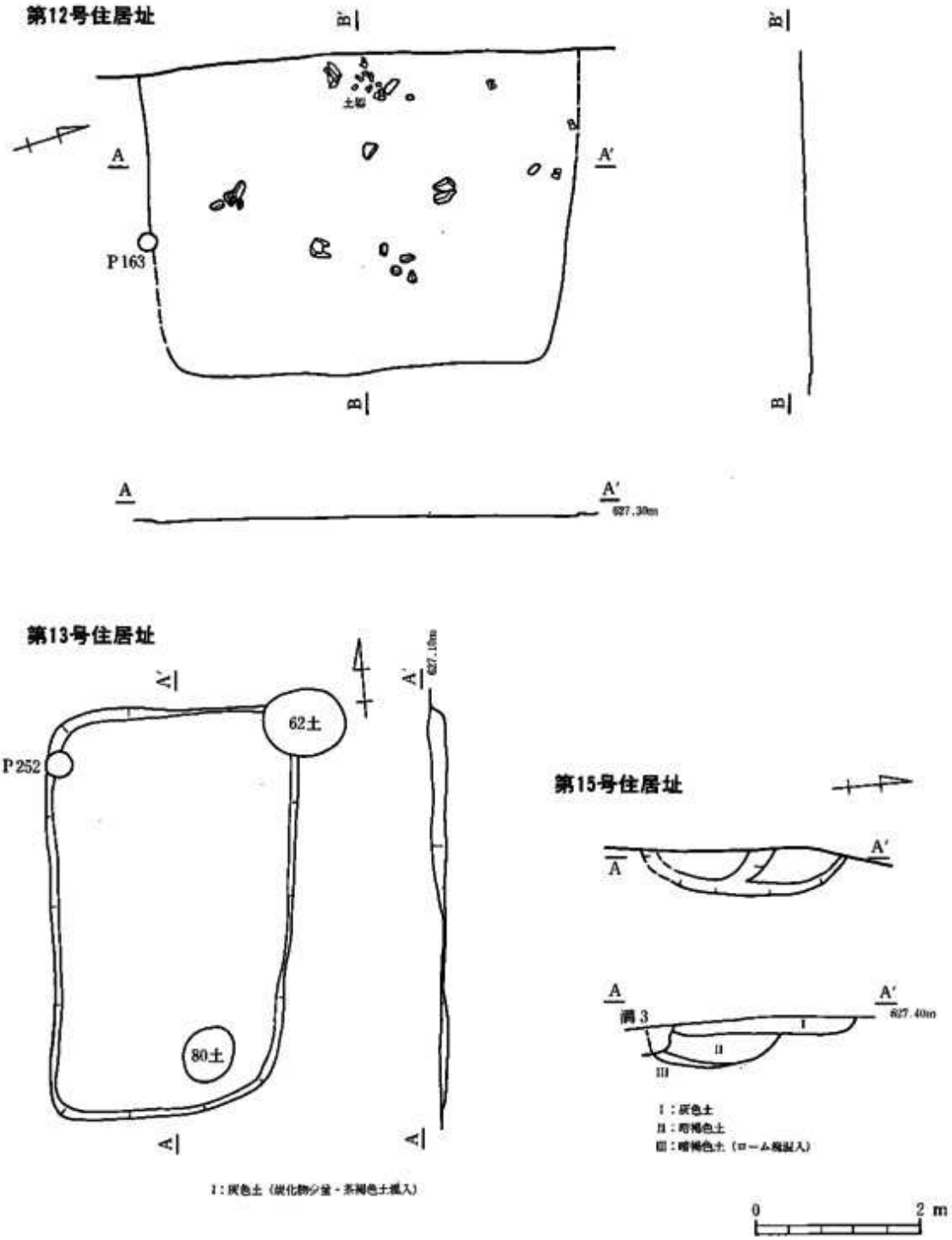


出土状況

炉1

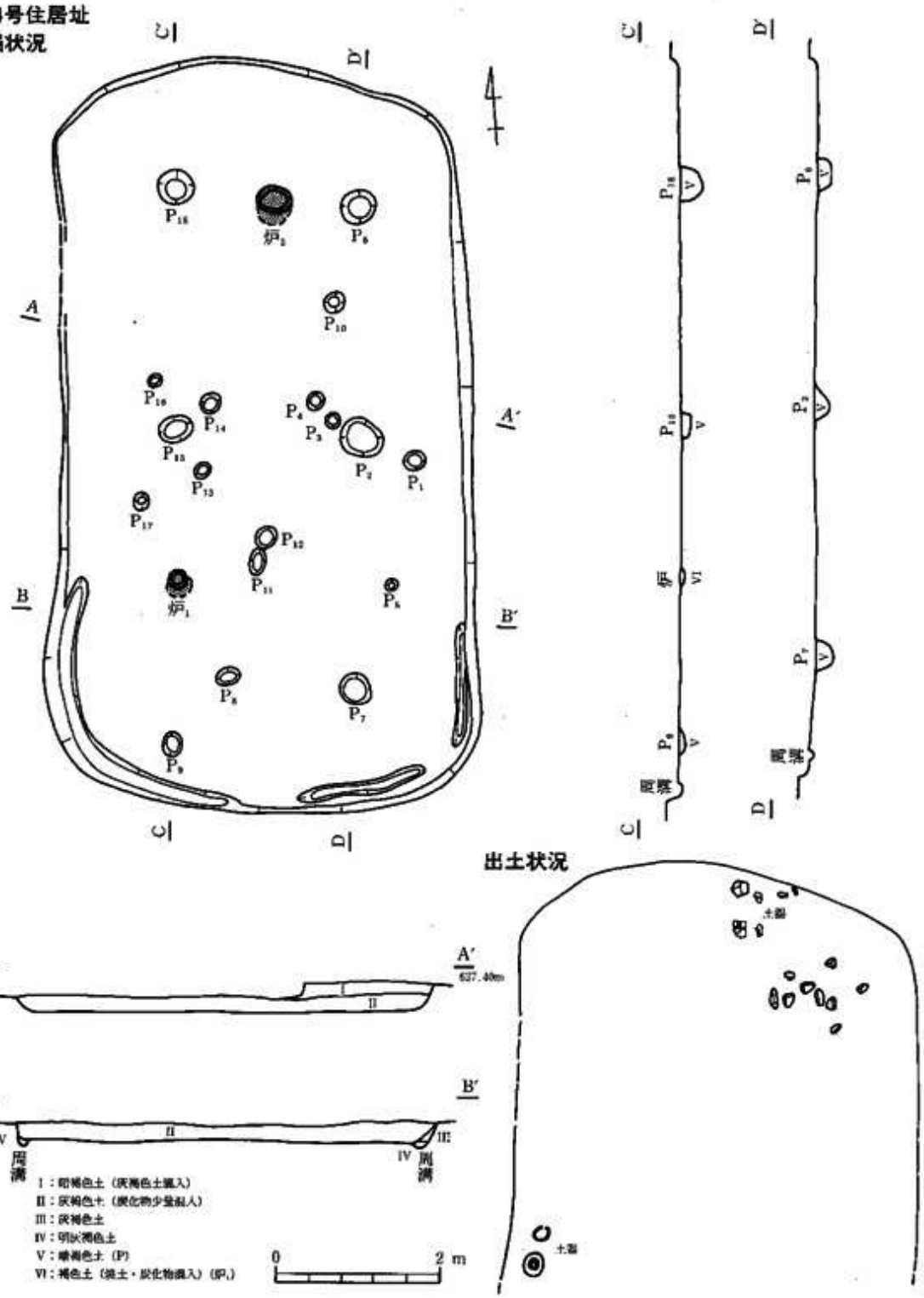


第13図　古屋敷遺跡第11号住居址

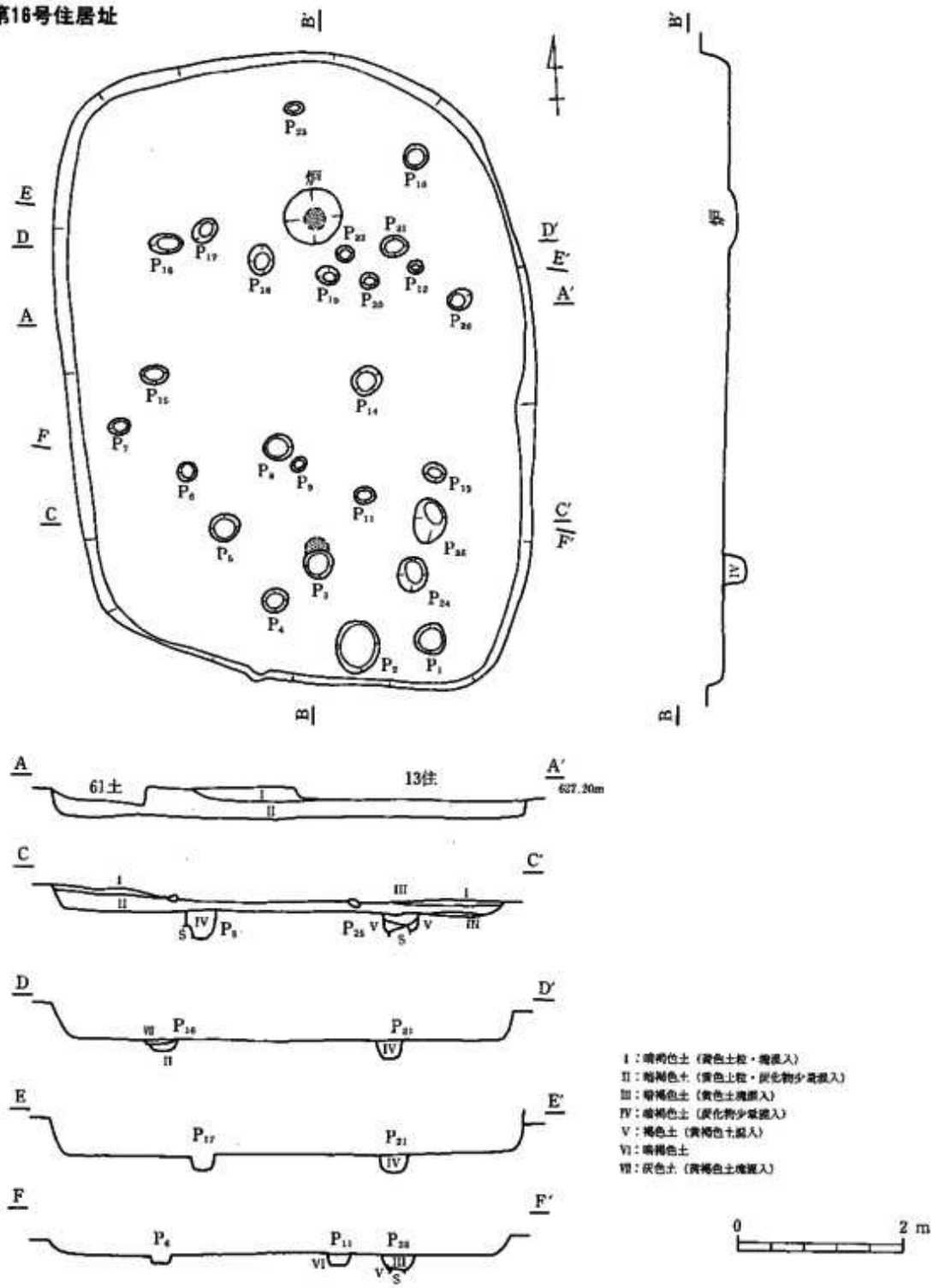


第14図　古屋敷遺跡第12・13・15号住居址

第14号住居址
完掘状況

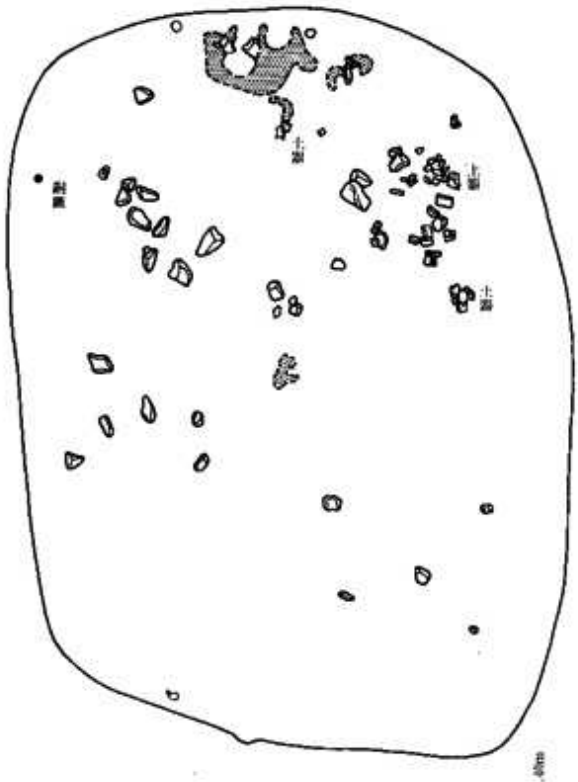


第15図　古屋敷遺跡第14号住居址

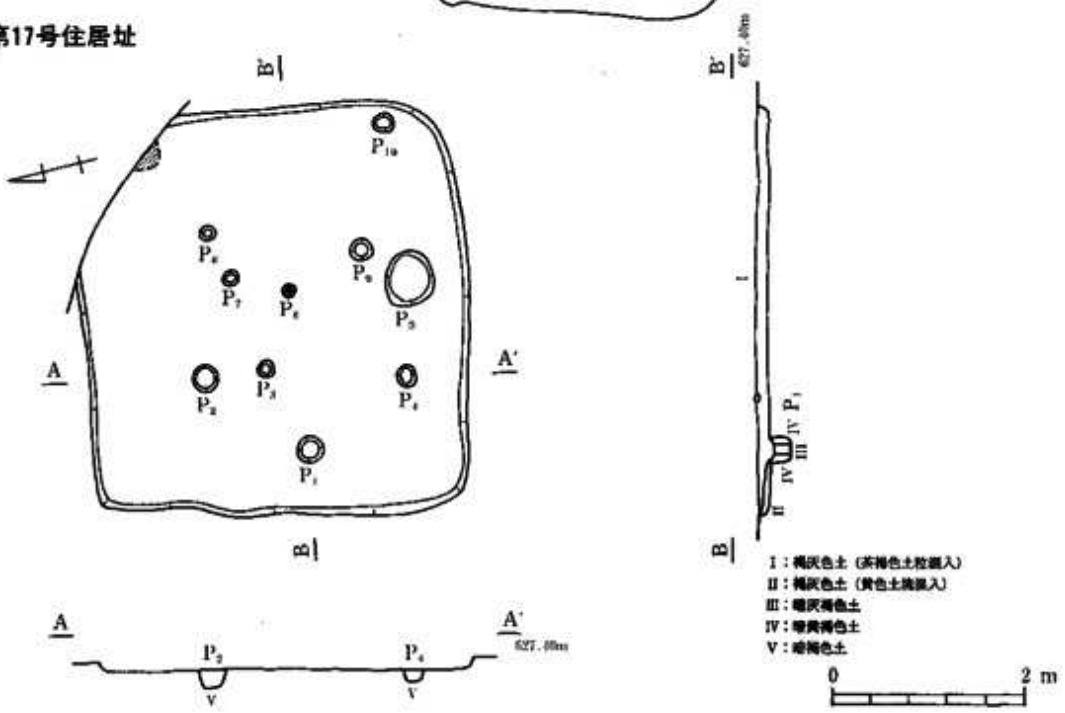


第16図　古屋敷遺跡第16号住居址

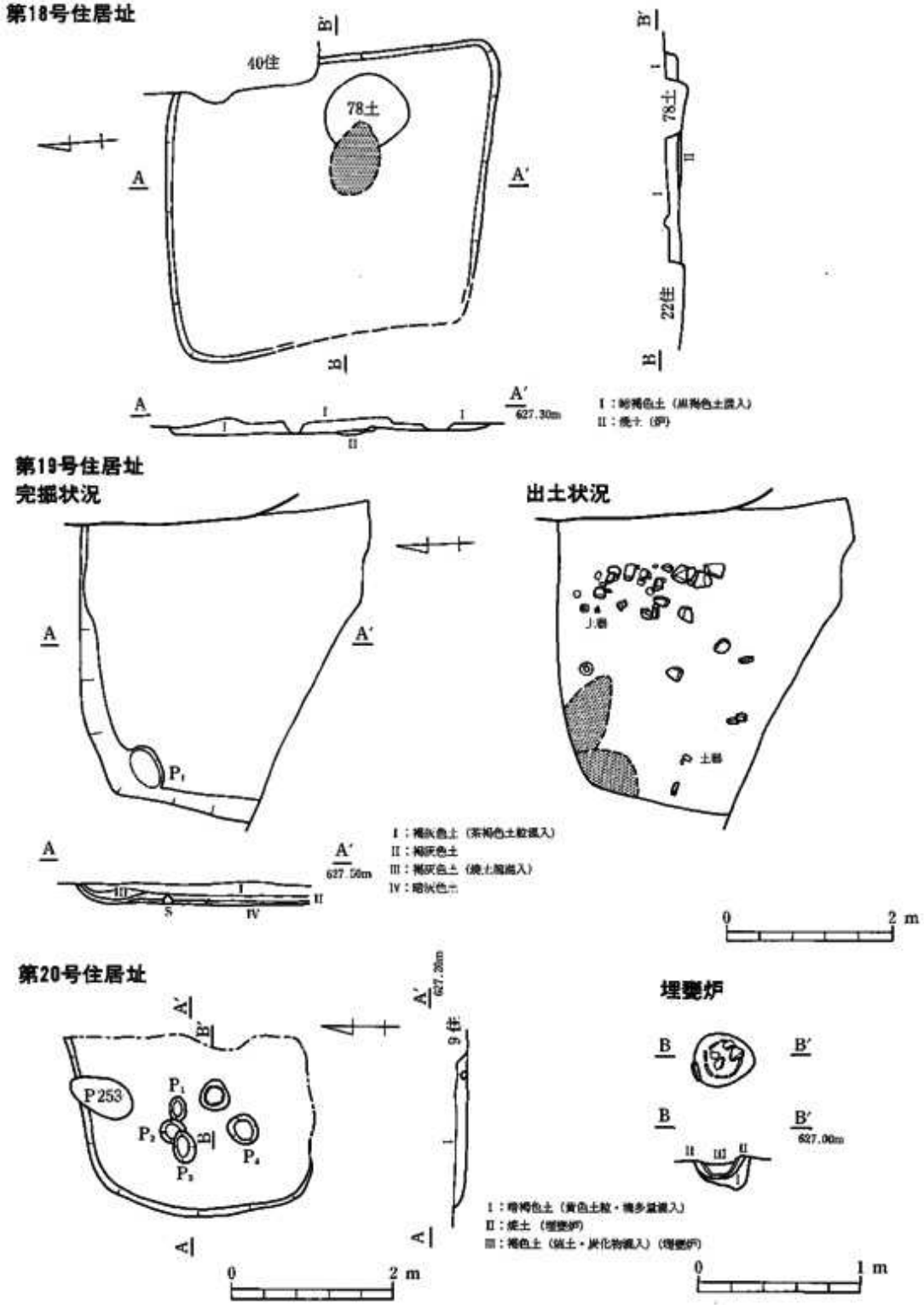
第16号住居址
出土状況



第17号住居址

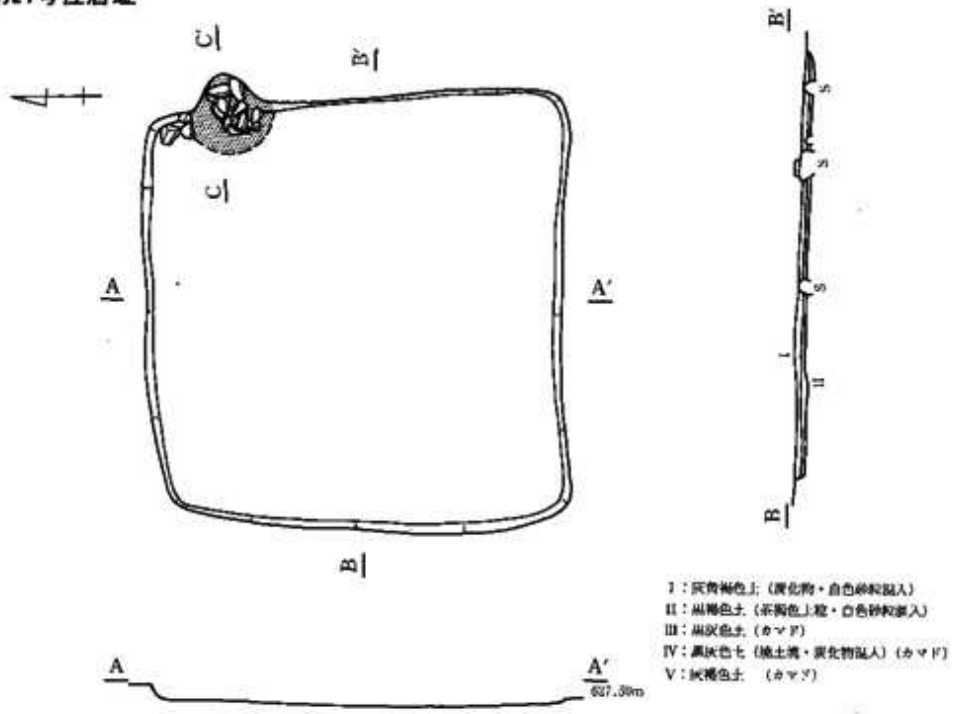


第17図　古屋敷遺跡第16・17号住居址

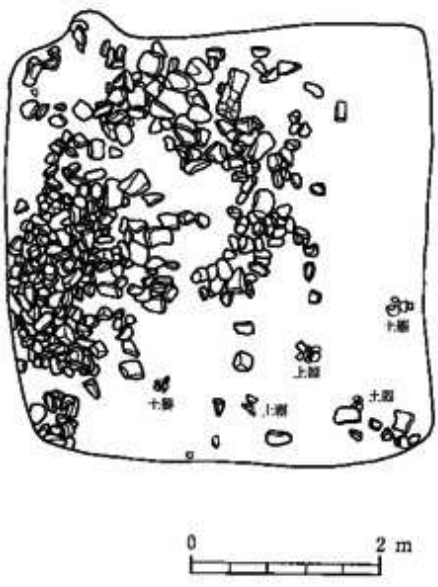


第18図　古屋敷遺跡 第18・19・20号住居址

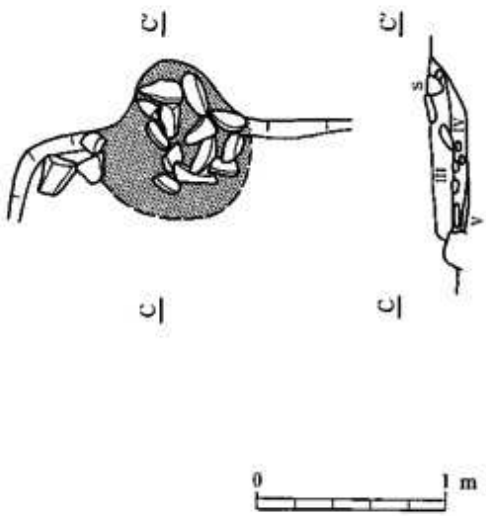
第21号住居址



出土状況

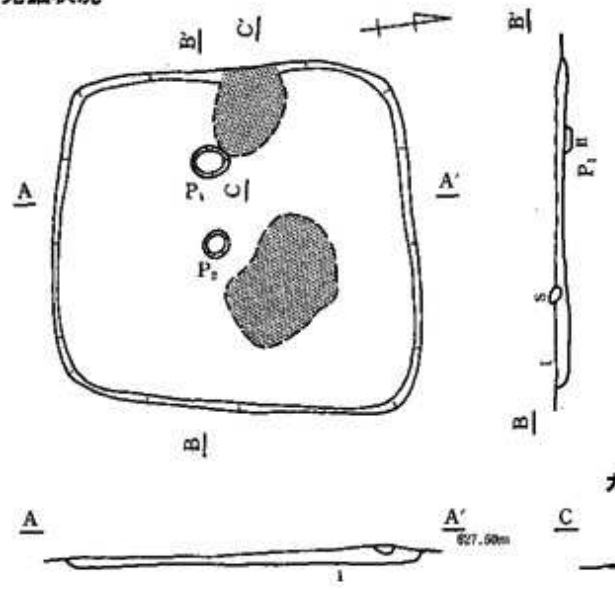


カマド

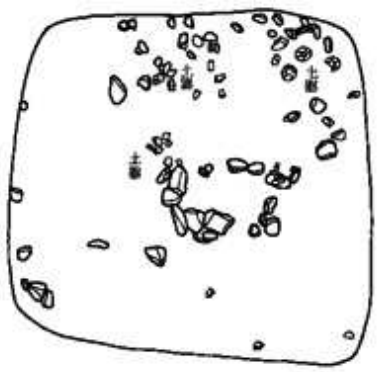


第19図　古屋敷遺跡第21号住居址

第22号住居址
完掘状況



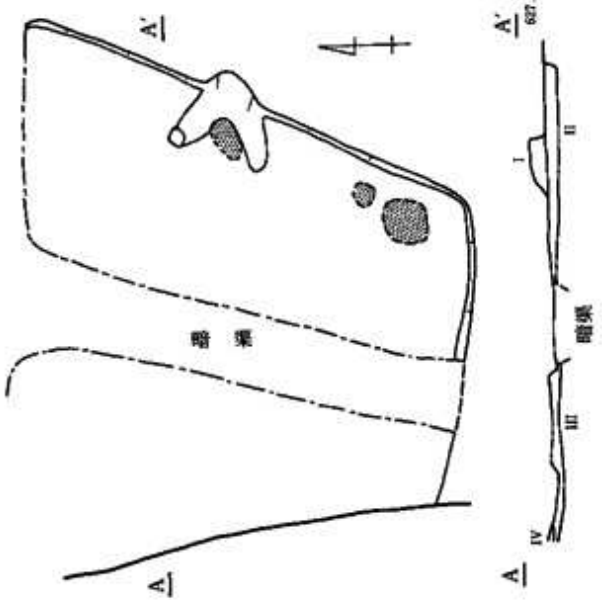
出土状況



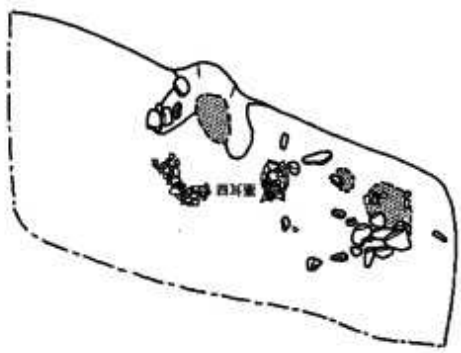
カマド

I：灰褐色土（茶褐色土混入）
II：暗褐色土（焼土・炭化物混入）（P）
III：暗褐色土（焼土・炭化物多量混入）（カマド）
IV：焼土（カマド）

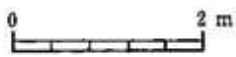
第23号住居址



出土状況

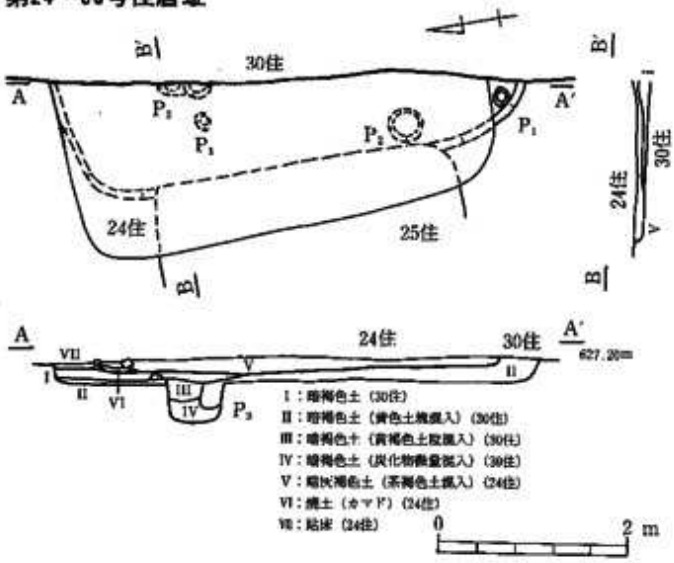


I：褐灰色土
II：黒褐色土（ローム粒混入）
III：暗灰色土（茶褐色土粒混入）
IV：灰色土

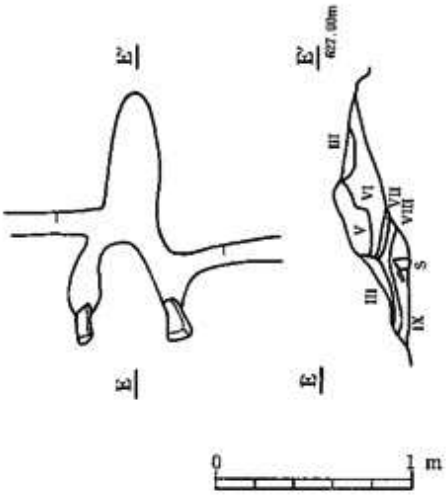


第20図　古屋敷遺跡第22・23号住居址

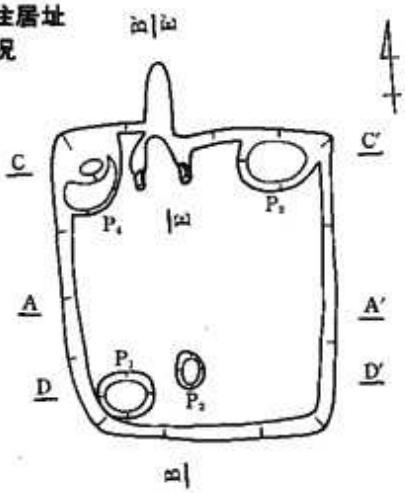
第24・30号住居址

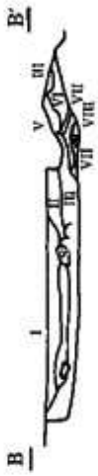


25住カマド

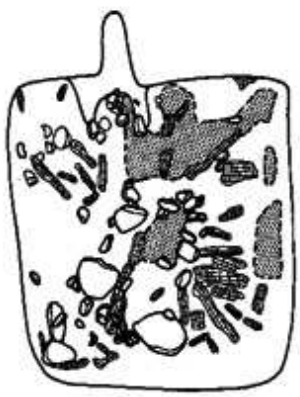


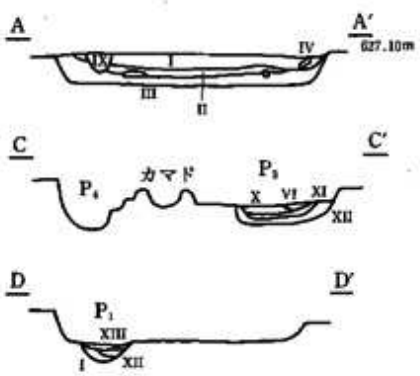
第25号住居址
完掘状況





出土状況



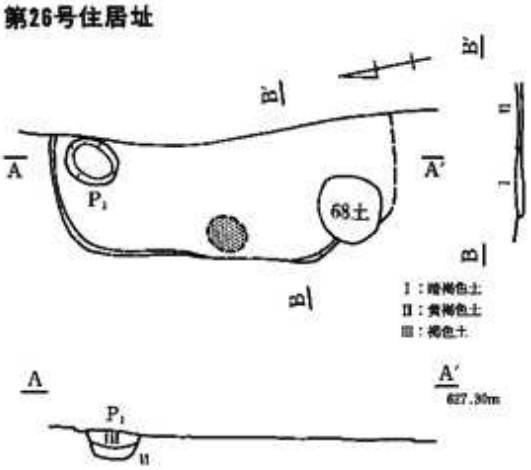


I：暗褐色土（黄色十粒多量混入）
II：暗褐色土（黄色土粒少量混入）
III：暗褐色土（炭化物・焼土少量混入）
IV：暗褐色土（炭化物・焼土多量混入）
V：暗褐色土（未崩落の天井被覆で赤変）（カマド）
VI：暗褐色土（焼土粒・塊混入）（カマド）
VII：暗褐色土（焼土粒少量混入）（カマド）
VIII：暗褐色土（焼土粒・炭化物混入）（カマド）
IX：暗褐色土
X：暗褐色土（黄色土粒・炭化物少量混入）（P）
XI：暗褐色土（黄色土粒・炭化物混入、上部焼土層）（P）
XII：暗褐色土（黄色土粒・塊・炭化物多量混入）（P）
XIII：暗褐色土（炭化物多量混入）

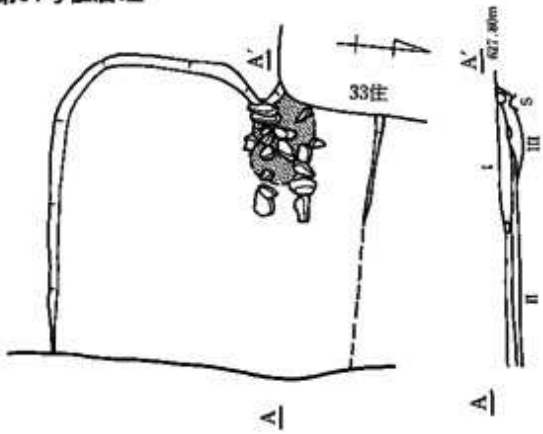
0
2 m

第21図　古屋敷遺跡第24・25・30号住居址

第26号住居址

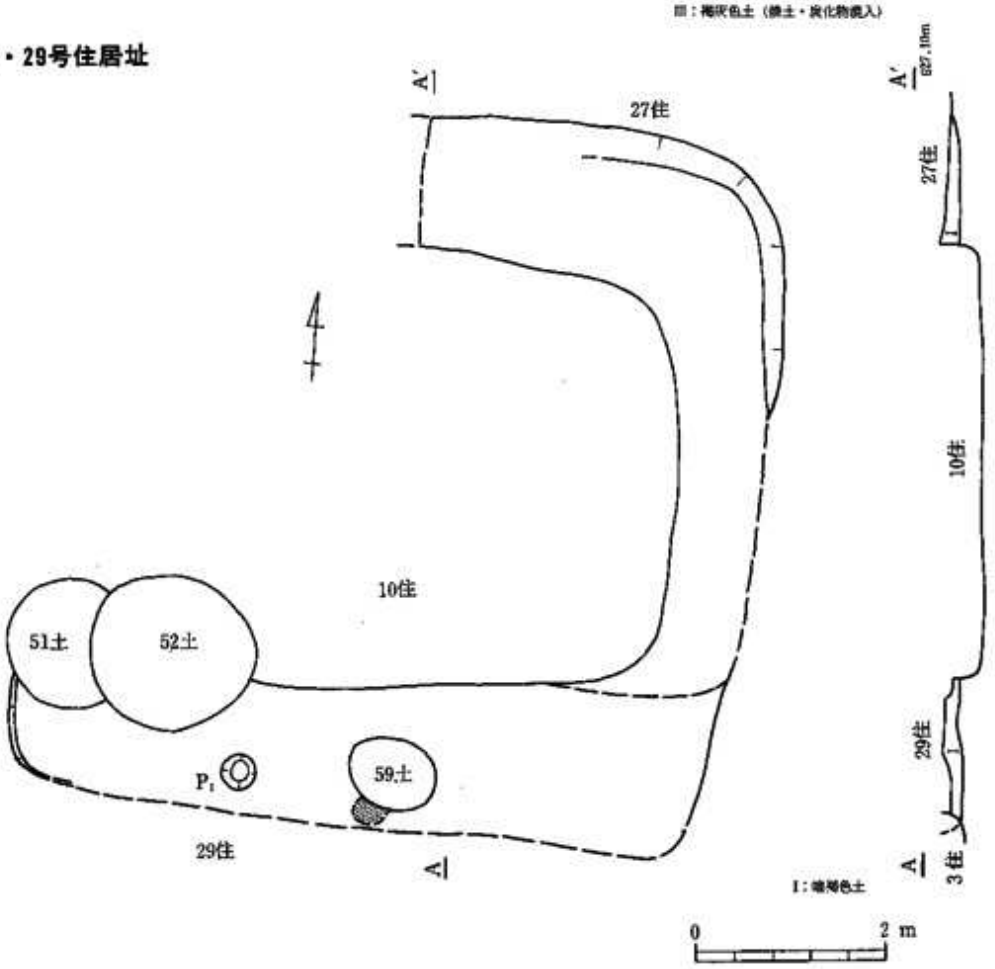


第34号住居址

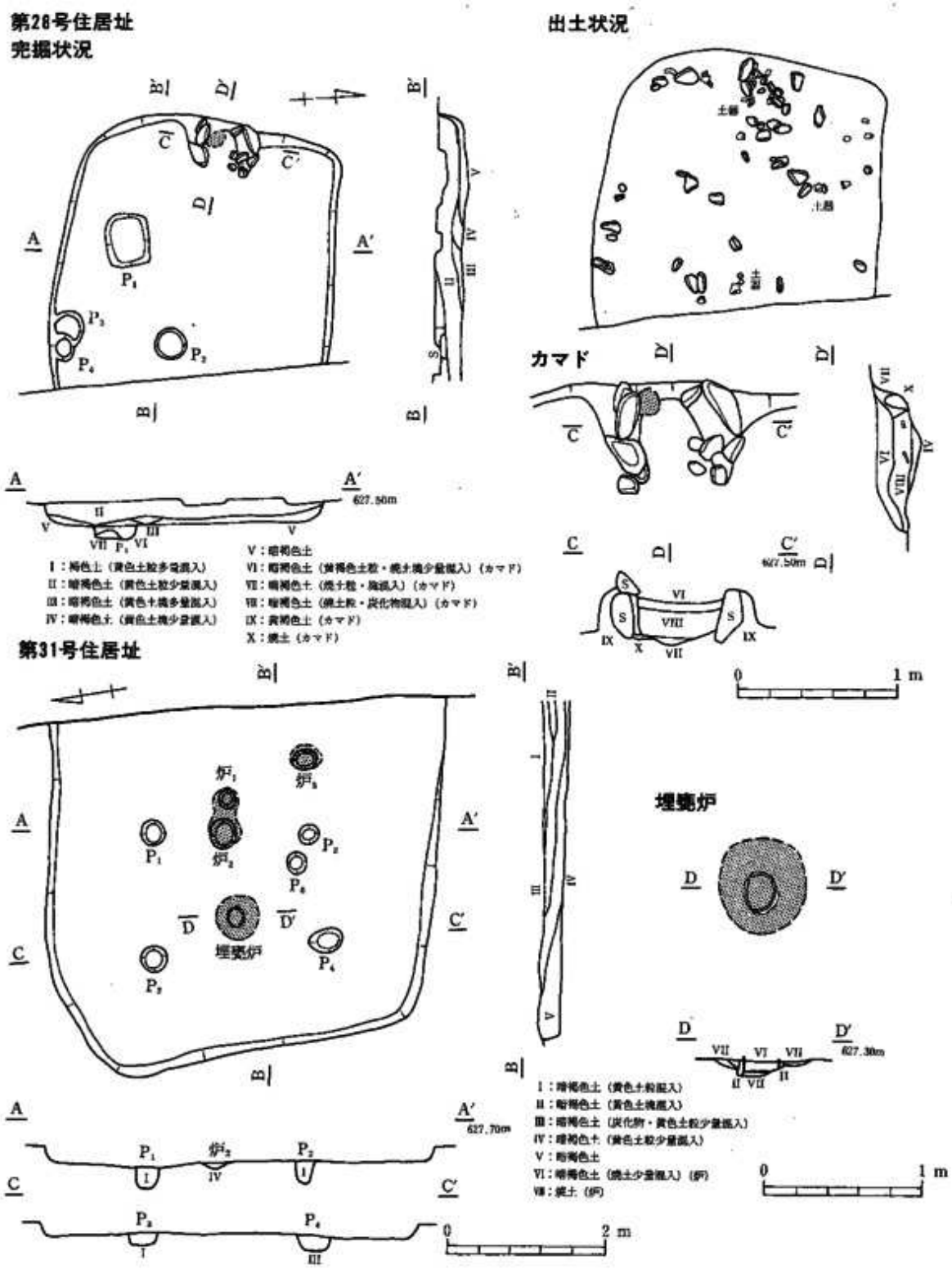


I：褐灰色土（茶褐色土混入）
II：褐灰色土（茶褐色土少量混入）
III：褐灰色土（焼土・炭化物混入）

第27・29号住居址



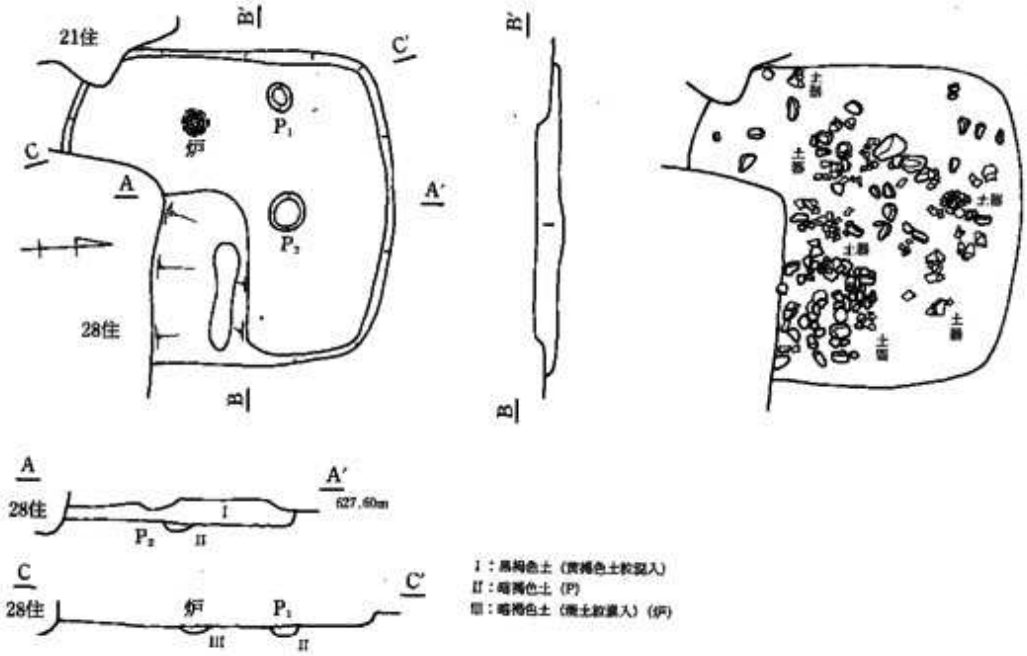
第22図　古屋敷遺跡第26・27・29・34号住居址



第23図　古屋敷遺跡 第28・31号住居址

第32号住居址

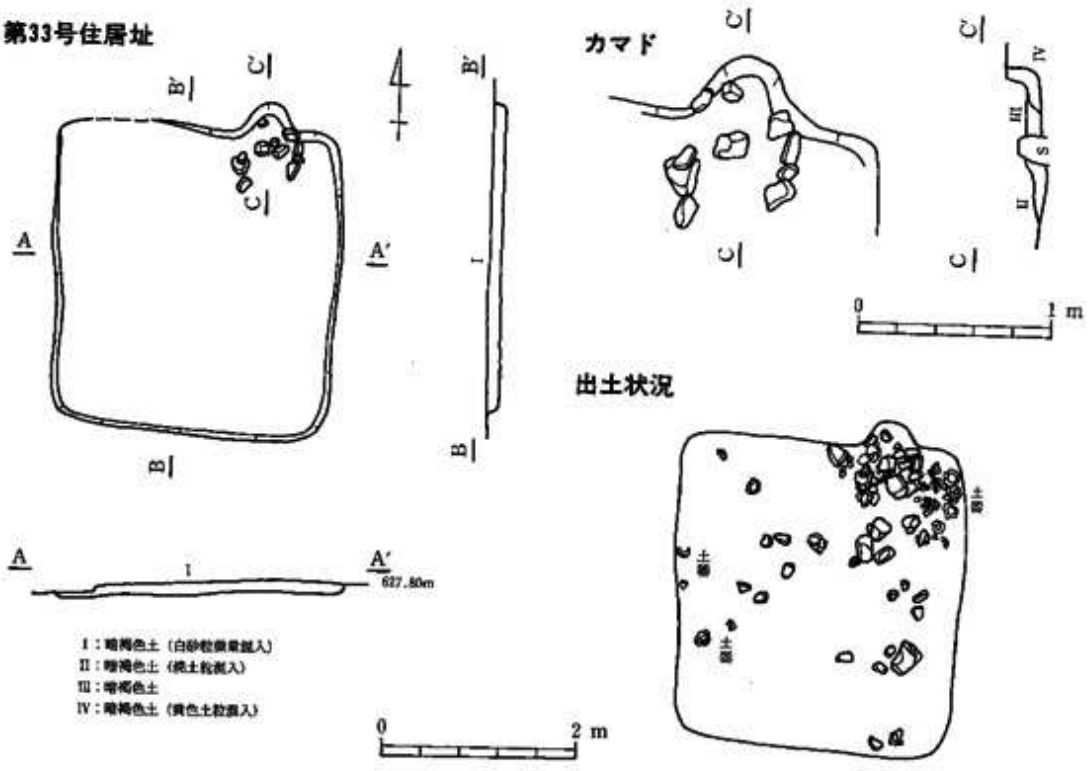
出土状況



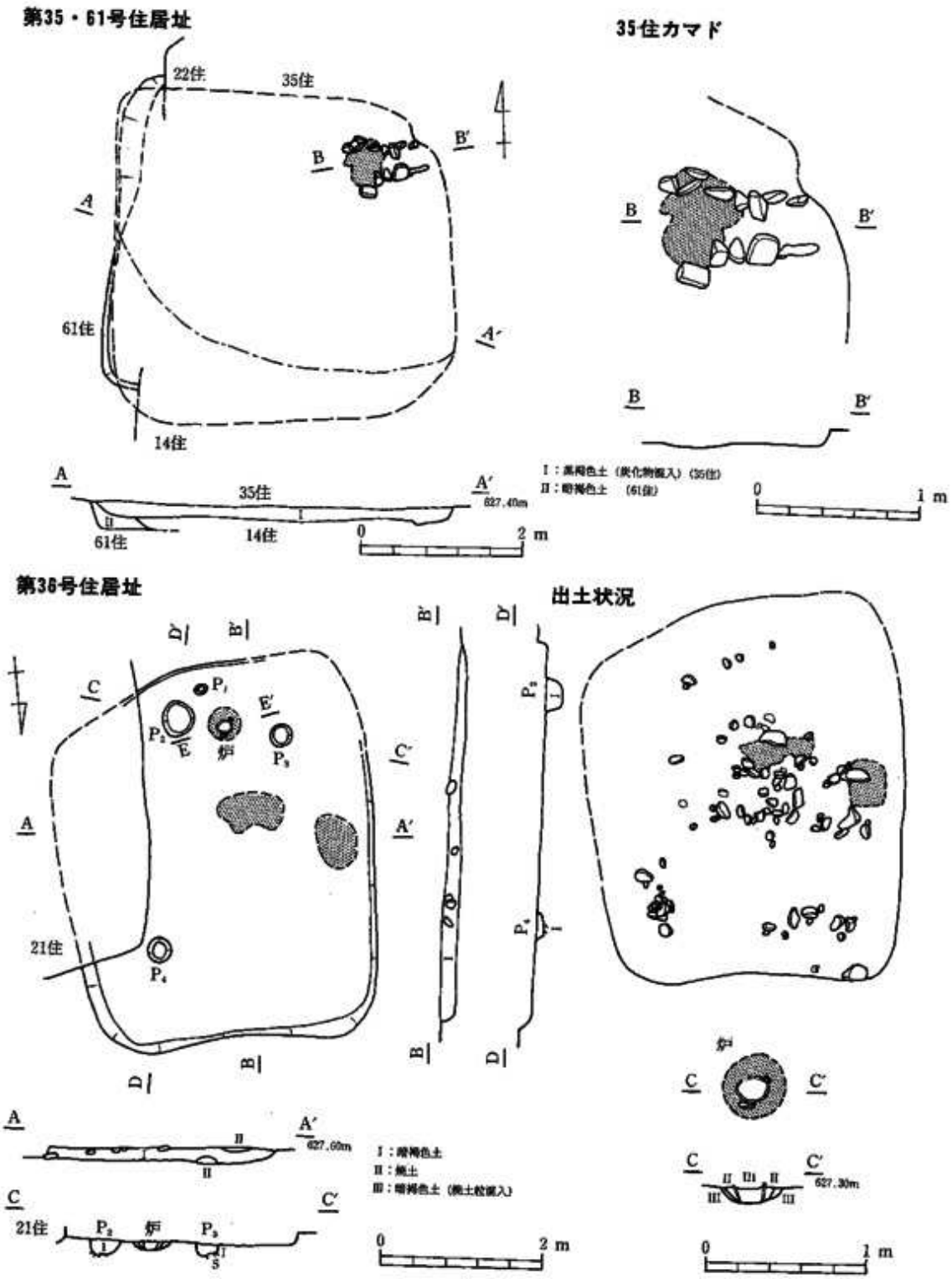
第33号住居址

カマド

出土状況

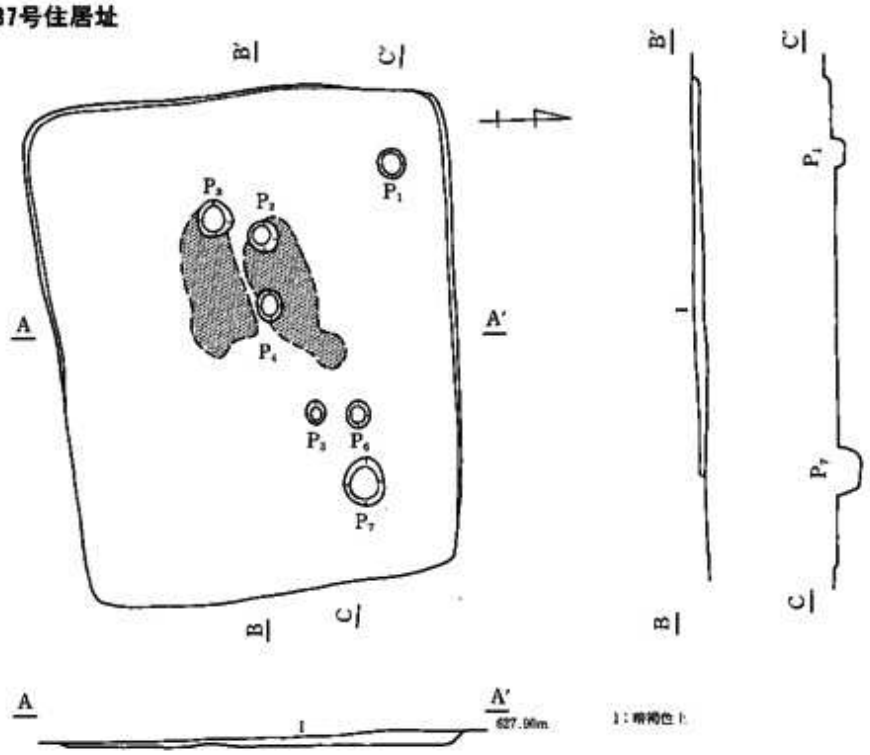


第24図　古屋敷遺跡第32・33号住居址

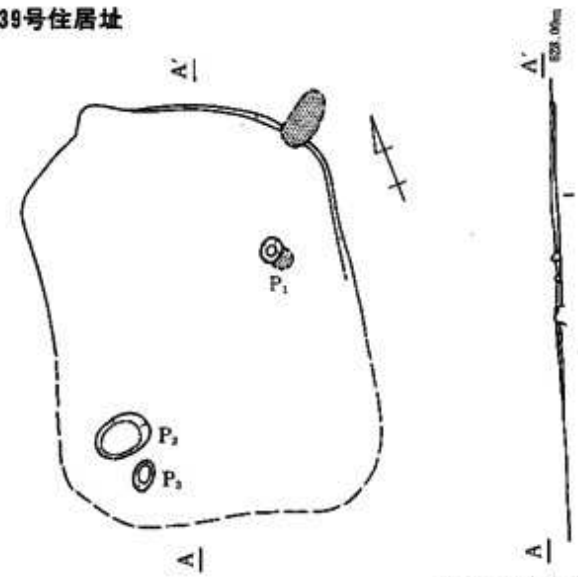


第25図　古屋敷遺跡第35・36・61号住居址

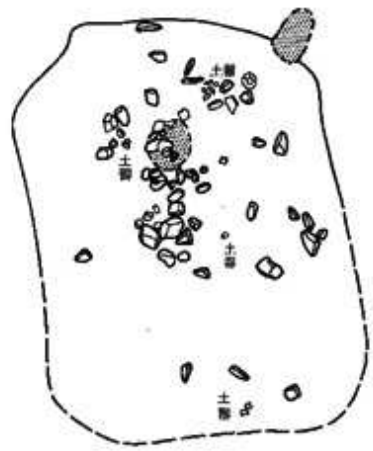
第37号住居址



第39号住居址



出土状況

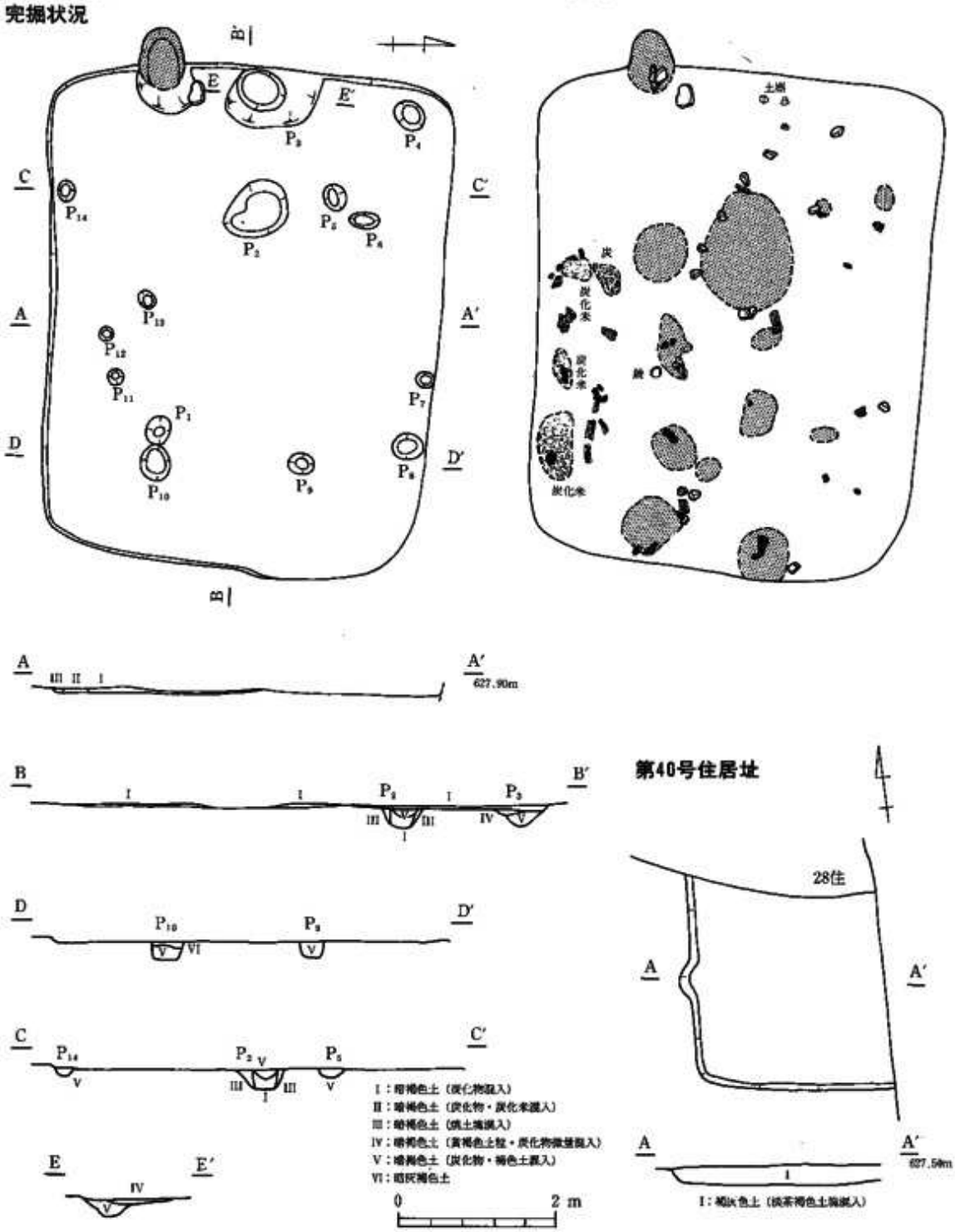


1：暗褐色土（炭化物・焼土少量混入）

第26図　古屋敷遺跡第37・39号住居址

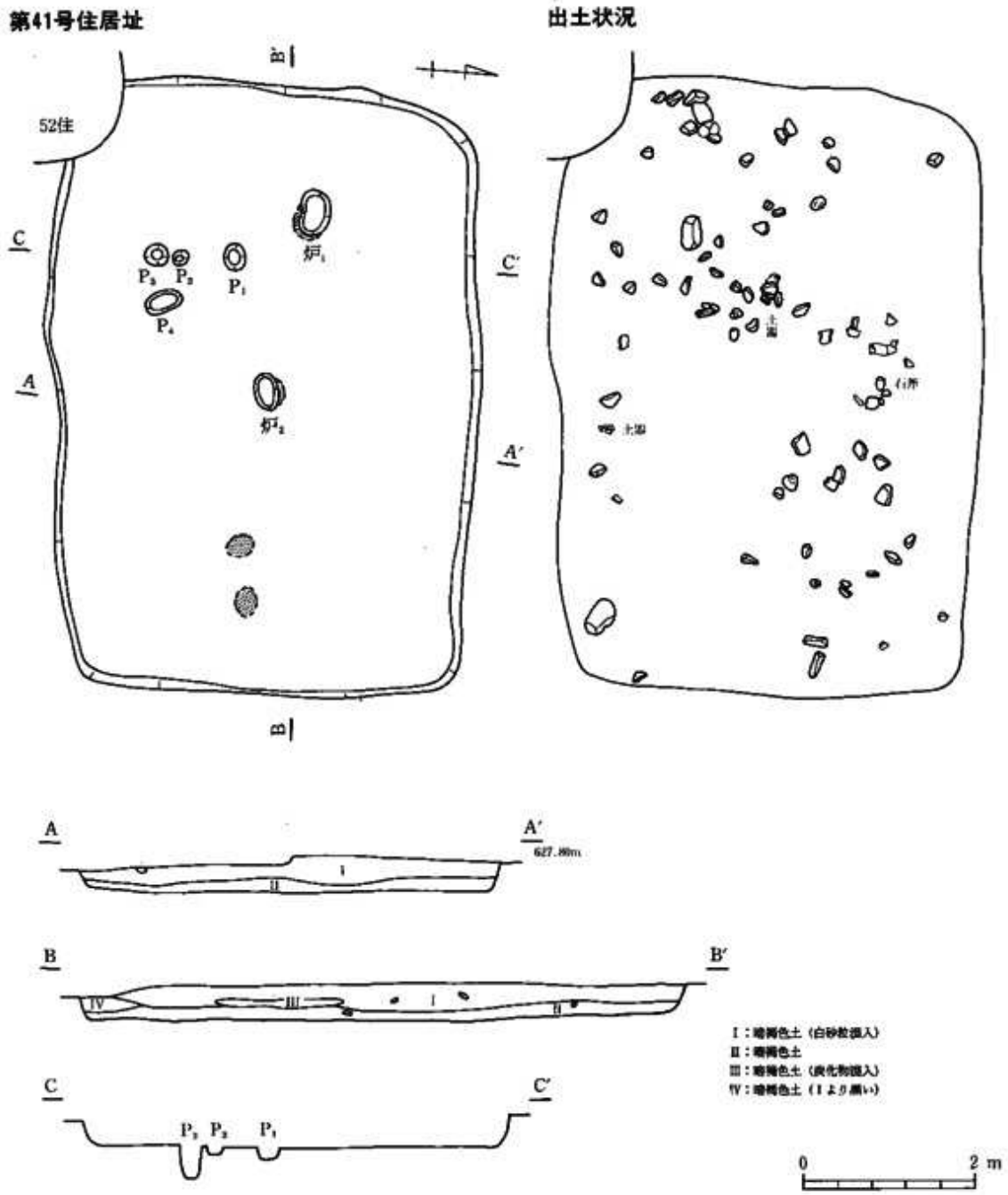
第38号住居址
完掘状況

出土状況



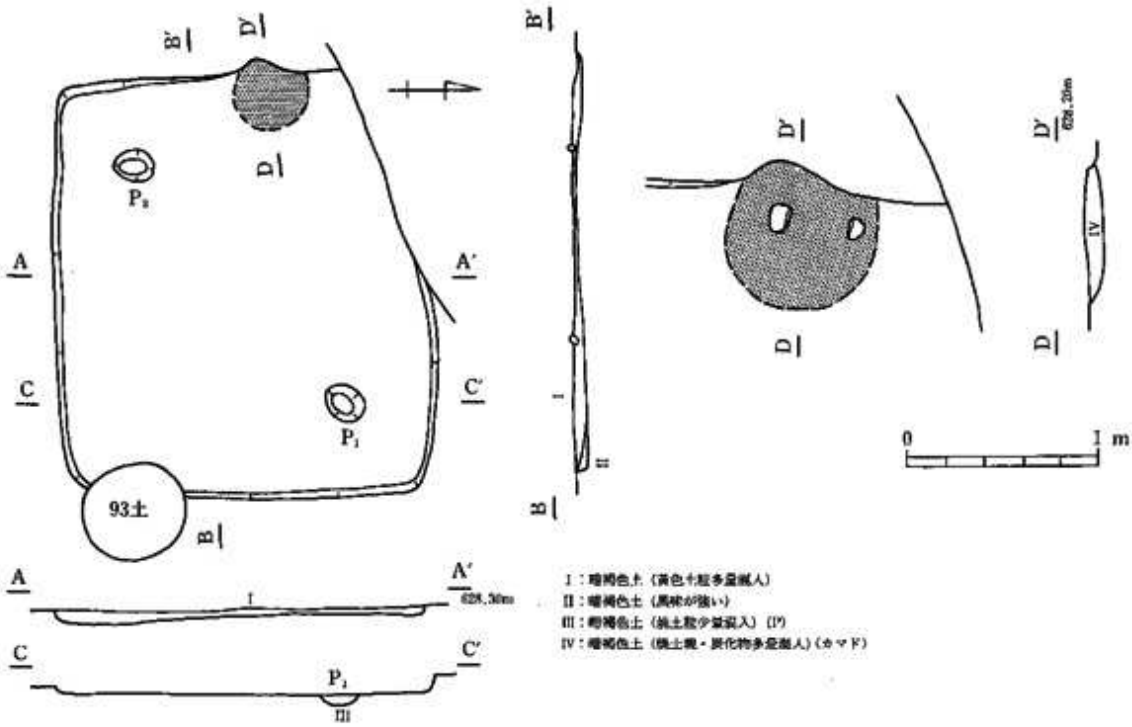
第40号住居址

第27図　古屋敷遺跡第38・40号住居址



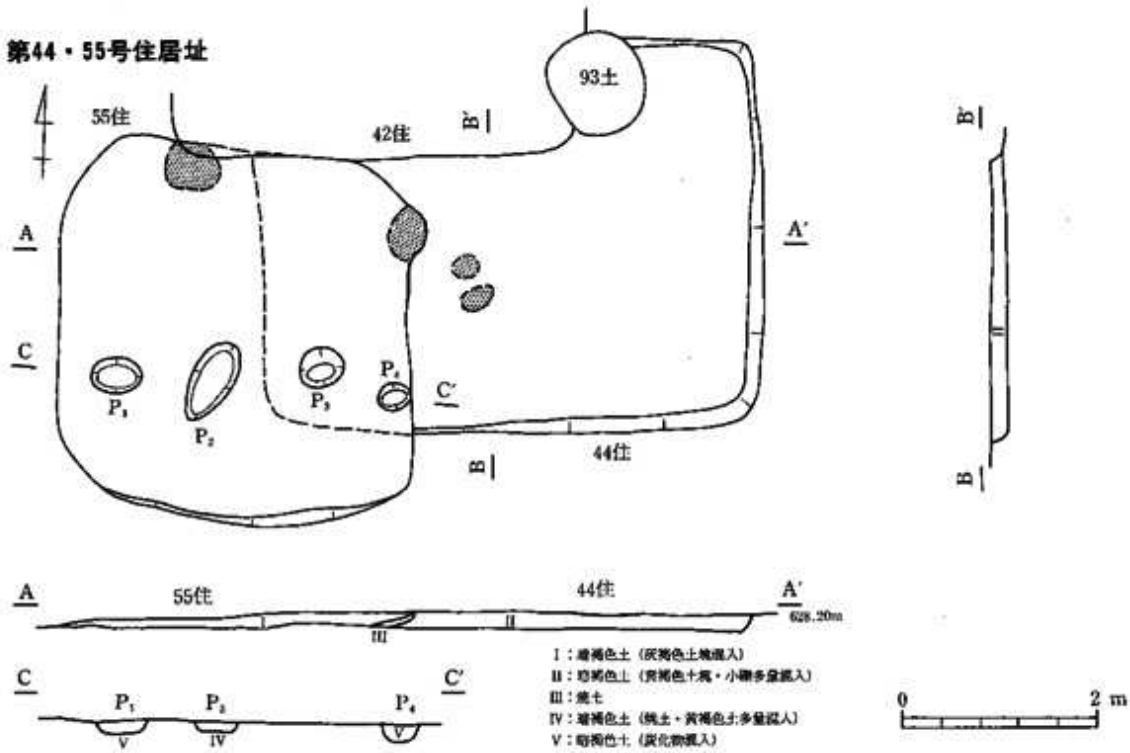
第28図　古屋敷遺跡第41号住居址

第42号住居址



I：暗褐色土（黄色十粒多量混入）
II：暗褐色土（黒味が強い）
III：明褐色土（焼土粒少量混入）（P）
IV：暗褐色土（焼土粒・炭化物多量混入）（カマド）

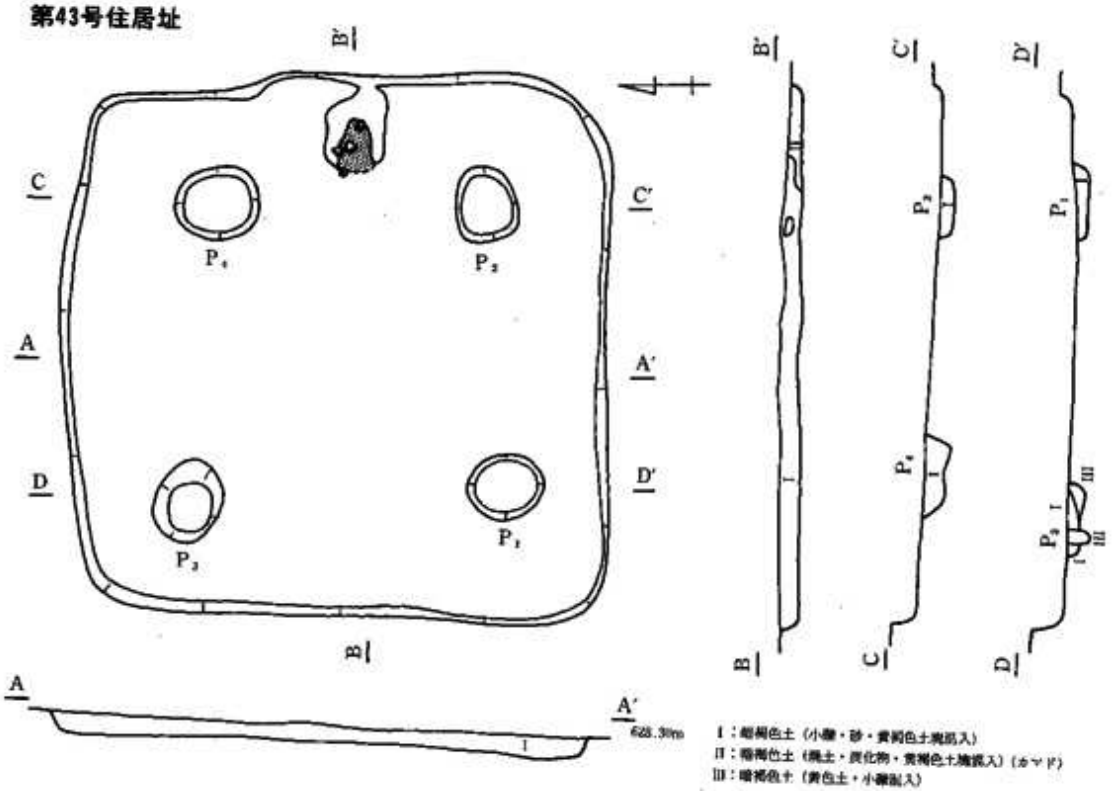
第44・55号住居址



I：暗褐色土（灰褐色土塊混入）
II：暗褐色土（黄褐色十粒・小礫多量混入）
III：焼土
IV：暗褐色土（焼土・黄褐色土多量混入）
V：暗褐色土（炭化物混入）

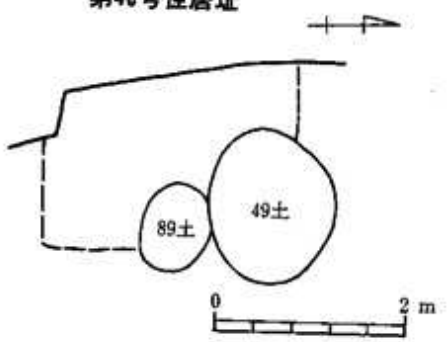
第29図　古屋敷遺跡第42・44・55号住居址

第43号住居址

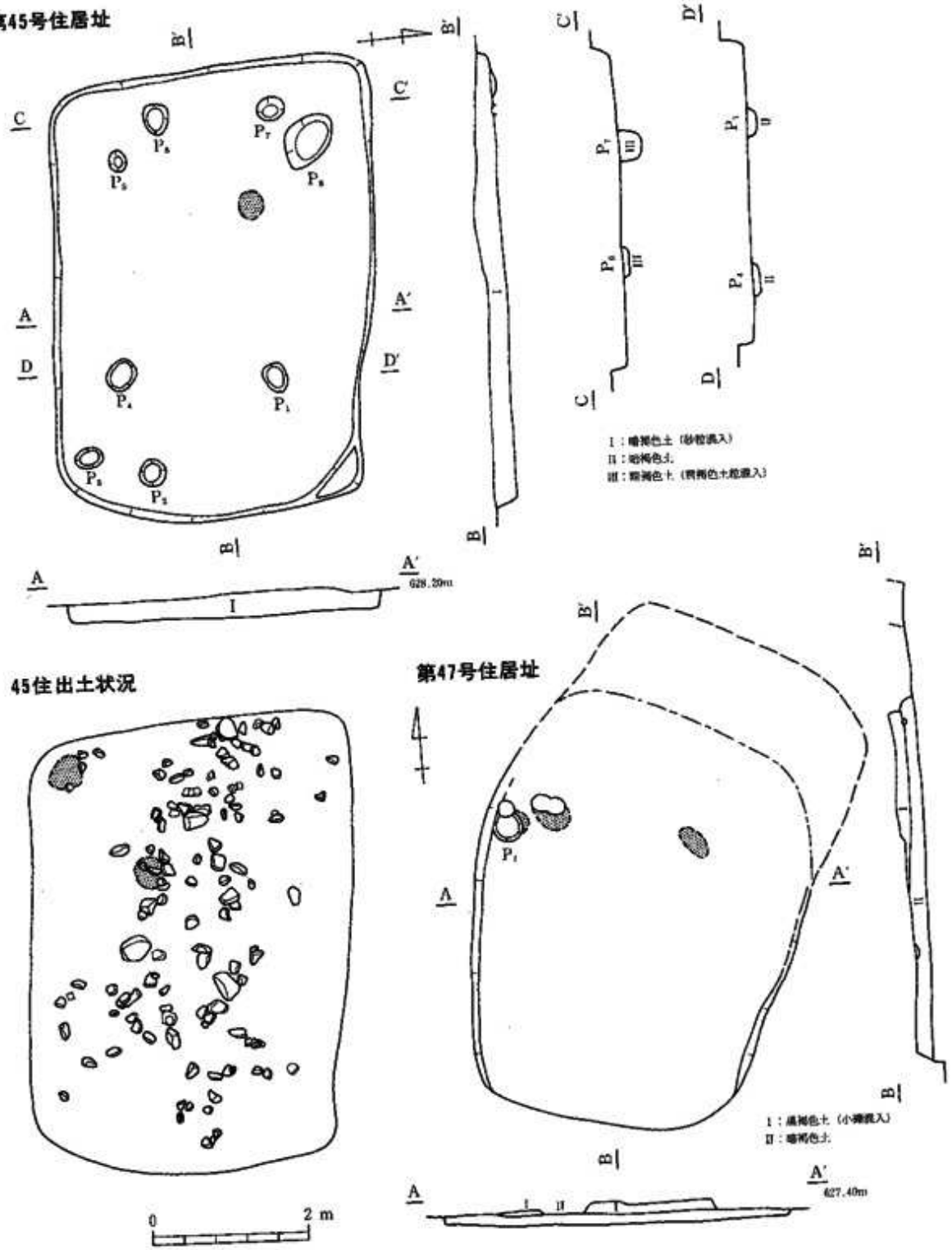


出土状況

第46号住居址

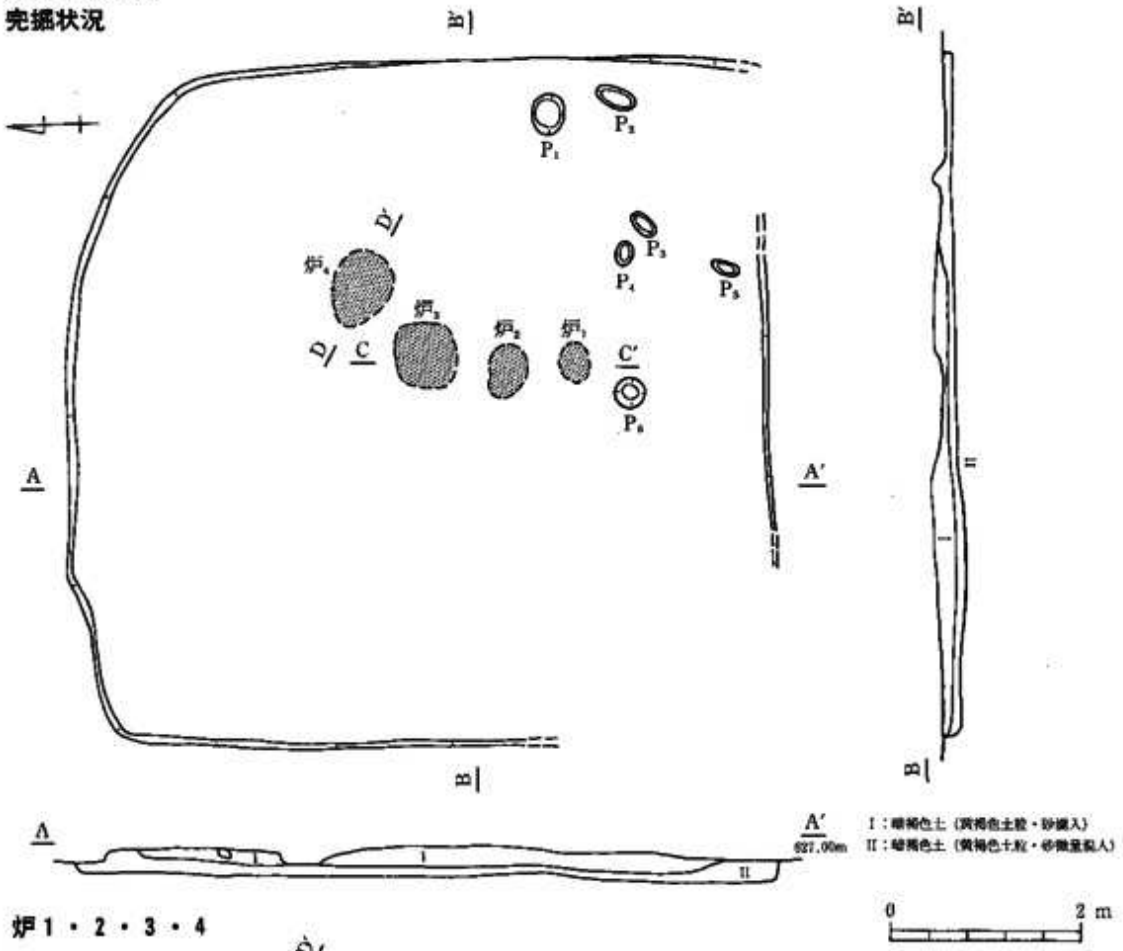


第30図　古屋敷遺跡第43・46号住居址

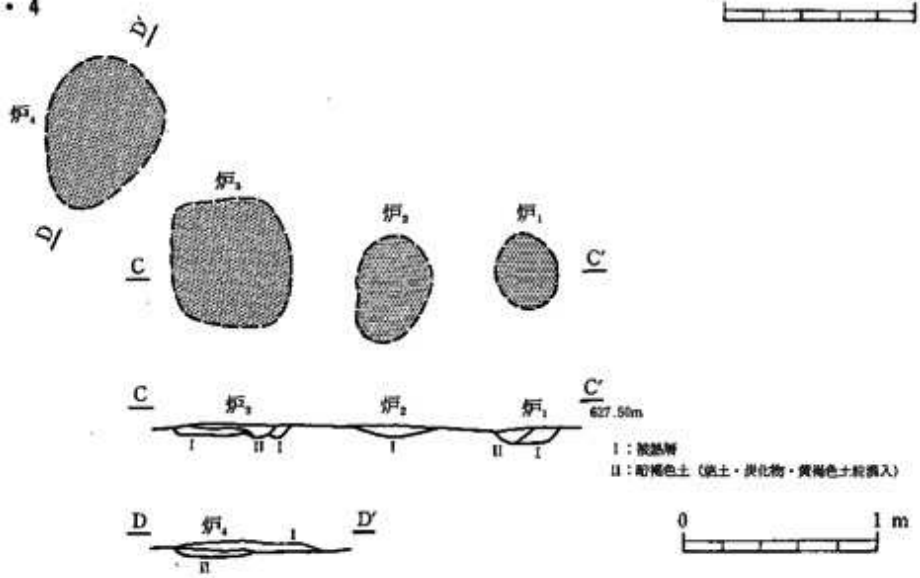


第31図　古屋敷遺跡第45・47号住居址

第48号住居址
完掘状況

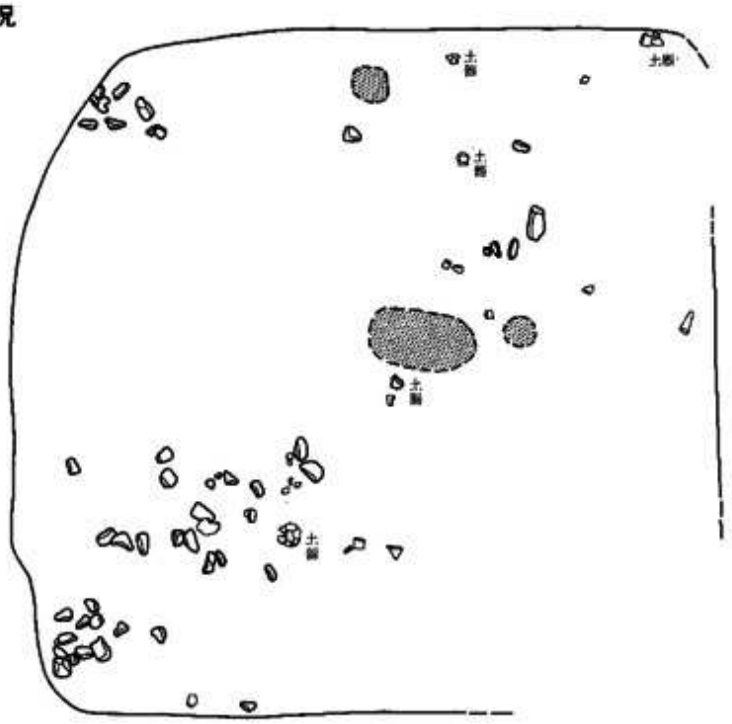


炉1・2・3・4

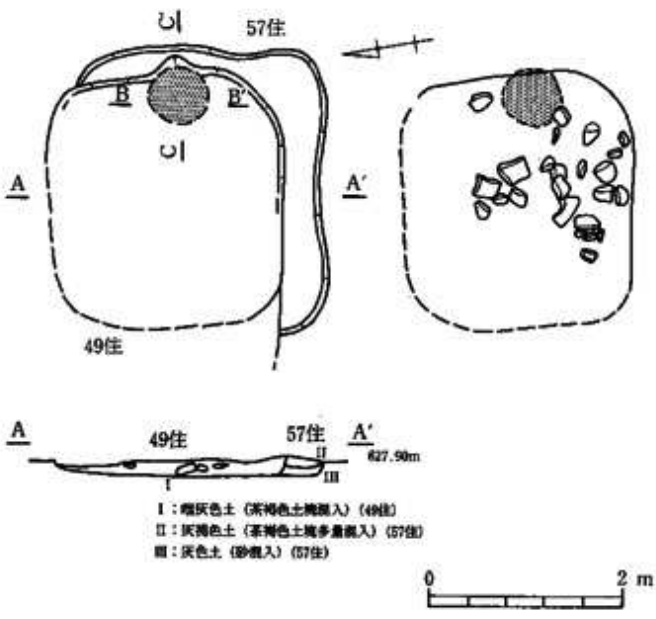


第32図　古屋敷遺跡第48号住居址

第48号住居址
出土状況

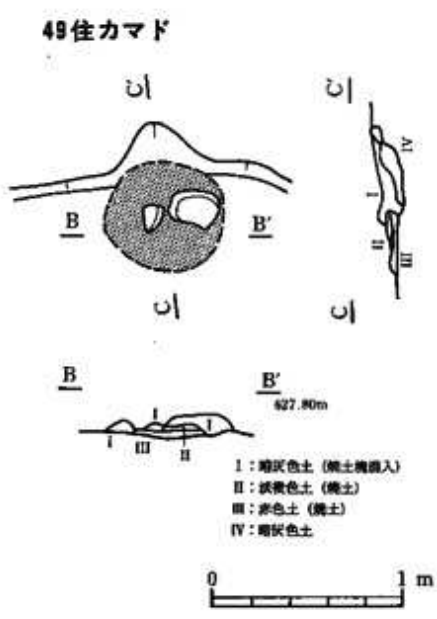


第49・57号住居址
完掘状況



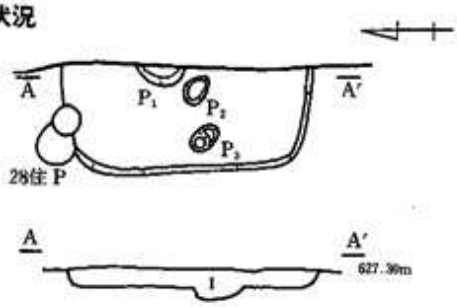
49住出土状況

49住カマド



第33図　古屋敷遺跡第48・49・57号住居址

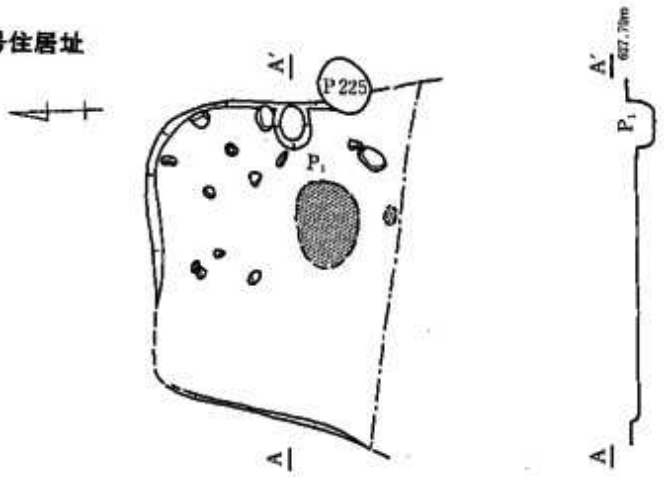
第50号住居址
完掘状況



出土状況

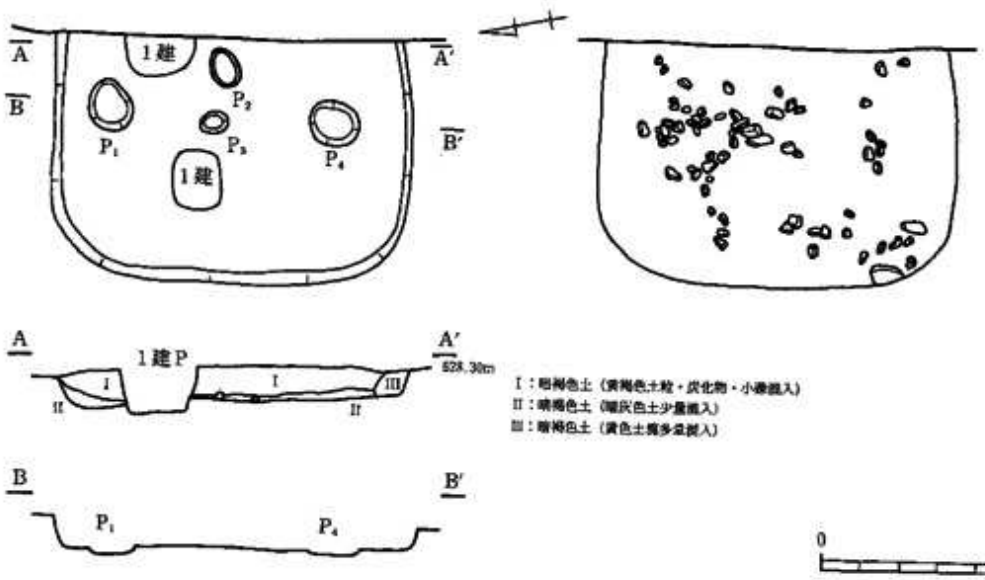
I：暗褐色土（黄褐色土粒・炭化物・小礫混入）

第52号住居址



第53号住居址

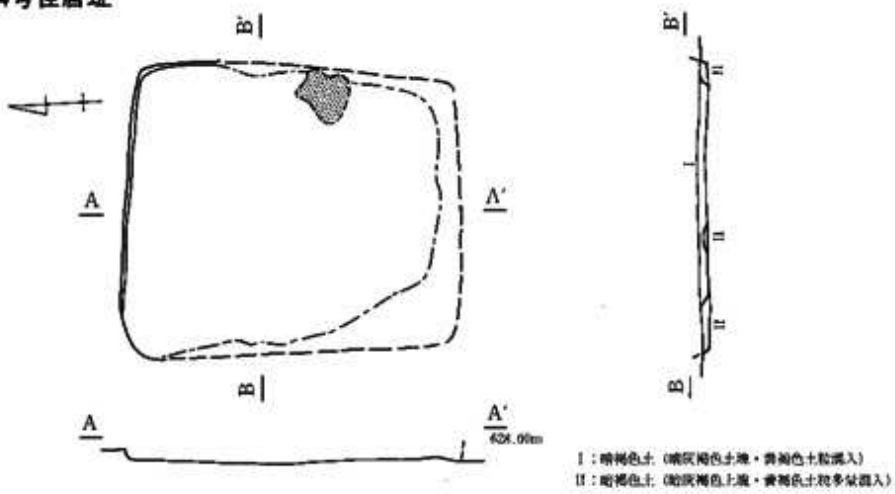
出土状況



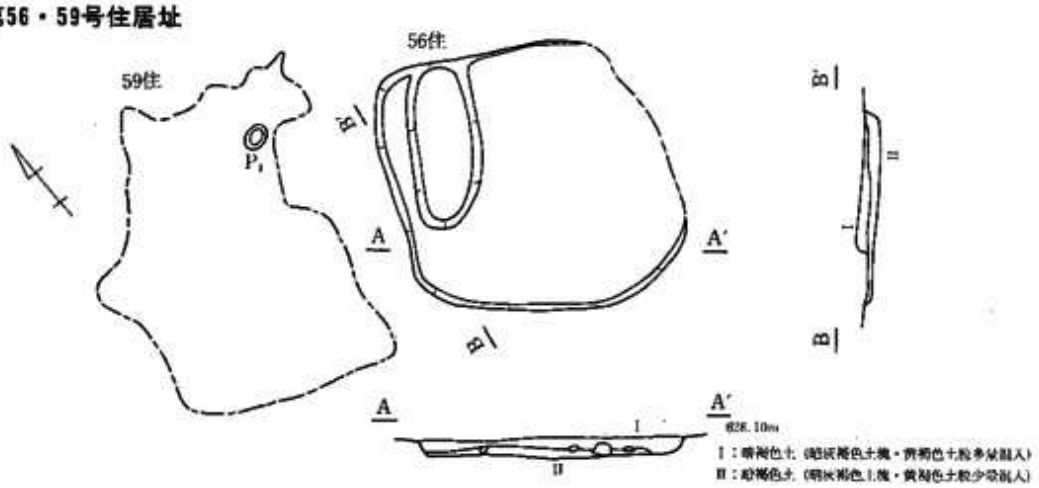
I：暗褐色土（黄褐色土粒・炭化物・小礫混入）
II：暗褐色土（暗灰色土少量混入）
III：暗褐色土（黄色土塊多量混入）

第34図　古屋敷遺跡第50・52・53号住居址

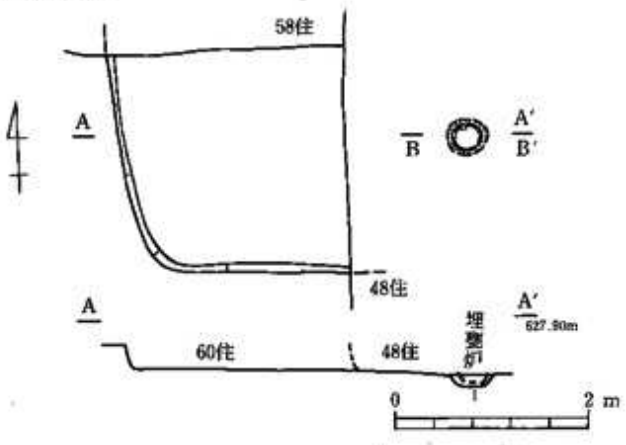
第54号住居址



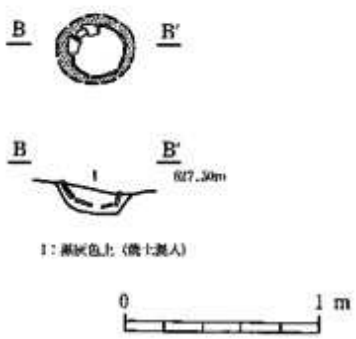
第56・59号住居址



第60号住居址

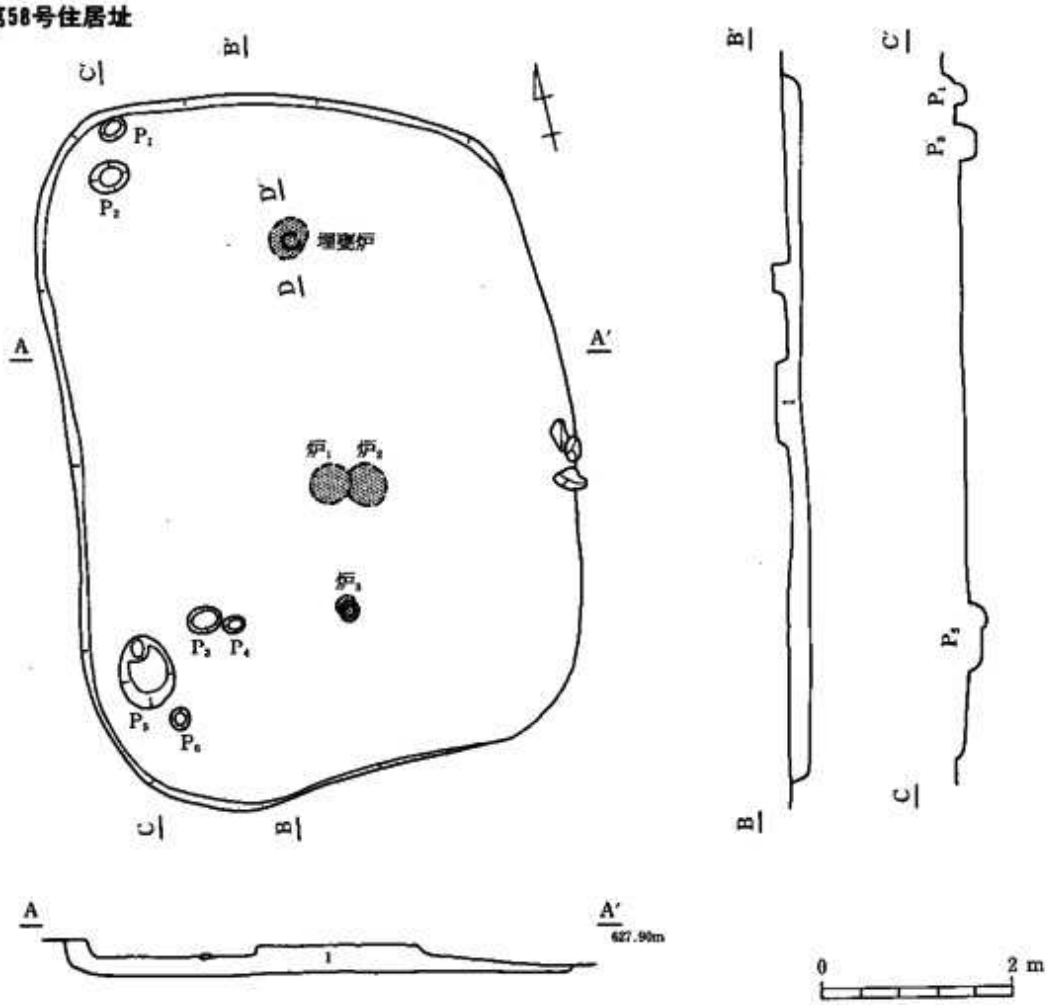


60住埋甕炉

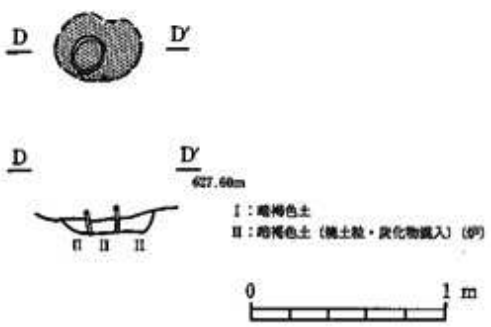


第35図　古屋敷遺跡第54・56・59・60号住居址

第58号住居址

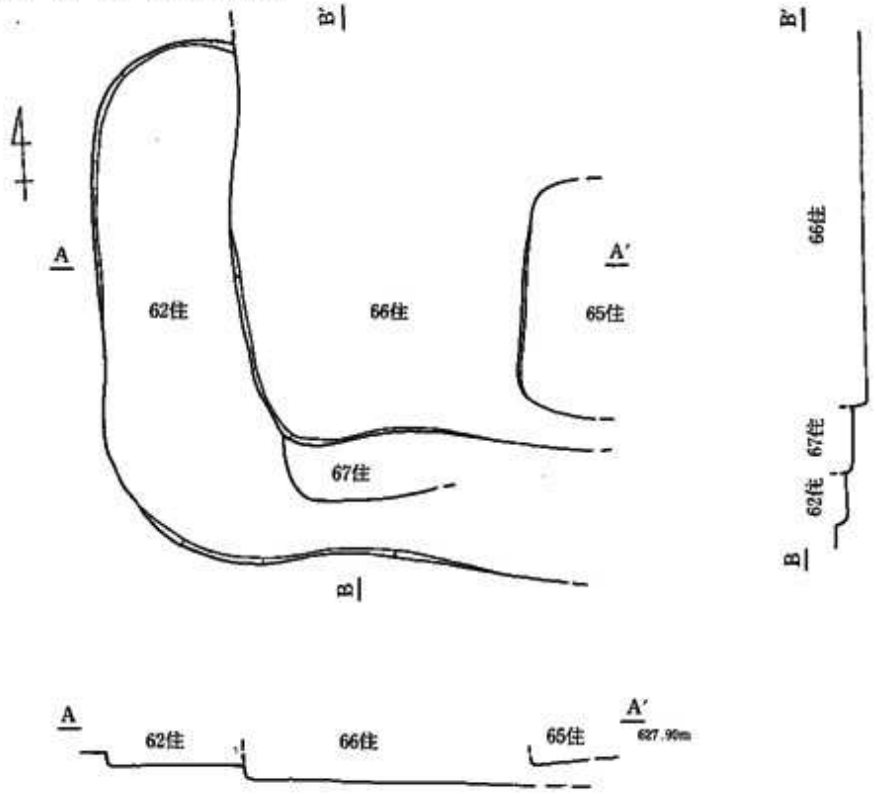


埋甕炉

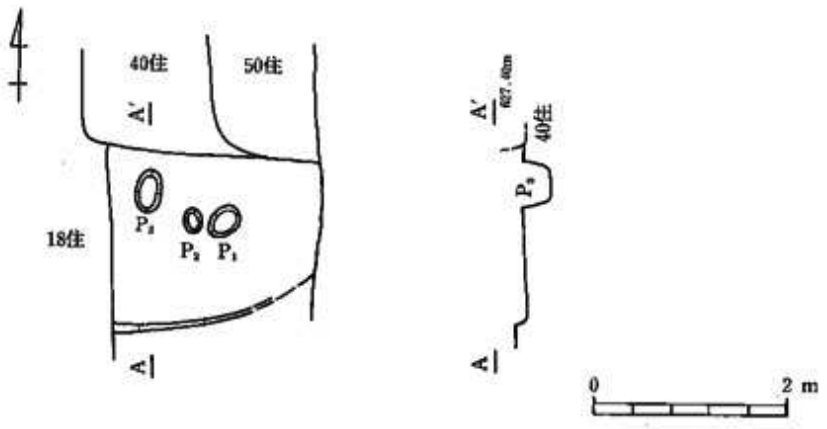


第36図　古屋敷遺跡第58号住居址

第62・65・66・67号住居址

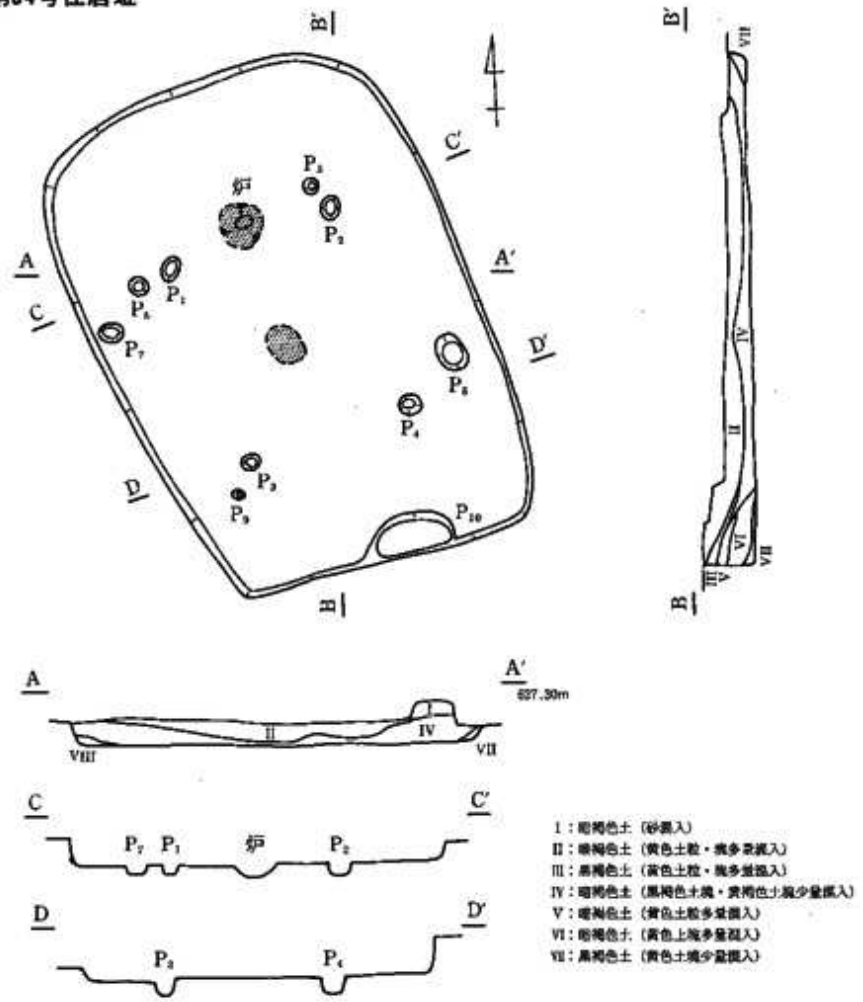


第63号住居址

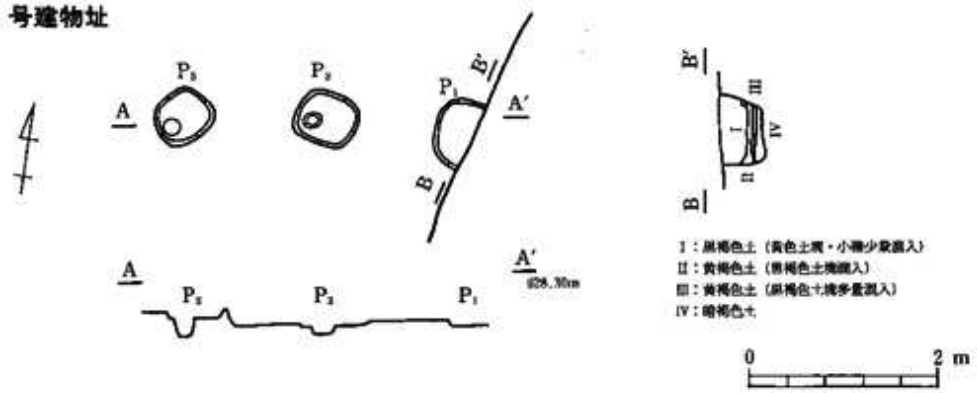


第37図　古屋敷遺跡第62・63・65・66・67号住居址

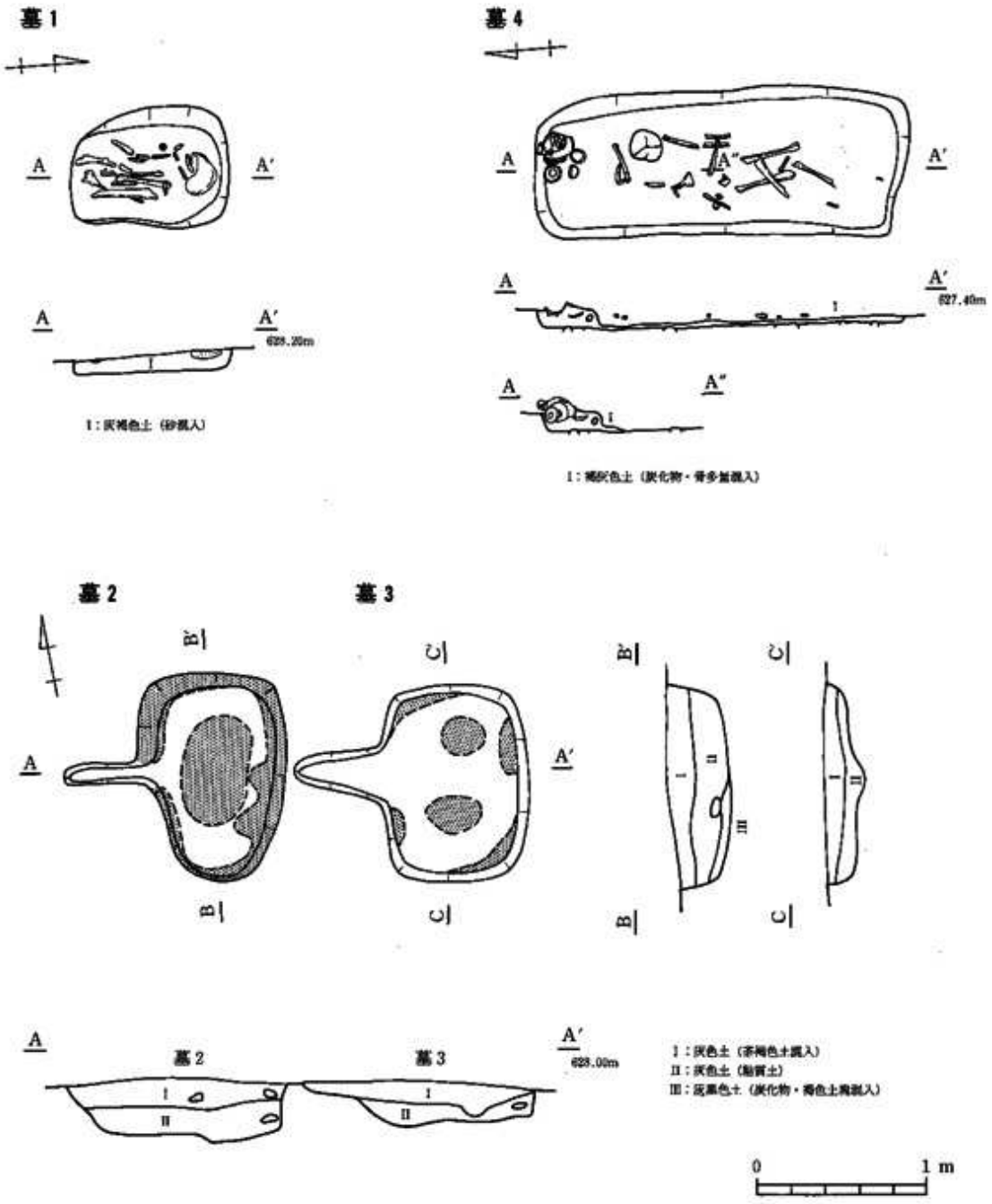
第64号住居址



第１号建物址

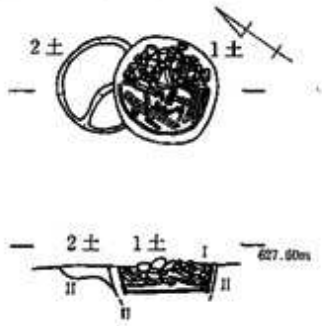


第38図　古屋敷遺跡第64号住居址・第１号建物址

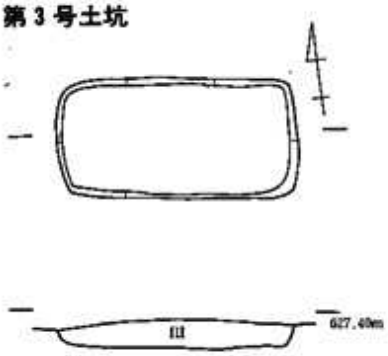


第39図　古屋敷遺跡墓址

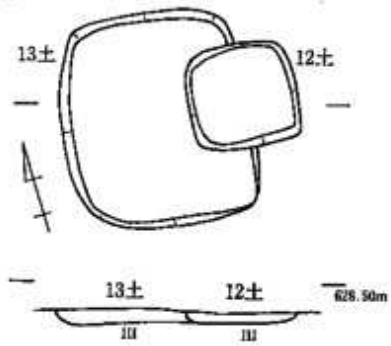
第1・2号土坑



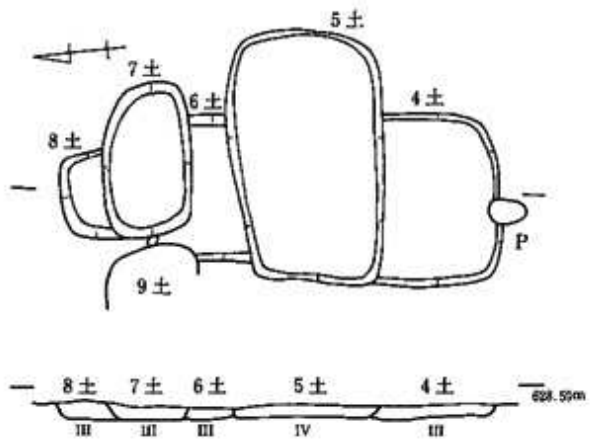
第3号土坑



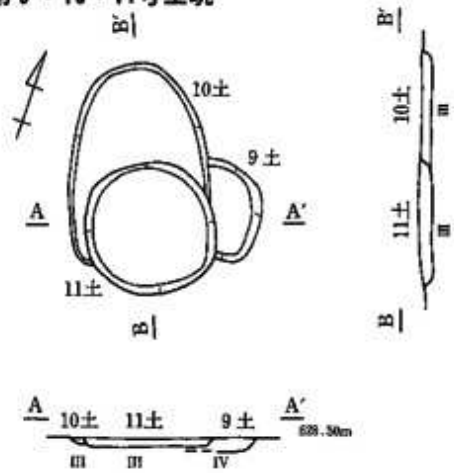
第12・13号土坑



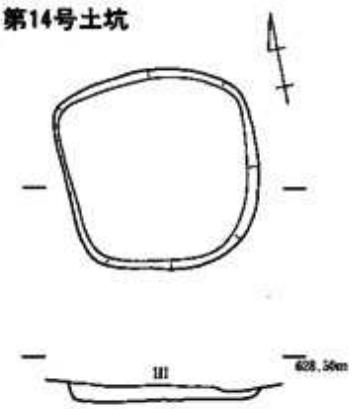
第4・5・6・7・8号土坑



第9・10・11号土坑

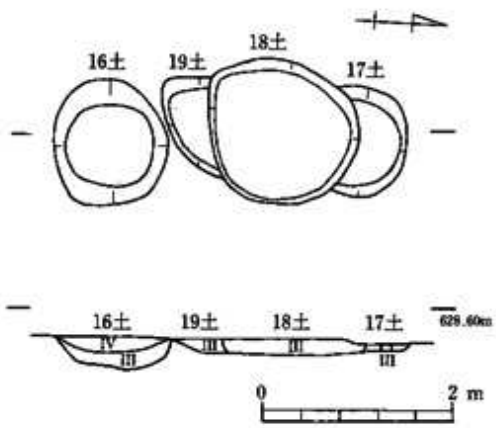


第14号土坑

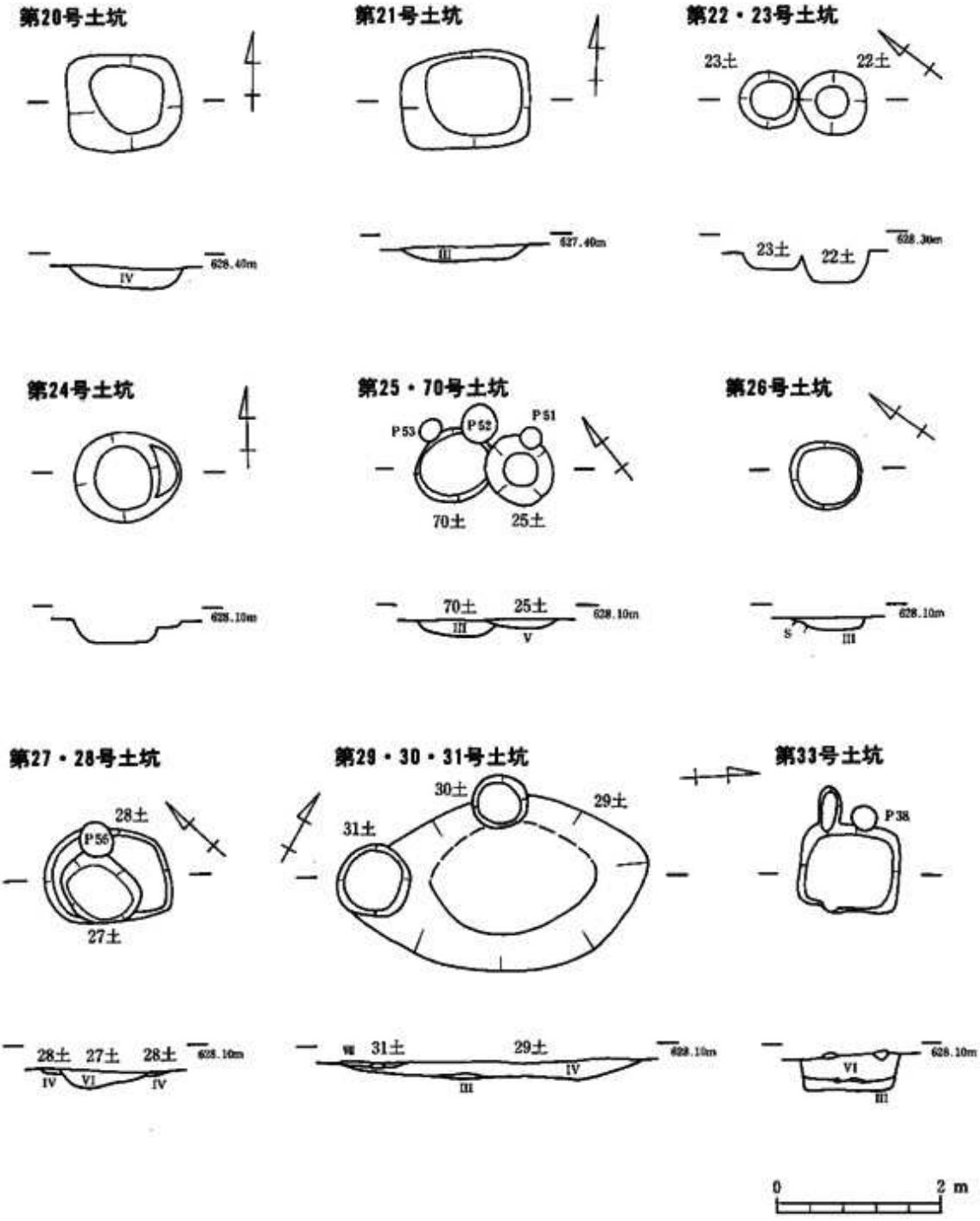


第15号土坑

第16・17・18・19号土坑

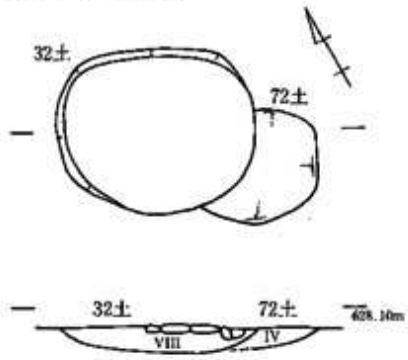


第40図　古屋敷遺跡土坑(1)

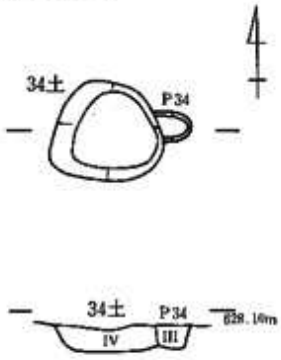


第41図　古屋敷遺跡土坑(2)

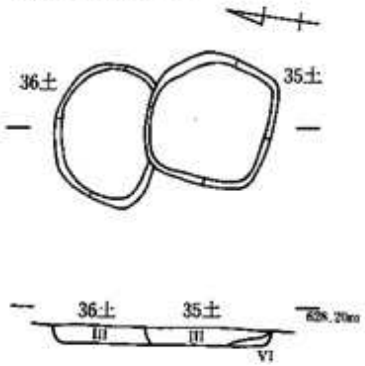
第32・72号土坑



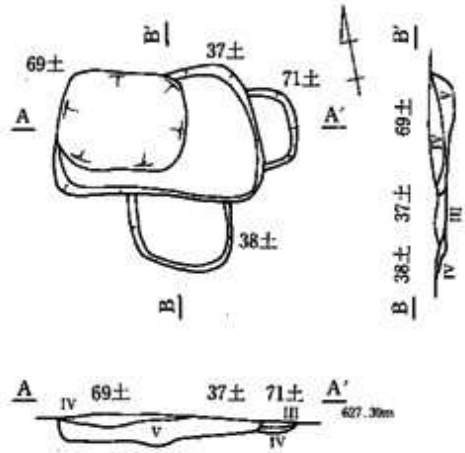
第34号土坑



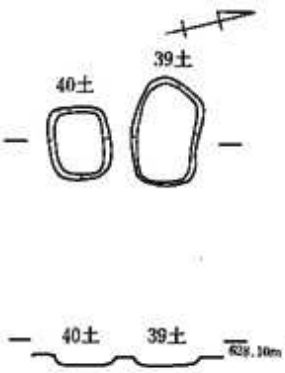
第35・36号土坑



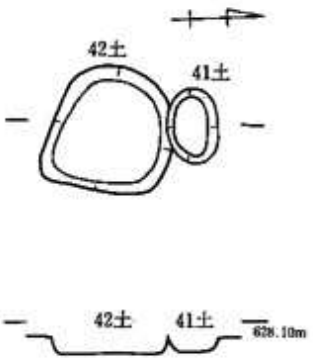
第37・38・69・71号土坑



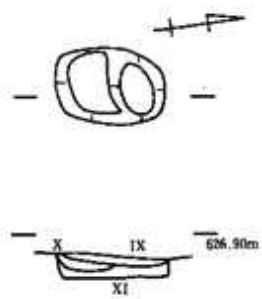
第39・40号土坑



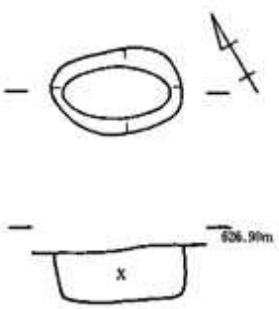
第41・42号土坑



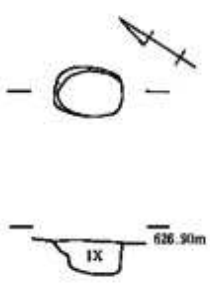
第43号土坑



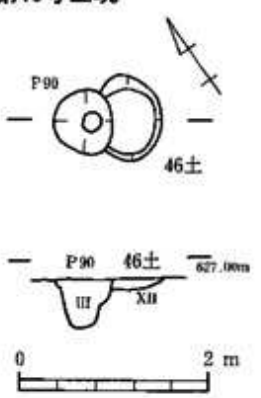
第44号土坑



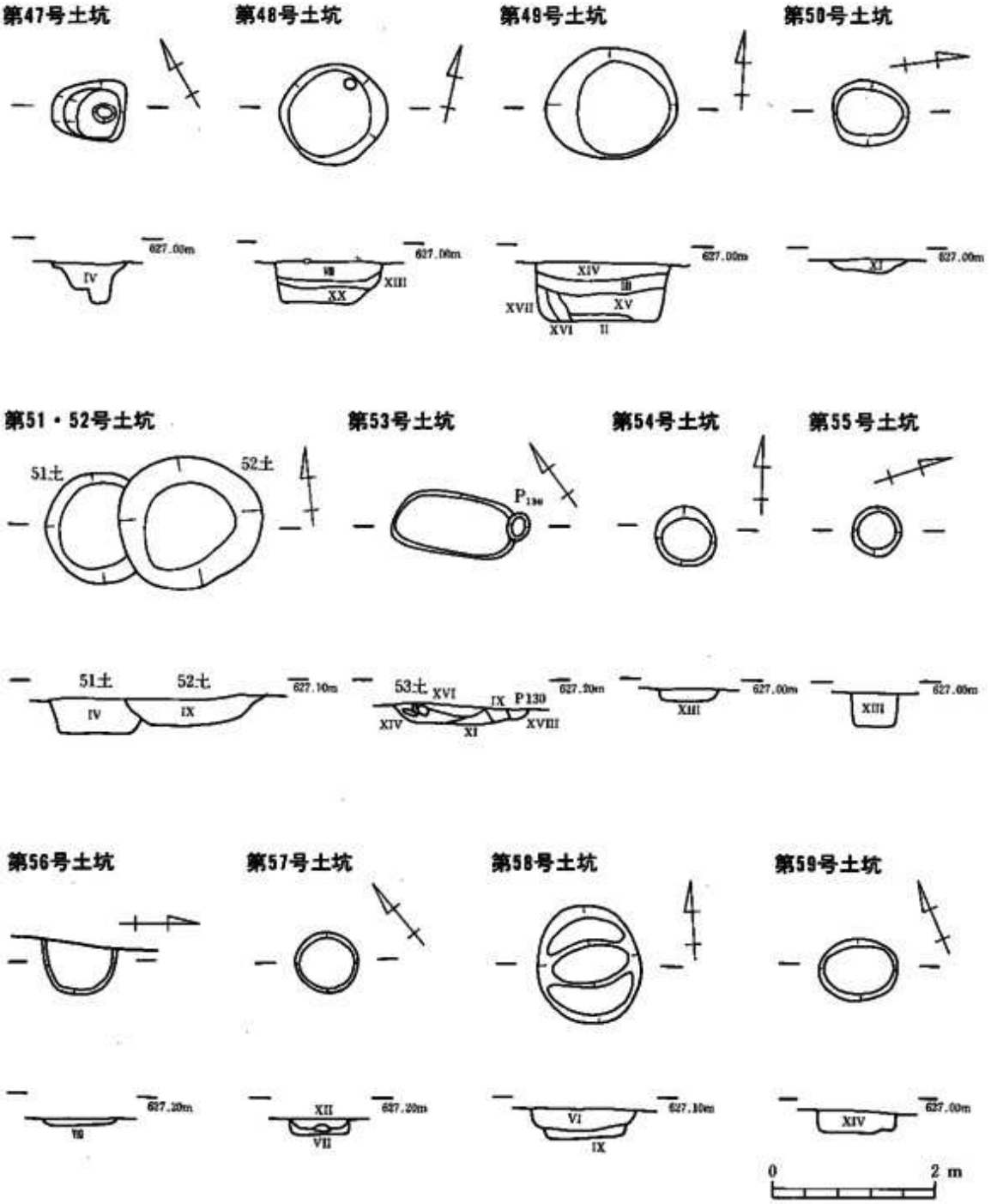
第45号土坑



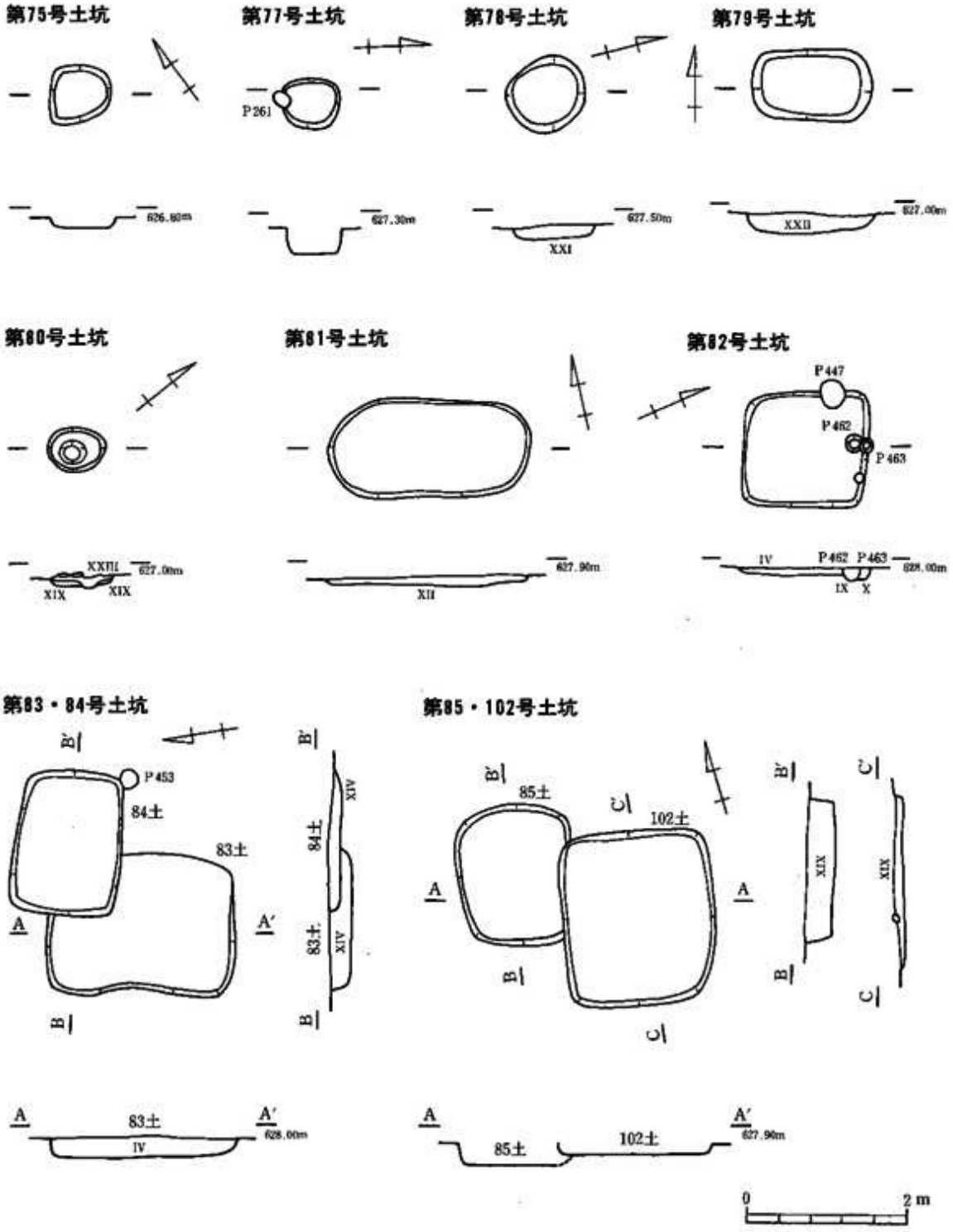
第46号土坑



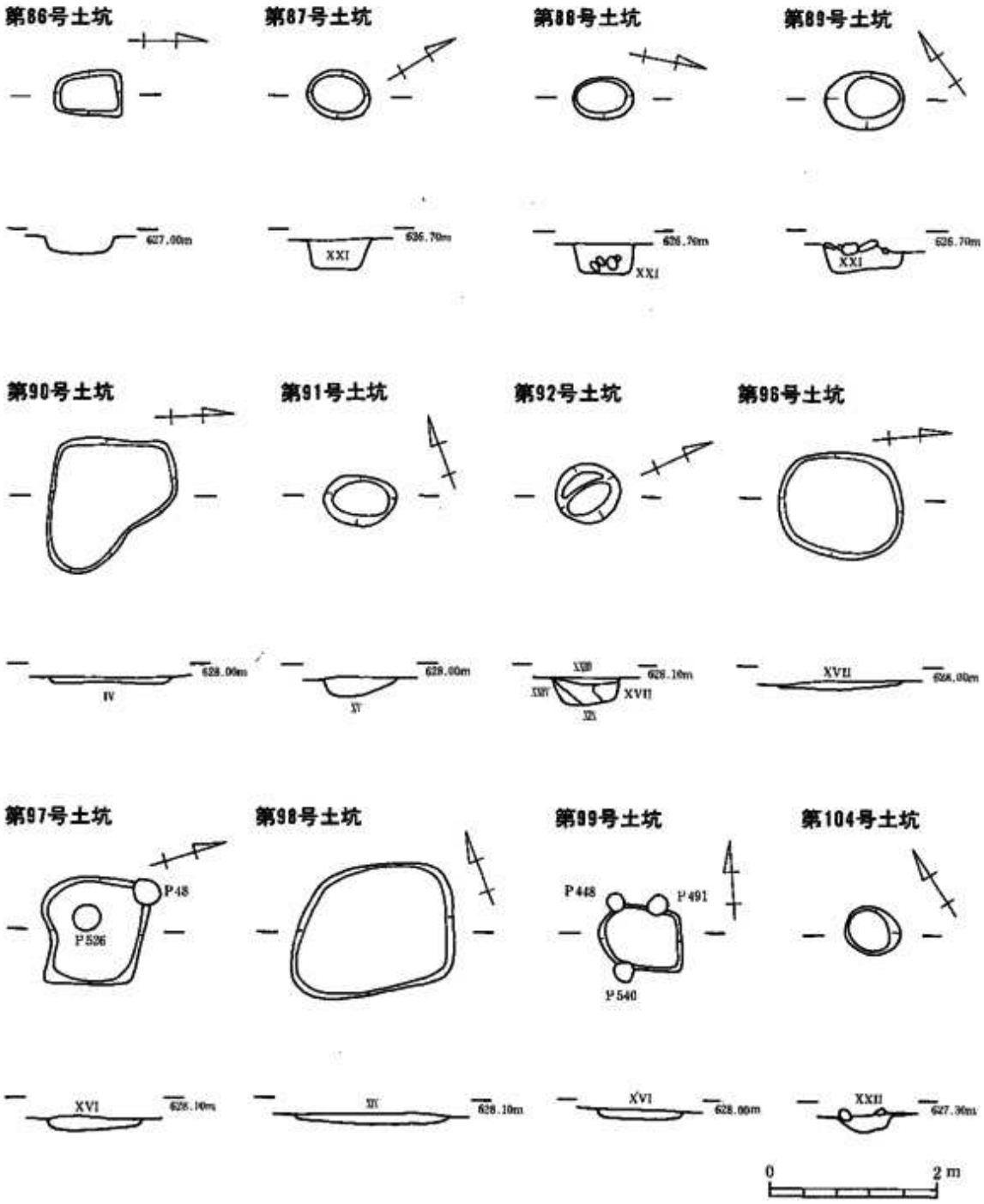
第42図　古屋敷遺跡土坑(3)



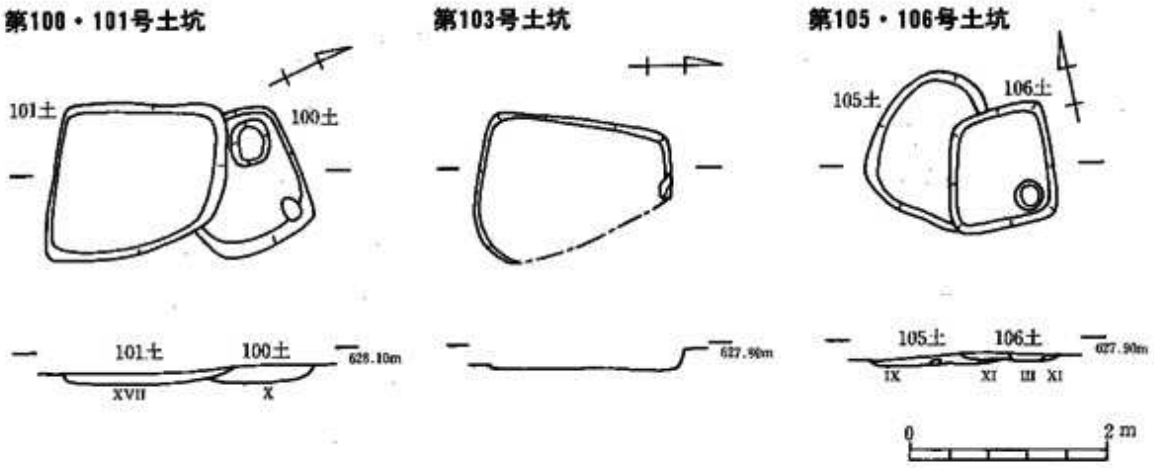
第43図　古屋敷遺跡土坑(4)



第45図　古屋敷遺跡土坑(6)



第46図　古屋敷遺跡土坑(7)



土坑統一土層

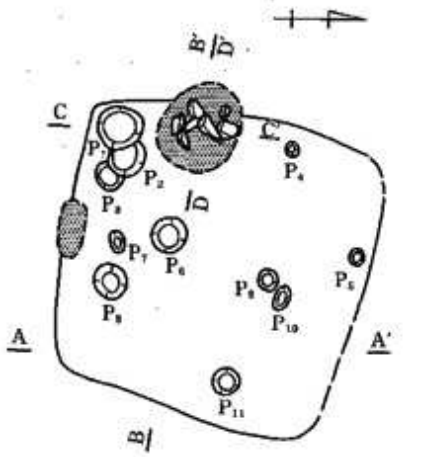
Ⅰ：黒色土（炭化物・灰多量混入）
Ⅱ：黒色粘土
Ⅲ：灰色土
Ⅳ：灰色土（茶褐色土混入）
Ⅴ：黒灰色土
Ⅵ：灰色土（炭化物・茶褐色土粒混入）
Ⅶ：灰色土（砂・茶褐色土混入）
Ⅷ：灰色土（茶褐色土粒多量混入）
Ⅸ：暗灰色土（茶褐色土塊・砂少量混入）
Ⅹ：灰褐色土（茶褐色土塊多量・砂少量混入）
Ⅺ：暗灰色土（砂混入）
Ⅻ：灰褐色土（茶褐色土塊混入）

XIII：灰褐色土（炭化物・小礫・砂混入）
XIV：灰色土（黄茶褐色塊多量・小礫混入）
XV：暗灰色土（黄色土塊・黄褐色土塊多量混入）
XVI：暗褐色土（黄褐色七塊多量混入）
XVII：暗褐色土
XVIII：暗褐色土（炭化物・黄色土塊少量混入）
XIX：暗褐色土（黄褐色土塊少量混入）
XX：暗灰色土
XXI：黒褐色土（焼土・炭化物混入）
XXII：黒褐色土
XXIII：黒褐色土（黄色土粒混入）
XXIV：暗褐色土（砂混入）

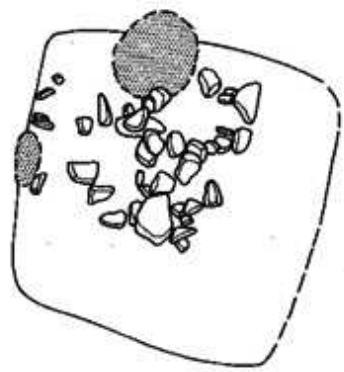
第47図　古屋敷遺跡土坑(8)

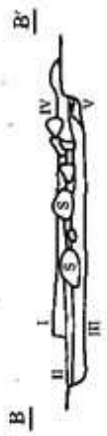
第１号住居址

完掘状況

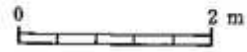


出土状況

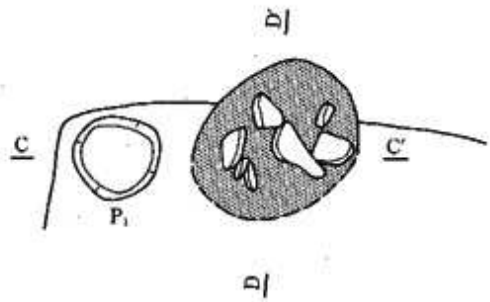


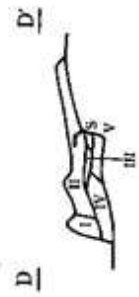


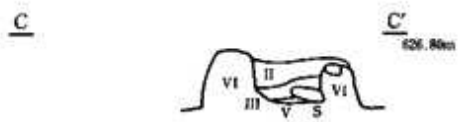
I：褐色土（茶褐色土粒混入）
II：褐灰色土（茶褐色土粒混入）
III：褐灰色土（茶褐色土多量混入）
IV：褐灰色土（焼土粒・炭化物混入）
V：褐灰色土（茶褐色土粒・焼土塊混入）



カマド



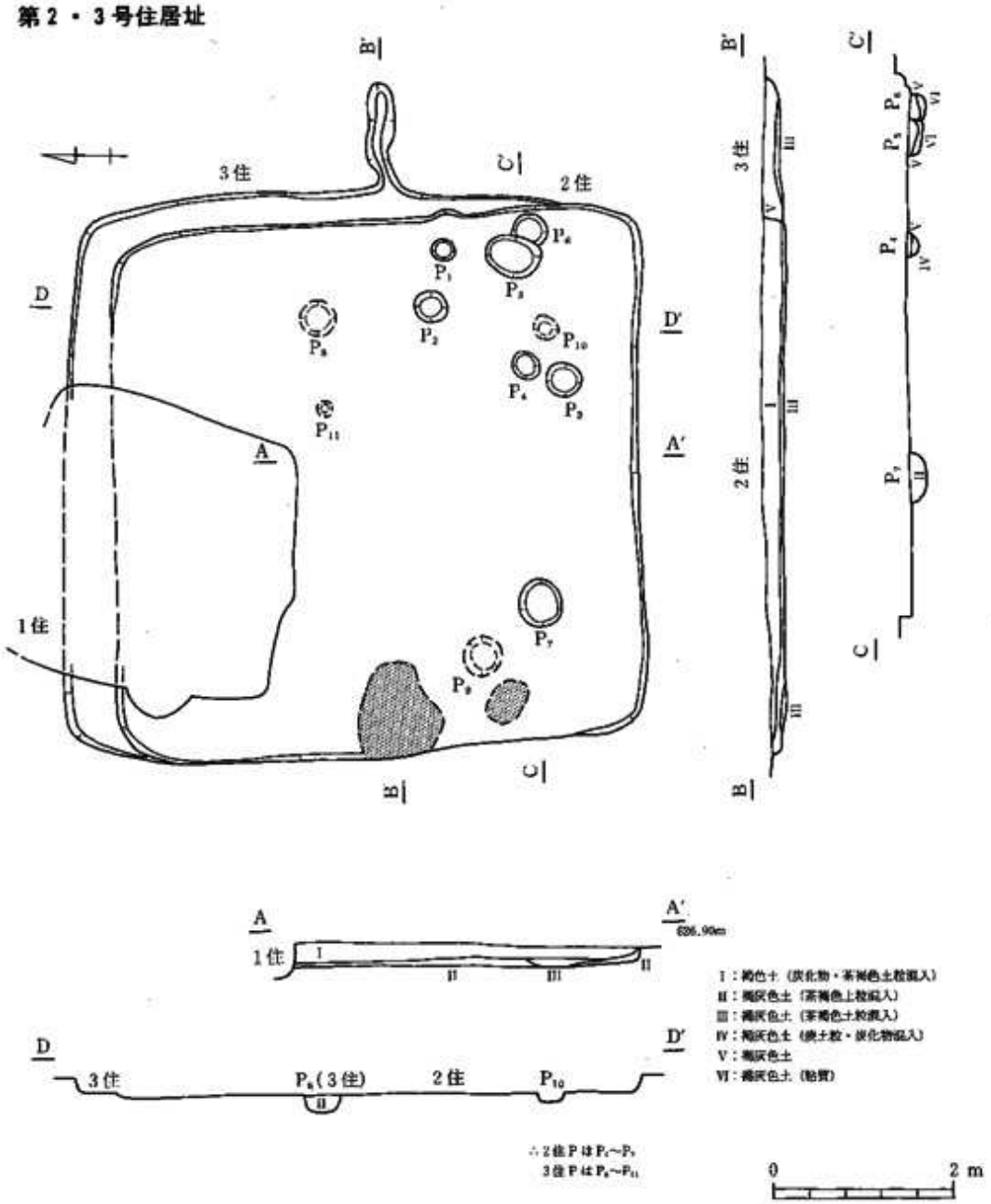




I：褐灰色土
II：褐灰色土（焼土粒・炭化物混入）
III：黒褐色土
IV：褐灰色土（茶褐色土粒混入）
V：褐灰色土（茶褐色土粒・焼土塊混入）
VI：褐色土

第48図　前田遺跡第１号住居址

第２・３号住居址



第49図　前田遺跡第２・３号住居址

全景（南から）

全景（北から）

第1図版　古屋敷遺跡

第１号住居址（弥生時代後期）

第２号住居址（平安時代後期）

第４号住居址（平安時代後期）

第７号住居址（平安時代後期）

第９号住居址（古墳時代後期）

第10号住居址（弥生時代後期・西から）

第10号住居址（弥生時代後期・東から）

第11号住居址（古墳時代中期）

第２図版　古屋敷遺跡

第14号住居址（弥生時代後期・南から）

第14号住居址（弥生時代後期・北から）

第16号住居址（弥生時代後期）

第17号住居址（平安時代後期）

第20号住居址（弥生時代後期）

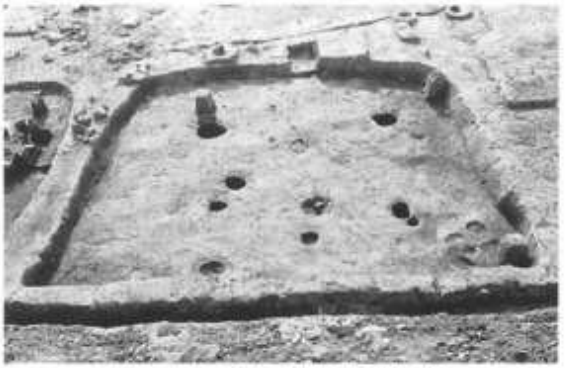
第22号住居址（平安時代後期）

第25号住居址（古墳時代後期）

第28号住居址（平安時代前期）

第３図版　古屋敷遺跡

第30号住居址（古墳時代後期）



第31号住居址（弥生時代後期）

第32号住居址（古墳時代中期）

第33号住居址（平安時代後期）

第34号住居址（不明）

第35号住居址（平安時代後期）

第36号住居址（弥生時代後期）

第38号住居址（平安時代後期）

第4図版　古屋敷遺跡

第39号住居址（平安時代後期）

第41号住居址（弥生時代後期・東から）

第41号住居址（弥生時代後期・西から）

第42号住居址（古墳時代後期）

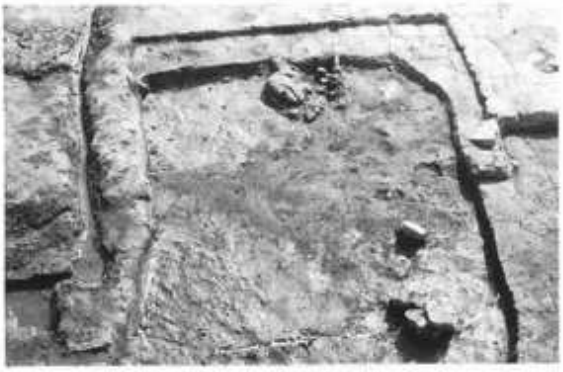
第43号住居址（古墳時代末期）

第45号住居址（弥生時代後期）

第47号住居址（弥生時代後期）

第48号住居址（古墳時代中期）

第5図版　古屋敷遺跡



第49号住居址（平安時代？）

第50号住居址（不明）

第52号住居址（平安時代後期）

第53号住居址（不明）

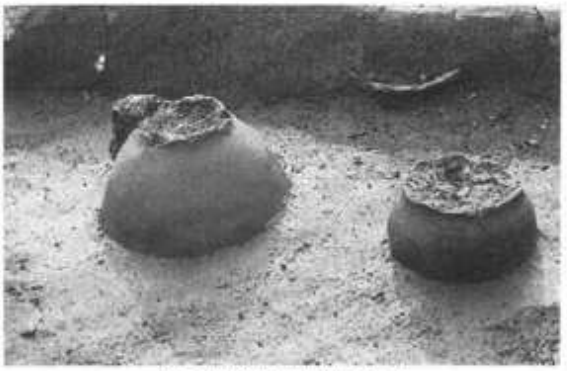
第54号住居址（不明）

第55号住居址（不明）

第56号住居址（不明）

第6図版　古屋敷遺跡

第３号住居址遺物出土



第14号住居址遺物出土

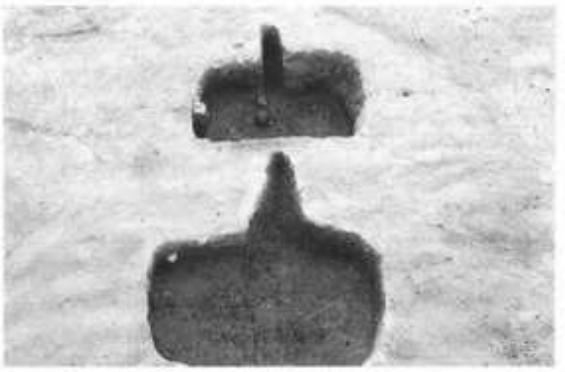
第25号住居址遺物出土

同左

第25号住居址カマド遺物出土

第35号住居址カマド

第１号墓址人骨出土状況



第２・３号墓址

第７図版　古屋敷遺跡

第4号墓址人骨出土状況

第4号墓址遺物出土

古屋敷遺跡全景（南から）

古屋敷遺跡全景（北から）

前田遺跡全景

前田遺跡第1号住居址（平安時代）

前田遺跡第2号住居址（奈良時代）

前田遺跡第3号住居址（奈良時代）

第8図版　古屋敷遺跡・前田遺跡

松本市文化財調査報告　No.103

松本市大村
古屋敷遺跡
前田遺跡

平成5年3月22日　印刷
平成5年3月22日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390　長野県松本市丸の内3－7
TEL0263（34）3000
発行　松本市教育委員会
印刷　川越印刷株式会社